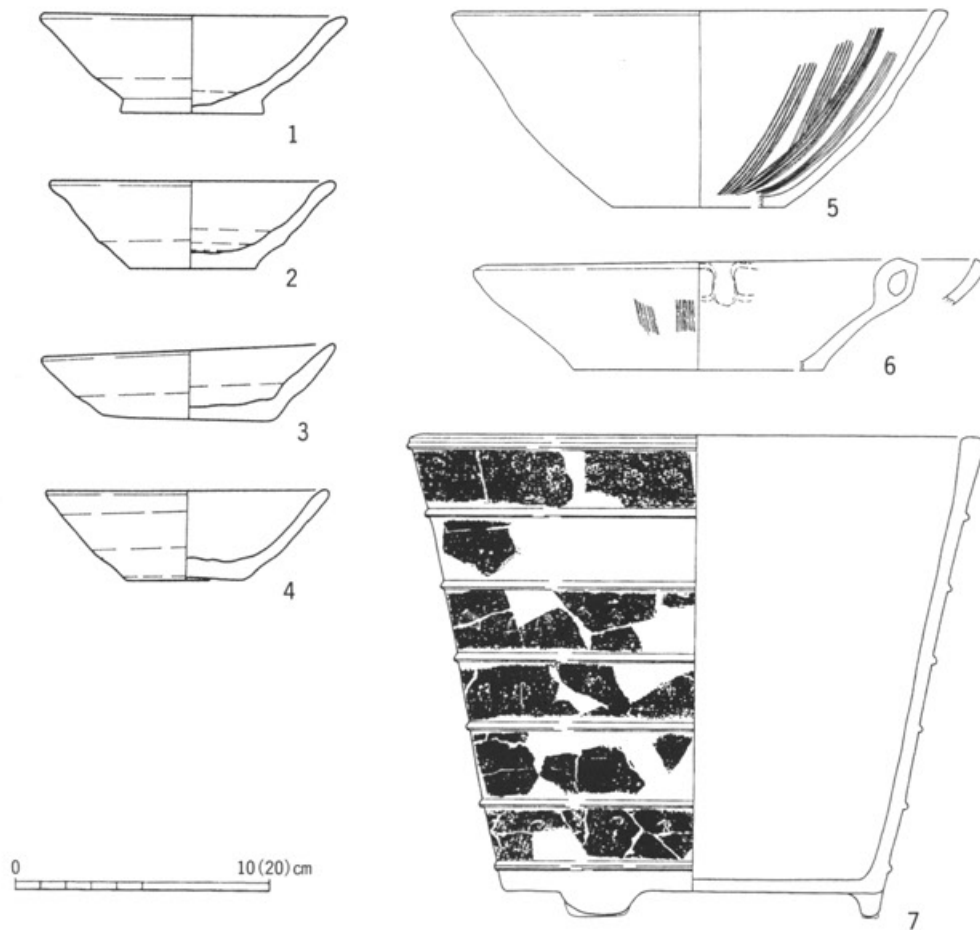


第237図 馬洗城

網原屋敷跡遺跡 (第238図)

文献③-186

網原屋敷跡遺跡は佐原市多田に所在する。利根川支流の小野川上流北岸、標高40mほどの台地上に位置する。網原村は中世にあっては大禰宜家の所領で、「葛原牧」の一部であった可能性がある。発掘調査では、



第238図 網原屋敷跡遺跡

土塁によって5つに区画される牧の捕込遺構が確認された。この区画の中で小規模ながら5棟の掘立柱建物を検出している。

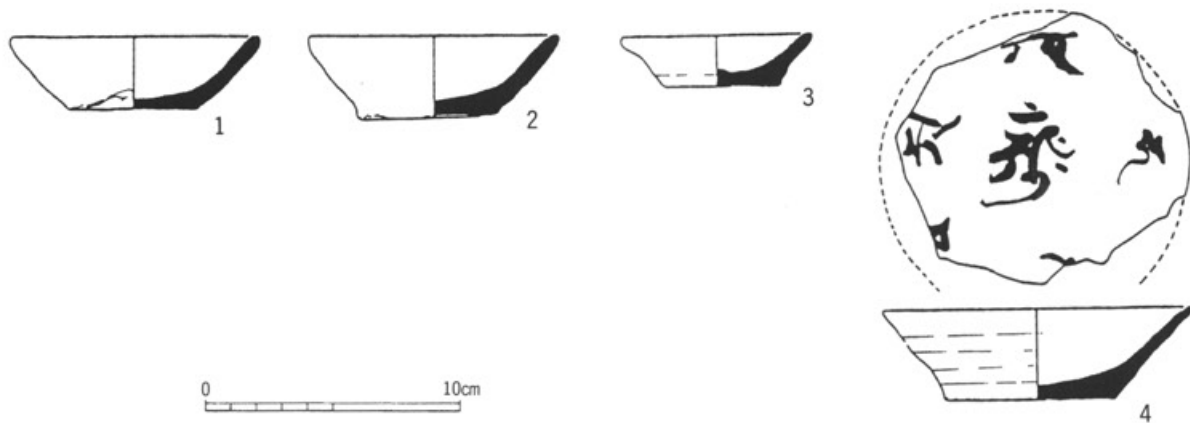
カワラケ1は高台状に切り残すため、底部が突出する。2は口径11.6cm、器高3.5cmで、体部下半の腰が張る。暗褐色で、砂粒を含む。3は全体に歪みが著しく、底部は静止糸切り。暗褐色で、長石・石英粒を多く含む。4は口縁端がやや肥厚する。5は土師質の播鉢で、口径39.2cm、全体に摩耗が著しい。黒褐色で、長石・石英粒を含む。6の内耳土器は推定口径36.4cm、器高8.6cmで、全体にナデ調整されるが、外面には並行タタキ目の痕跡が一部残る。瓦質の深鉢形土器7は推定口径46.6cm、器高33.2cmで、紐状突帯により7つに分割される。1段目と4段目は印花文、3段目は回文、5段目は菊花文である。脚は3つで、先端がかなり摩滅している。全体に丁寧なナデ調整で、器外は黒褐色、器肉面は茶褐色、長石・雲母の小砂粒を含む。

久井崎城跡（第239図、図版8-2）

文献①-091

久井崎城跡は香取郡大栄町に所在する。利根川支流の大須賀川上流、標高33mの舌状台地先端に位置する。当地は大須賀氏の本領である大須賀保の中心に位置し、当城も松子城の支城で、大須賀氏の一族である成毛氏の居城とされる。調査では、主郭部と外郭部で40棟以上の掘立柱建物や土坑、溝、地下式坑を検出した。松子城を防御するように、大須賀氏の家臣を日常的に居住させていたものと考えられる。

カワラケは口径6cm～10cm以内のもので、大きさによって大小2種類以上には分類できそうである。いずれも器壁は厚く、内面が緩やかに立ち上がる。多くが灯明皿として使用された痕跡をもつ。空堀から出土したカワラケ（4）には内面中央に「アーク」（大日如来種子）、それを巡るように「キャ、カ、ラ、バ、ア」と梵字が墨書されている。

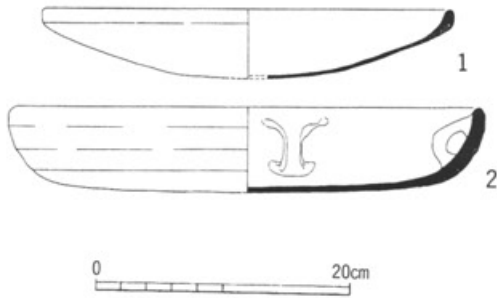


第239図 久井崎城跡

高岡陣屋跡（第240図）

文献③-294

高岡陣屋跡は香取郡下総町高岡の利根川右岸標高5m前後の、自然堤防上に立地する。陣屋付近には利根川水運で栄えた源太河岸、高岡河岸がある。高岡藩は初代井上正（政）重が、寛永17年（1640）に、一万石を加増され大名となった時をもって成立した。高岡に陣屋を構えたのは3代正（政）蔽の時で、延宝4年（1676）から貞享元年（1686）の間と推定される。陣屋関係の遺構としては、池跡、池の水位調整のための寄せ木式木樋跡、掘立柱建物跡、ゴミ廃棄土坑などを検出した。



第240図 高岡陣屋跡

内耳土器には、内耳のない丸底で体部が短く、口縁端で内折するもの（1）と、丸平底で体部が緩やかに内湾するもので、内耳はがっしりしたもの（2）が出土している。前者で口径32.8cm（1尺1寸）、後者で口径38cm（1尺3寸?）、器高6.7cmを測る。

県外

（1）相馬郡地域

守谷城跡（第241図）

文献③-265

守谷城跡は茨城県北相馬郡守谷町（旧下総国）に所在する。守谷城は下総相馬氏の居城で、大永5年（1525）には、相馬胤広が守谷に城を構えていたようである。しかし、永禄9年（1566）に後北条氏の軍勢と共に古河公方義氏の母が守谷城に入城することによって、守谷氏の居城としての守谷城に終止符を打った。永禄11年（1568）には公方義氏の御座所として進上された守谷城の拡張・修築工事が行われている。しかし、天正18年（1590）、小田原城落城と後北条氏の滅亡に伴い、守谷城には徳川家康の家臣菅沼（土岐）定政が入城するが、三代目の頼行の時、寛永5年（1628）出羽上山へ移封になる。寛永19年（1642）には佐倉藩領となり、寛文9年（1669）から天和元年（1681）にかけて酒井氏が居城したが、以後守谷領は関宿藩領に編入され、守谷城は空城となった。

発掘調査では郭B調査地区から掘立柱建物が数棟検出され、多数の土器・陶磁器が出土している。この掘立柱建物は盛土整地土層が築かれてから造られており、遺物の主体が大窯期の製品になることから、文献に残る永禄11年の拡張・改修時の遺構と判断されるものである。また、郭A調査地区を含めて、遺物の上限については瀬戸・美濃製品からほぼ17世紀の中頃と考えられる。従って、大半を占める遺物は16世紀前半から17世紀半ばまでの一世紀余りのものと考えられる。

遺物中でもとりわけカワラケの出土量が多く、全出土量の約50%を占める。カワラケは口径と体部形態によって7タイプに分類される。

a タイプは口径8.3cm～10.2cmのもので、体部の立ち上がりがやや内湾気味に開く。

b タイプは口径9.0cm～10.6cmのもので、体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がるもの。

c タイプは口径8.5cm～11.0cmのもので、体部はやや外反気味に立ち上がる。

d タイプは口径5.8cm～10.3cmのもので、体部がほぼ直線的か、やや外反気味に立ち上がる。

e タイプは口径5.3cm～7.5cmのもので、体部はやや内湾気味に立ち上がる。

f タイプは口径9.5cm～16.8cmのもので、体部はほぼ直線的なものからやや外反気味のもの。

g タイプは底部が丸底で糸切り痕が見られず、体部の立ち上がりが浅いもの。15は耳カワラケになる。

内耳土器はA・B両地点で出土しているが、A地点のものは底部が深いもので、B地点のものは浅く、口径と底径の比が小さい。土器播鉢は、21が口径31.0cm、底径12.0cm、器高11.2cmで、片口状になる。



第241図 守谷城跡

(2) 葛飾郡地域

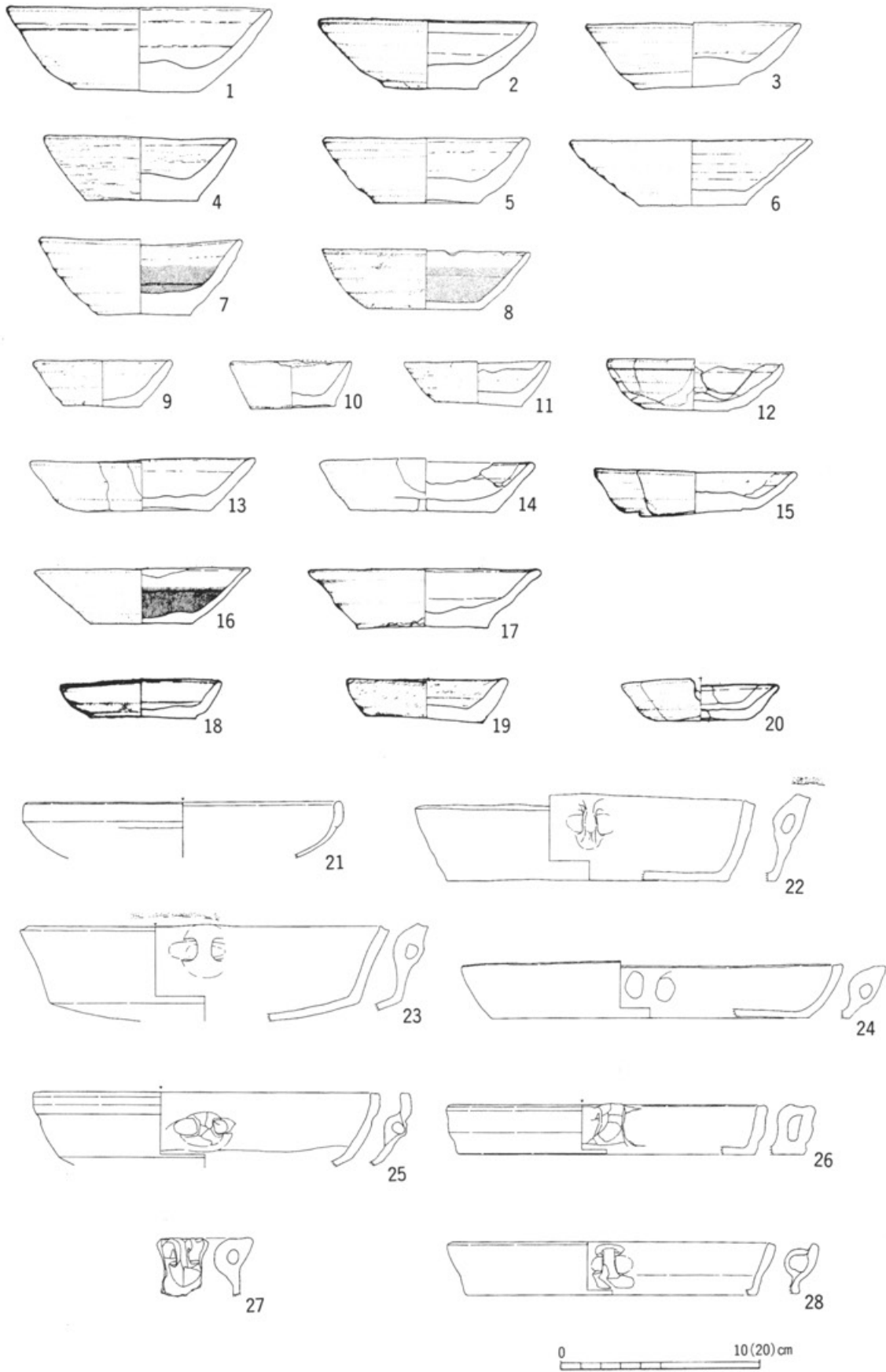
葛西城跡とその周辺 (第242図)

文献③—023、029、266、267

葛西城跡は葛飾区(旧下総国)青戸に所在する。中川右岸に形成された標高2m程の微高地上にあり、中川を東の備えに、西に水田あるいは湿地帯という自然環境を巧く生かしている。葛西城は関東管領上杉方の軍事拠点として、享徳の乱(1454)前後に築造されたようである。以後一時期千葉氏が入城したとも言われるが、大石氏が城主となっていた。天文7年(1538)第1次国府台合戦の後、後北条氏方に移るが、永禄3年(1560)長尾景虎の小田原城攻撃の際、葛西城は反小田原方に落ちた。しかし、長尾軍の撤退が始まると、永禄5年(1562)には再び後北条方の領地になる。天正18年(1590)、小田原城落城の際葛西城も落城したが、徳川家康はこの葛西城の跡地に青戸御殿(葛西御殿)を建設した。慶長10年(1605)にはすでに宿泊施設ができていたようで、寛永16年(1639)と慶安2年(1649)には改修工事を行っている。しかし、延宝6年(1678)に御殿は取り壊され、廃止となった。

カワラケについては、2次調査資料を長瀬衛氏が口径と高さの比率を基準に「坏型」と「皿型」のグループに、口径の大きさによって大小に分類している。A類は「大型坏型」、B類は「小型坏型」、C類は「大型皿型」、D類は「小型皿型」となる。更に3次調査資料で、手づくねカワラケをE群、耳カワラケをF群として追加している。谷口栄氏によれば、これらの資料の大半が16世紀の後北条氏支配以降17世紀中ごろまでに収まるようである。また、内耳土器については両角まり氏が葛西城周辺遺跡である柴又帝釈天遺跡・上千葉遺跡出土遺物についてまとめている。

カワラケの1～8はA類、9～12がB類、13～17がC類、18～20がD類に相当する。内耳土器の21はa類で、22はb類、23はc類、24はd類、25はe類、26はf類、27はg類、28はh類となる。このうちc類は器高が口径のおおよそ1/3未満、1/6以上、体部から口縁部に掛けて比較的直に立ち上がるものである。相対する2か所に1対2の3内耳をもつ。内耳断面は円形で、団子状または団子状に極めて近い形態である。丸底で、底部外面から体部外面下半にかけてハケもしくは木端状の工具による丁寧なナデ調整が施される。内面はナデ調整で、胎土は乳白色に近い肌色を呈し、粒子は細かく均質で、やや砂っぽい。葛西城及びその周辺でのみ確認される。また、b類は常陸・下総を中心に16世紀末葉に見られる。d類は佐倉城で藤尾氏がII類としたものである。



第242図 葛西城跡(1~20)、柴又帝釈天遺跡(21~23)、上千葉遺跡(24~28)

注

1) 遺跡の概要については文献①-091および各報告書に基づき説明した。表中の遺物の分類、形式決定については、ほとんどの遺跡で文献①-091を参考にしたが、疑問があるものについては本報告を再確認し、実測図・写真などから、独自に再設定したものもある。文献①-091と、陶磁器分類の基本文献は同一なので、解釈や読み違いなどがある場合は、すべて責任は当方にある。

この中の、いくつかの遺跡の瀬戸・美濃製品については、(財)瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏に、再確認していただいたものがあり、時期設定にあたっては消費地の成果を考慮に入れつつも、生産地編年を優先させたものである。

また、中世遺跡については、文献⑤-030、053で、古瀬戸様式から大窯期の遺物の出土地名表を作成されており、これも参考とさせていただいた。

なお、本文と表中の大窯に付随する数字は“段階”を、連房式(近世)に付随する数字は“小期”を意味する。

基本文献：⑤-004、008~011、013~015、018、024、033、037~040

第11表 所収遺跡一覧

安房郡・君津郡・市原市地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
文島遺跡	袖ヶ浦市	道路、掘立柱建物、土坑墓、竪穴遺構、竪穴住居状遺構、溝、棚列	同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-5類、杯Ⅰ類)、常滑埴鉢(5、6型式)、甕(5、6型式、その他)、渥美埴鉢、カワラケ、伊勢系土鍋	12世紀後半から14世紀前半で、13世紀中葉から13世紀末中心	③-206
外箕輪遺跡	君津市	掘立柱建物、井戸、溝、土坑、塀、木棺墓、水田面	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-1、Ⅰ-1b類、Ⅰ-2a、Ⅰ-4a、Ⅰ-5b、Ⅲ類)、青磁小碗(Ⅰ-1類)、青磁杯(Ⅲ類)、青磁皿(Ⅰ類)、筒形香炉、白磁碗(V類)、口禿小皿(Ⅸ類)、白磁皿(Ⅸ類)、二彩陶器盤、青白磁梅瓶、常滑埴鉢(2~3、5~6型式)、甕(2、3型式)、渥美甕(2型式)、壺(1b~2型式)、古瀬戸緑釉小皿(後期)、鉚皿(後期)、四耳壺、合子、カワラケ、伊勢系土鍋	12世紀後半から14世紀後半で、12世紀後半から13世紀末中心	③-164
下ノ坊遺跡B地点	鋸南町	掘立柱建物5、塀、井戸、大形溝	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-4、Ⅰ-5b、Ⅰ-2またはⅠ-4類)、龍泉窯系青磁皿(Ⅲ類)、白磁皿(Ⅷ、Ⅸ類)、白磁壺、褐釉陶器壺、常滑甕(3、5、6型式)、埴鉢(5、6、8型式)、小型壺(6型式)、渥美壺、古瀬戸鉚皿(中Ⅳ期)、平碗(中Ⅳ期)、埴鉢(後期)、カワラケ(皿、杯)、土鍋	12世紀後半から14世紀後半で、13世紀後半から14世紀前半中心	③-176
天神前遺跡	木更津市	掘立柱建物、土坑、土坑墓、埋葬施設	古瀬戸四耳壺(前期)、筒形容器(後Ⅰ)、緑折深皿(後期)、常滑壺(6型式)、甕(6型式)、埴鉢(7~8型式)、カワラケ、瓦質火鉢、東海系罌蓋	13世紀半ばから15世紀後半で、13世紀後半から15世紀中心	③-207
荒久遺跡	袖ヶ浦市	道路、掘立柱建物9、地下式坑24、方形竪穴6、埴鉢状遺構8、土坑185以上、井戸2、溝28	白磁皿(森田D群)、龍泉窯系青磁蓮弁文碗(Ⅰ-5b類)、碗(Ⅳ類)、端反小碗、蓮弁文盤、染付皿、古瀬戸灰釉印花文瓶子(中期)、鉄軸香炉、花瓶、灰釉香炉(後Ⅲ期)、灰釉合子(後Ⅲ期)、碗形鉢(後Ⅱ期)、折縁深皿(後Ⅲ~Ⅳ期)、緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ期)、埴鉢(後Ⅳ期)、鉚皿(後Ⅰ~Ⅱ期)、緑釉狭み皿(大窯1)、天目茶碗(大窯1)、黒釉粗母懷茶壺、常滑埴鉢(11形式)、甕(10~11型式)、カワラケ、在地産埴鉢、内耳土器、東海系罌蓋	14世紀から16世紀前半で、15世紀前葉から16世紀前葉中心	③-298
台遺跡	市原市	台地整形区画、土坑墓、火葬跡、地下式坑、道路、区画溝、土坑、掘立柱建物、井戸	常滑甕(7、10型式)、古瀬戸平碗(後Ⅳ期)、天目茶碗(後Ⅲ~Ⅳ期)、緑釉小皿(後Ⅳ期)、花瓶(後期)、合子(中Ⅳ期)、香炉(後Ⅲ~Ⅳ期)、瓦質埴鉢、内耳土器、カワラケ	14世紀前半から15世紀末まで、15世紀前半から15世紀後半中心	①-091
神田遺跡	袖ヶ浦市	土坑墓、火葬土坑、地下式坑	古瀬戸緑釉皿(後Ⅳ)、埴鉢(後~大窯)、瀬戸・美濃端反皿(大2)、カワラケ	14世紀半ばから17世紀まで、15世紀から16世紀中心	③-243
真里谷城跡	木更津市	柱穴、土坑、捨て場遺構、掘立柱建物、地下式坑、平場、道路、空堀、物見台	染付皿(B1群Ⅵ~Ⅷ類、D群Ⅳ類)、白磁皿(D、E群Ⅰ+2+3類)、青磁鉢(B-II・a、B-Ⅳ、B-Ⅳ類)、緑釉壺、褐釉四耳壺、瀬戸・美濃天目茶碗(大窯1、2)、緑釉小皿、埴鉢(後Ⅳ新~大窯2)、常滑甕(9~11型式)、カワラケ、耳カワラケ	15世紀半ばから16世紀前半で、ほぼ、同時期中心	③-109
椎津城跡	市原市	掘立柱建物、井戸、土坑	染付碗(CⅠ類)、古瀬戸灰釉平碗(後Ⅳ新)、緑釉小皿(後Ⅳ期)、灰釉端反皿か丸皿(大窯2)、丸皿か後皿(大窯2)、天目茶碗(大窯期)、埴鉢(大窯1)、鉄軸茶壺、蘭竹文鉄絵志野皿、カワラケ	15世紀半ばから17世紀前半、15世紀後半から16世紀半ば中心	③-171
久留里城跡	君津市	石敷、礎石建物、天守台、長屋塀、土塀、堀	瀬戸・美濃陶磁器、カワラケ、瓦	17世紀後半から19世紀末まで、18世紀後半から19世紀中心	③-060
村上遺跡	市原市	溝、水田	常滑埴鉢(10~11型式)、甕(6~7型式)、内耳土器、カワラケ、瀬戸・美濃産陶磁器、肥前産陶磁器、堺産埴鉢、京都・信楽系陶器、火鉢、土器灯明具	13世紀後半から19世紀まで、18世紀から19世紀中心	③-289
野乃間古墳	富津市	古墳周溝内廃棄遺物包含層	肥前産磁器碗、瀬戸・美濃産陶器(掛け分け碗、香炉、皿、鉢、灯明皿)、内耳土器	18世紀前半から18世紀末中心	③-146
富津陣屋跡	富津市	礎石建物、ろうそく石礎石列、井戸、庭、溝、土坑	肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、相馬陶器、万古陶器、堺埴鉢、京都信楽系陶器、備前陶器、志戸呂陶器、萩陶器、明・清朝磁器、ヨーロッパ陶器、瓦、カワラケ、内耳土器、その他土器類	ほぼ文政4年(1821)から慶応4年(1868)まで	③-287
飯野陣屋跡	富津市	溝、土坑、貝殻地蔵、濠、道路、礎石、土坑、柱穴列、道路、基礎	肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、瓦、カワラケ、内耳土器、土人形、ヨーロッパ陶器	18世紀から19世紀末まで	③-155他

夷隅・長生・山武地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
岩川館跡	長南町	堀、掘立柱建物、井戸、礎石建物、土坑、火葬墓、竪穴遺構	同安窯系青磁(碗Ⅰ類、皿)、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2、Ⅰ-5類、小盤Ⅲ類、碗Ⅳ類、盤Ⅳ類、不明)、白磁四耳壺、白磁皿Ⅸ類、盤、青白磁瓜形水注、合子、常滑甕(3、5~6、7、9、10型式)、埴鉢(5~6、6、7、8、9型式)、渥美埴鉢、甕、小型壺、瀬戸深皿(中Ⅰ~Ⅱ、後Ⅲ)、平碗(中期、後期)、鉚皿(中期~後期)、四耳壺+瓶子(中期)、花瓶(中期)、香炉、緑釉小皿(後期)、天目茶碗(後期~大窯)、埴鉢(後期~大窯)、備前埴鉢、山茶碗、カワラケ、瓦質火鉢、埴鉢	12世紀後半から16世紀前半で、12世紀後半から14世紀中心	③-170
神田山第Ⅲ遺跡	茂原市	掘立柱建物、火葬土坑、土坑、塚、溝、地下式坑	白磁碗(V-4類)、白磁皿(Ⅸ類)、白磁四耳壺(Ⅲ-3類)、龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-5a・b、E類)、常滑甕(2、3、5、6、8型式)、埴鉢(5、6、8、9型式)、渥美壺、備前埴鉢、古瀬戸緑釉皿(後Ⅲ~Ⅳ)、鉚皿(後Ⅲ期)、平碗(中Ⅳ期~後Ⅰ)、天目茶碗(後Ⅲ)、香炉、花瓶(中期)、底脚目皿(中Ⅲ)、折縁深皿(後Ⅲ)、直縁大皿、埴鉢(後期)、東海系罌蓋、カワラケ	12世紀後半から15世紀まで	③-219
山室城跡	松尾町		古瀬戸鉚目付大皿(後Ⅳ新)、直縁大皿、平碗、天目茶碗、埴鉢、常滑甕、内耳土器、カワラケ	15世紀初頭から15世紀後半	③-201
田向城跡	芝山町	掘立柱建物、地鎮遺構、木橋跡、竪穴遺構、空堀、地下式坑、土坑、ピット群、棚列	染付、青磁、瀬戸天目茶碗、灰釉碗、小皿、蓋、香炉、瓶子、鉄軸水注、鉄軸水注、粗母懷茶壺、花瓶、埴鉢(後Ⅳ~大2)、常滑甕、土器埴鉢、瓦質土器、内耳土器、カワラケ	14世紀後半から16世紀前半? 15世紀中心?	③-231
一宮城域之内遺跡	一宮町	掘立柱建物、礎石、切石組水路、玉石敷遺構	染付皿(B1、C群)、白磁皿(C1、C2群)、青磁端反皿、白磁四耳壺、青白磁陰刻花文瓶子、古瀬戸瓶子、香炉、水注、瀬戸・美濃天目茶碗、埴鉢(大1、2)、常滑甕(7、8、9、10、11型式)、カワラケ、耳カワラケ、内耳土器、瓦、その他	14世紀前半から17世紀以降まで、15世紀末から16世紀前半中心	③-106
大多喜城跡	大多喜町	柱穴群、溝、土坑	白磁皿(C群)、染付皿(B2群)、染付碗、瀬戸・美濃灰釉皿、鉄軸皿、天目茶碗、埴鉢、常滑甕、カワラケ、瓦質土器	16世紀中心?	③-022
山中台遺跡	東金市	掘立柱建物、地下室、土坑墓、溝、焼土、土坑、ピット、火葬墓	瀬戸・美濃陶磁器、京焼き系陶器、志戸呂陶器、信楽陶器、堺埴鉢、丹波埴鉢、肥前陶磁器、相馬陶器、カワラケ、内耳土器、その他土器	17世紀から19世紀	③-239
古宿・上谷遺跡B地区北	芝山町	掘立柱建物、井戸、土坑、地下式坑、区画溝	カワラケ、火鉢、内耳土器、土鉢、瀬戸・美濃陶器天目茶碗、志野皿、摺絵皿、灯明皿、埴鉢、香炉、丹波埴鉢、堺埴鉢、肥前染付碗、小杯	17世紀前葉から18世紀代	③-296
上宿遺跡	芝山町	土坑列、方形周溝状遺構、井戸、方形竪穴、土坑、溝、竈、土蔵基礎	カワラケ、火鉢、内耳土器、瀬戸・美濃陶器碗、皿、埴鉢、徳利、香炉、灯明皿、堺埴鉢、京都・信楽系碗、常滑甕、益子埴鉢、肥前染付碗、皿、瀬戸・美濃染付碗・皿	18世紀第3四半期から19世紀前半	③-301
長倉宮脇遺跡	横芝町	塚	カワラケ	17世紀後半	③-122

第3章 出土遺物について

千葉市・八千代市地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
西屋敷遺跡	千葉市	掘立柱建物、土坑墓、地下式坑、回廊状遺構、道路状遺構、火葬土坑	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-5b類、Ⅰ-2類)、古瀬戸平碗(後Ⅲ~Ⅳ)、折縁深皿(後Ⅲ~Ⅳ)、瓶子(後Ⅲ~Ⅳ)、播鉢(後Ⅲ~Ⅳ)、緑釉小皿(後Ⅳ~大1)、香炉、銅皿、常滑埴鉢(8~11型式)、甕(8~9型式)、壺(6型式)、瀬美甕(2型式)、志野皿、カワラケ、内耳土器	12世紀後半から17世紀前半まで、14世紀後半から15世紀中心	③-058
千葉城跡	千葉市	堀、溝、土坑、墓跡、道路、掘立柱建物、櫓列、地下式坑	青磁、同安窯系青磁、古瀬戸灰釉四耳壺(前Ⅱb)、鉄釉印花文瓶子、天目茶碗、仏花瓶、銅皿、折縁深皿、灰釉皿、筒形容器、常滑壺(6a型式)、甕、埴鉢、カワラケ	13世紀から15世紀前半まで14世紀後半から15世紀初頭中心	①-091
廿五里城遺跡	千葉市	土塁、道路、溝、塚(墓前墓)、土坑墓、火葬土坑、火葬墓	常滑壺(9型式)、埴鉢(9型式)、カワラケ	15世紀前半中心	③-131
生実城跡	千葉市	堀、溝、土塁、地下式坑、井戸、土坑、竪穴状遺構、粘土貼り土坑、掘立柱建物	龍泉窯系青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃天目茶碗、鉄釉小皿、茶入、仏花瓶、水滴、灰釉皿、三足盤、播鉢(後Ⅳ新、大1、2)、常滑埴鉢(10型式)、甕(10、11、12型式)、内耳土器、瓦質茶釜、羽釜、播鉢、土師質香炉、カワラケ	15世紀から16世紀後半まで	①-091他
高品城跡	千葉市	地下式坑44、土坑墓1、馬埋葬土坑2、堀5、土塁6、溝16、掘立柱建物23、土坑約100、橋1、虎口3、大型竪穴1、竪穴状遺構11、井戸13	龍泉窯系青磁桜花皿、瀬戸・美濃緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ、大1)、平碗、深皿、天目茶碗(大2)、灰釉印花文瓶子(中期)、常滑壺(7、9、11型式)、カワラケ、瓦質火鉢、内耳土器	15世紀から16世紀まで	③-279
南屋敷遺跡	千葉市	地下式坑、掘立柱建物、土坑、虎口、通路、井戸、溝、堀、土塁	龍泉窯系青磁碗、瀬戸緑釉鉄皿(大1)、播鉢(大1)、古瀬戸三足盤、カワラケ、内耳土器、土師質香炉	15世紀後半から16世紀はじめ中心	①-091
井戸向遺跡	八千代市	土坑墓、方形竪穴、地下式坑、埋納銭土坑	瀬戸・美濃緑釉小皿(後Ⅳ)、内耳土器、土器播鉢	15世紀後半から16世紀	③-142
黒ハギ遺跡	千葉市	掘立柱建物35、溝40、道路4、土坑30以上、井戸5、火葬跡1、地下式坑3、竪穴状遺構3	青磁、白磁、青白磁、染付、瀬戸、常滑、瀬美、カワラケ、内耳土器、瓦質火鉢	12世紀から16世紀まで	⑤-061

印旛郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
駒井野西ノ下遺跡	成田市	掘立柱建物4、方形竪穴8、地下式坑7、火葬土坑、土坑区画溝、道路	カワラケ、常滑壺(6~7型式)、その他未整理	13世紀後半から14世紀前半?	②-306
小林城跡	印西市	土塁8、空堀2、門2、道路2、掘立柱建物4、柱穴21、塚1、地下式坑8、土坑墓5、土坑106	龍泉窯系青磁桜花皿、蓮弁文碗、古瀬戸灰釉皿(後Ⅲ、Ⅳ)、灰釉小壺(大1)、直縁大皿(後Ⅱ)、播鉢(大1)、常滑埴鉢、壺、甕、カワラケ、内耳土器、播鉢、香炉、火鉢	14世紀末から16世紀前半	③-228
高岡大福寺遺跡	佐倉市	掘立柱建物、竪穴状遺構、地下式坑、土坑、井戸、火葬墓、土坑墓、溝、道路、墳墓堂	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2a、Ⅰ-5b類)、青磁杯(Ⅲ類)、染付皿(B1群)、古瀬戸銅皿(後Ⅳ)、天目茶碗(後Ⅳ)、折縁深皿(Ⅲ、後Ⅳ新)、香炉(中期)、緑釉小皿(後Ⅲ~Ⅳ)、平碗(後Ⅲ~Ⅳ)、常滑埴鉢(9、10型式)、甕(9型式)、東海系罌蓋、火鉢、カワラケ、内耳土器、土器播鉢	13世紀から15世紀後半まで、15世紀中心	③-210
駒井野荒沼遺跡	成田市	掘立柱建物、井戸、土坑、地下式坑、水溜土坑	龍泉窯系青磁碗(Ⅰ-2類)、古瀬戸甕類(中Ⅳ前後)、平碗(後Ⅲ)、天目茶碗(後期後半)、緑釉小皿(後期後半)、折縁深皿(後Ⅱ)、端反皿(大2)、丸皿(大3)、銅皿、合子、常滑壺(7型式)、広口壺(9型式)、埴鉢(9型式)、備前播鉢?、カワラケ、内耳土器	14世紀前半から16世紀前半まで、15世紀前半から16世紀はじめ中心	③-196
北ノ作遺跡	四街道市	主要曲輪2、腰曲輪9、土塁2、空堀8、溝15、掘立柱建物11、門3、柱穴群、土坑、地下式坑、井戸	龍泉窯系青磁桜花皿、青磁碗(D類)、染付皿(C群)、瀬戸美濃緑釉皿(後Ⅳ新)、腰折皿(後Ⅳ新)、緑釉狭み皿(大1前)、灰釉端反皿(大1後)、灰釉内壳皿(大3前)、灰釉折縁皿(大4前)、鉄釉皿(大3後)、灰釉平碗(古瀬戸)、天目茶碗(後Ⅳ新、第1小期)、三足盤(後期)、播鉢(後Ⅳ新、大1後、3前)、鉄釉壺(後Ⅲ~Ⅳ)、罌蓋(大窯?)、緑釉丸碗(第1小期)、志野皿(登窯初期)、常滑壺、埴鉢、土器播鉢、内耳土器、壺、埴埴、東海系罌蓋、カワラケ	15世紀第3四半期から17世紀前半まで、15世紀第3四半期から16世紀はじめ中心	②-360 ②-363
池ノ尻遺跡	四街道市	掘立柱建物、門、地下式坑、カワラケ焼成坑、鍛冶炉	龍泉窯系青磁蓮弁文鉢、端反碗、桜花皿、同安窯系青磁皿(Ⅰ類)、白磁口壳碗、割高台小皿、緑釉碗、古瀬戸洗(前Ⅰ)、合子(中Ⅲ)、緑釉小皿(後Ⅲ、Ⅳ)、平碗(後Ⅲ)、天目茶碗(中Ⅱ、後Ⅲ)、折縁深皿(後Ⅳ)、播鉢(後期、大窯)、銅皿、深皿、瓶子、常滑壺(4~6型式)、甕(6型式)、埴鉢(6、8、9型式)、瀬美壺(3型式)、備前?、土器播鉢、内耳土器、カワラケ、東海系罌蓋	12世紀後半から16世紀初頭まで、12世紀後半から14世紀前半と、14世紀後半から15世紀中ごろ中心	③-128
和良比堀込城跡	四街道市	掘立柱建物、竪穴状遺構、地下式坑、土坑、堀底土坑	染付、青磁、白磁、瀬戸・美濃天目茶碗、小皿、播鉢(後Ⅳ新、第1、2)、香炉、茶入、壺、水差、鉢、常滑壺、土器播鉢、内耳土器、羽釜、カワラケ	15世紀前半から16世紀半ばまで	③-194
臼井城跡	佐倉市	土塁、土坑、地鎮土坑、掘立柱建物、盛土、礎石、土坑墓	龍泉窯系青磁、染付皿(B、E群)、碗(C群)、白磁碗(E群)、常滑壺(11型式)、瀬戸・美濃天目茶碗、灰釉小皿、播鉢、志野皿、甕、水滴、カワラケ	16世紀後半中心で、17世紀前半まで	③-113 ③-130
本佐倉城跡	酒々井町	掘立柱建物、櫓台、空堀	龍泉窯系青磁碗、盤、香炉、白磁碗、皿、杯、染付皿、甕、瀬戸・美濃天目茶碗(後Ⅳ新、大1、大2、大2後、大3後、1小期)、灰釉端反皿(大1)、灰釉端反丸皿(大1か2)、灰釉ソギ丸皿(大2前)、緑釉小皿(後Ⅳ新)、灰釉丸皿(大2)、灰釉腰折皿(後Ⅳ新)、播鉢(後Ⅳ新、大1、大2前、大2後、大3前、1-2小期、6小期)、徳利(大3か4)、鉄釉つまみ(大窯か)、鉄釉広口有耳壺(後Ⅲ)、鉄釉桶(大3か4)、志野丸皿(大4後、1-2小期)、常滑壺(11、12型式)、志戸呂祖母模壺(後Ⅳ新)、広口有耳壺(後Ⅳ)、建水(連房か)	15世紀後半から17世紀初頭まで、大窯4が少ない	③-236
長勝寺脇館跡	酒々井町	掘立柱建物7、礎石建門1、虎口1、地下式坑1、空堀5、井戸3、腰曲輪8、火葬墓	染付碗、皿(B2群)、白磁、瀬戸・美濃天目茶碗(大1後、大2後)、灰釉平碗、灰釉丸皿(大2前、2、3前)、灰釉ソギ丸皿(大2前、2、3前)、灰釉端反丸皿(大1か2、2)、灰釉内壳皿(大3後)、鉄釉桜花皿(大3前)、鉄釉丸皿(大3前か)、灰釉緑釉小皿(後Ⅳ新)、鉄釉徳利(大窯)、鉄絵皿(1小期)、志戸呂播鉢、播鉢、鉄絵志野皿、カワラケ、土器播鉢、内耳土器	15世紀後半から17世紀初頭まで、16世紀前半から16世紀末中心大窯4が少ない	③-167
佐倉城跡(国立歴史民俗博物館研究棟)	佐倉市	礎石、井戸、地鎮遺構、畑跡、杭跡、地下倉	肥前産染付磁器碗、皿、鉢、肥前産陶器碗、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、甕、徳利、瀬戸・美濃産磁器碗、皿、播鉢、卵産播鉢、丹波産播鉢、京都・信楽系碗、鉢、皿、土瓶、急須、カワラケ、内耳土器、火鉢、その他	17世紀半ばから19世紀後半まで	③-079 ⑤-028
烏内遺跡	成田市	台地整形区画、地下式坑、掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝、地鎮遺構	カワラケ、内耳土器、瀬戸・美濃志野皿、鉄絵皿、菊皿、片口、徳利、天目茶碗、碗、香炉、播鉢、肥前産染付磁器碗、小杯、卵産播鉢	15世紀から18世紀後半まで	③-119

第3節 所収遺跡の概説と出土土器

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
南広遺跡	佐倉市	掘立柱建物、方形竪穴建物、棚列、土坑墓、火葬墓、溝、壇上遺構	肥前産染付磁器碗、皿、徳利、赤絵、瀬戸・美濃産陶器碗、掛け分け碗、灯明皿、鉢、播鉢、壺、徳利、香炉、塀産播鉢、カワラケ、内耳土器、土人形	18世紀後半中心	③-211
弥勒東台遺跡	佐倉市	土塁、堀、道路、土坑、井戸、掘立柱建物	肥前産磁器碗、皿、鉢、蓮華、徳利、花器、香炉、仏飯具、紅猪口、肥前産陶器碗、鉢、瀬戸・美濃産磁器碗、皿、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、鉢、土鍋、徳利、壺、灯明皿、香炉、お歯黒壺、常滑壺、丹波播鉢、京都・信楽系碗、皿、鉢、土瓶、燗徳利、灯明皿、塀播鉢、備前徳利、志戸呂徳利、灯明皿、カワラケ、内耳土器、その他多数	17世紀後半から19世紀後半まで	③-276
曲輪ノ内遺跡	佐倉市	掘立柱建物3、棚列3、井戸1、土坑29、袍衣遺構1	カワラケ、内耳土器、瓦、肥前産磁器碗、皿、小杯、鉢、蓋、肥前産陶器碗、瀬戸・美濃産磁器碗、猪口、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、香炉、徳利、播鉢、水差し、土人形	17世紀半ばから19世紀後半まで、18世紀後半から19世紀半ば中心	③-181 ③-253

東葛飾郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
根木内遺跡第4地点	松戸市	掘立柱建物1、土坑8、空堀1、地下式坑14、ピット1、溝2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗、白磁面取盃、瀬戸・美濃灰釉皿(印:大窯)、播鉢(後IV新、大1)、緑釉狭口皿(大窯)、常滑壺(11型式)、カワラケ、内耳土器、土器播鉢	15世紀前半から16世紀前半まで	③-270
小金城跡	松戸市	掘立柱建物、虎口状遺構、空堀、畝畑、土塁、土坑、地下式坑	染付皿(B1、C、E群)、碗B群、白磁皿(E群)、龍泉窯系青磁小型壺、高台付壺、菊皿、瀬戸・美濃灰釉丸皿(大2)、鉄釉皿、緑釉小皿(後IV)、碗、天目茶碗(大3、4)、播鉢(大3、4)、茶入、壺、常滑壺、カワラケ(輪宝)、初山皿、内耳土器、土器播鉢	15世紀から16世紀後半まで	③-005 ③-271
鹿島前遺跡	我孫子市	溝、土坑、井戸、地下式坑	龍泉窯系青磁碗、瀬戸・美濃緑釉小皿(後IV)、播鉢(後IV新)、天目茶碗(後IV新)、常滑播鉢(9~10型式)、内耳土器、カワラケ、土器播鉢	15世紀前半から後半まで	③-077
三輪ノ山第III遺跡	流山市	方形竪穴、土坑墓、火葬施設、溝	龍泉窯系青磁蓮弁文碗、瀬戸・美濃天目茶碗、白天目茶碗、播鉢(後IV新、大窯、6小期)、丸皿、灯明皿、餌入れ、徳利、肥前磁器染付碗、小杯、仏具、塀播鉢、内耳土器、土器播鉢、カワラケ、土器灯明具、瓦	15世紀半ばから19世紀まで	③-150
花前II-1遺跡	柏市	建物跡2、井戸2、流し溜3、土坑4、溝9、古道	肥前染付碗、皿、陶器鉢、瀬戸・美濃染付碗、陶器徳利、鉢、壺、塀播鉢、土瓶、急須、カワラケ、内耳土器、火鉢	18世紀後半から19世紀まで	③-078

匝瑳・海上・香取郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
内野遺跡	大栄町	土塁、空堀、溝、掘立柱建物、土坑	龍泉窯系青磁碗、白磁皿(IX類)、常滑壺(6a型式)、片口鉢I類(3、5、6a型式)、片口鉢II類(9型式)、古瀬戸天目茶碗(後期)、灰釉瓶子I類(前~中期)、折縁深皿(中IV)、灰釉平碗(後I)、緑釉小皿(後期)、カワラケ、内耳土器	13世紀後半から15世紀前半まで	③-154
篠本城跡	光町	堀、掘立柱建物、地下式坑、土坑、溝、墓坑群、井戸	龍泉窯系青磁碗(B1、D、E類)、椀花皿、盤、白磁皿(口禿、割高台、その他)、角杯、丸杯、天目茶碗、褐釉壺、粉青沙器、瀬戸緑釉小皿、緑釉狭口皿、平碗、天目茶碗、折縁中皿、節皿、折縁深皿、直縁大皿、節目付大皿、播鉢、袴腰形香炉、筒形香炉、水滴、合子、花瓶、瓶子、四耳壺、茶壺、志戸呂茶壺、播鉢、常滑壺(4~10型式)、壺、片口鉢、窪美壺、壺、瓦質香炉、火鉢、カワラケ、内耳土器、茶釜、土器播鉢、香炉	13世紀末から16世紀はじめで、15世紀中ごろ中心	④-130
神代夏方遺跡	東庄町	掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、井戸、棚列、溝、竪穴状遺構	古瀬戸緑釉狭口皿(大1)、節皿、折縁皿(後II、III)、常滑壺(6b、7型式)、内耳土器、カワラケ、土釜	13世紀末から15世紀末まで、15世紀前半中心か	③-198
吉原三王遺跡	佐原市	土坑墓、地下式坑、溝、大形土坑	龍泉窯系青磁碗(I、I-5b類)、同安窯系青磁碗(I類)、青白磁梅瓶、青白磁合子、白磁皿(I類)、緑釉陶器壺(河南系)、古瀬戸瓶子(中期)、平碗(後I)、折縁三足盤(後III)、緑釉小皿(後III~IV)、天目茶碗、深皿、鉄釉仏花瓶、播鉢(後III)、常滑壺(6、8、9型式)、控鉢(8型式)、カワラケ、内耳土器、土釜、土師質台付皿	11世紀から16世紀まで	③-169
大六天遺跡	小見川町	掘立柱建物、棚列、道路、溝、土坑、土坑墓、火葬土坑、地下式坑	瀬戸・美濃緑釉小皿(後IV)、平碗(後II~III)、天目茶碗、折縁深皿(後III~IV)、播鉢(後III~IV)、碗形鉢、節皿(後II~III)、椀皿(大)、香炉(後III~IV)、尊形花瓶(後III~IV)、常滑壺(5、6、8~11型式)、控鉢、カワラケ、内耳土器、瓦質火鉢、風炉	13世紀から16世紀まで、14世紀後半から15世紀中心	③-238
大堺・塔ノ前遺跡	八日市場市	土坑、ピット、溝	古瀬戸瓶子(中期前半)、天目茶碗(大2、近世)、白天目茶碗(3小期)、カワラケ、内耳土器、瓦質土釜、火鉢、椀皿(大2、3、4)、灰釉皿(大1か2)、肥前染付丸碗、筒形碗、広東茶碗、瀬戸・美濃陶器御室茶碗、灯明皿、香炉、片口鉢、徳利、播鉢	14世紀前半から18世紀末まで	③-258
馬洗城跡	大栄町	土塁、空堀、掘立柱建物、土坑、地下式坑、火葬施設、墓坑	染付輪花皿、瀬戸・美濃天目茶碗、灰釉丸皿、播鉢、志野皿、常滑壺、カワラケ、土器播鉢、内耳土器	16世紀から17世紀前半	③-160
綱原屋敷跡遺跡	佐原市	牧捕込、掘立柱建物、粘土敷き土坑、地下式坑、土坑	瀬戸・美濃鉄釉椀皿(大)、カワラケ、内耳土器、土器播鉢、瓦質火鉢	15世紀から16世紀	③-186
久井崎城跡	大栄町	掘立柱建物、土坑、溝、地下式坑	白磁、染付、瀬戸・美濃天目茶碗、緑釉小皿、丸皿、菊皿、折縁皿、志野丸皿、播鉢、常滑壺、壺、控鉢、カワラケ	15世紀末から17世紀前半で、16世紀代中心	①-091
高岡陣屋跡	下総町	池、木燵、掘立柱建物、土坑	肥前磁器碗、皿、鉢、水滴、そば猪口、蓋、仏飯具、花瓶、肥前陶器皿、瀬戸・美濃磁器碗、皿、蓋、急須、白磁皿、小碗、瀬戸・美濃陶器碗、皿、鉢、香炉、徳利、播鉢、植木鉢、壺、灯明具、相馬土瓶、益子播鉢、志戸呂灯明具、信楽系燗徳利、灯明具、塀播鉢、土器火鉢、植木鉢、香炉、内耳土器、カワラケ、焼塩壺、瓦、中国徳化窯白磁碗、景德鎮窯散蓮華、ヨーロッパ陶器	18世紀後半から19世紀後半以降まで、19世紀代中心	③-294

相馬郡地域

遺跡名	市町名	遺構	遺物(土器、陶磁器)	時期	文献
守谷城跡	茨城県守谷町	掘立柱建物、土坑、ピット、盛土土築遺構、地下式坑、竪穴状遺構、粘土敷き土坑、溝	染付碗(C群、その他)、染付皿(B1群、その他)、白磁(皿C1群)、華南瀾璃釉小皿、瀬戸・美濃天目茶碗、端反皿(大1)、緑釉狭口皿(大窯)、播鉢(大1、2、3、その他)、四耳壺、常滑壺(6、10、11、12型式)、志野角形鉢、鉄絵志野丸碗、志野皿、唐津大鉢、カワラケ、播鉢、内耳土器	15世紀末から17世紀中葉まで、16世紀半ばから17世紀前葉中心	③-265

第4節 土器編年

ここでは、各器種ごとの編年観をまとめてみる。なお、編年図中のカワラケの縮尺は1/4、それ以外は1/8とした。

(1) カワラケ (第243～250図)

中世前半については笹生氏の編年を軸に、さらに同一系譜上にある器形と判断されるものについては、形態変化を類推して時期決定した。なお、県内のカワラケは基本的にロクロを使用している^り。

まず基準となる地域として、安房・上総・市原地域を見てみよう。13世紀後半のカワラケは大小2形態あり、底部が突出し、口径対底径の比が大きく、内湾する体部が口縁端で外反する特徴を持つ。14世紀前半には底部突出が小さくなり、外反も弱くなる(笹生B類からC類への変化)。この間の様相は鎌倉に似ており、鎌倉の強い影響を受けているといわれている^{②-211、⑤-058}。この時期県下全域でカワラケに大きな相違点は見られず、単純な大小2形態の組み合わせから構成される。

14世紀後半になると、全体に厚手で、体部が内湾する器形に漸次変化する(笹生D類)。このころから大型カワラケと小型カワラケが、それぞれさらに大小2形態に分化するようである。15世紀前半には体部が直線的に立ち上がり、口縁端がやや肥厚し、15世紀後半には全体に小型化する。

15世紀後半から末にかけては、主体が皿形の器形へと大きく変化する時期である。初めは古代の杯を彷彿とさせるやや器高が高め、直線的な体部で、口径が比較的小さい箱形のものであったが、16世紀には次第に扁平化し、また口縁端が外反し始める。いわゆる「外反皿形」が顕著になっていく。

印旛・千葉市域も、細部には若干の相違があるものの基本的な流れは一致する。一方、14世紀後半から15世紀代の山武・長生・夷隅地域のカワラケは、内面に特徴ある稜をもつ(第244図5、6、8)。この稜線の位置が口縁から底面方向へと次第に下がるにつれ、薄型、扁平、直線的な立ち上がりへと変化するように見受けられる。15世紀末から16世紀初頭には一宮城城ノ内遺跡で見られるような、厚手で器高が高く、体部立ち上がりが急な小型のものが登場する(第244図10、11)。16世紀には県内各地域でこのような形態が見られるようになる。外反皿形とともにこの時期を特徴づけるものである。また、香取・海上・匝瑳地域では、16世紀に至っても皿形形態は少なく、15世紀代から通じて器高の高く、口径対底径の比が大きい体部が直線的な器形が主流で、これは、香取の海対岸の鹿島神宮周辺でも同様な傾向にあり、一つの流通圏を形成していたと考えられる。12世紀後半以来、香取の海に面した津に集住した海夫を支配下に置いた香取神宮と、香取神宮から交通上の特権を保証された海夫により、積極的な商品流通が行われていた傍証^{⑤-032}の一つとなろう。一方、最も解かりにくいのが東葛飾地域である。資料的制約があり、現段階ではほとんどが15世紀でも後半以降の土器であるとしておく。県内の他地域でも、この時期には様々な形態が見られ、戦国末期の混沌とした状況を顕著に現している。

それでは、その他の15世紀後半から16世紀代の、他地域の土器・陶器を模倣したと見られる遺物を見てみよう。

まず、15世紀末から16世紀初頭の市原・千葉・印旛地域で見られる、大型で体部立ち上がりの直線的なカワラケ(第243図19、20他)は、南部系山茶碗尾張型11型式(古瀬戸編年後IV平行)に酷似していると考^{⑤-060}えている。ただし、形態は非常に似ているものの、県内では山茶碗の出土量は微々たるもので、大きさも

カワラケが口径17.9cm、器高4.5cmと、山茶碗に比べてかなり大きい。同じように、瀬戸・美濃産陶器と器形が似ているものには、臼井城で出土している底径が小さく厚手で、体部が内湾気味に開き、口縁端で大きく外反する形態（第246図17）があり、瀬戸・美濃大窯1段階の縁袖挟み皿に酷似していると思われる。^{⑤-060}本来この器形は13世紀末から14世紀初頭のカワラケの特徴に近いが、遺跡の時期から見て、以上のように判断した。

16世紀後半の本佐倉城跡の体部内面に沈線を持つ扁平の皿形（第246図22）は、小田原後北条氏の強い影響を受けているといわれる²⁾。これは小田原編年II a 期新段階（16世紀第2～3 四半期）に登場する手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケである。千葉氏は、弘治3年（1557）に六代城主親胤が暗殺されると、後北条氏の影響下に置かれ、さらに天正13年（1585）に八代城主邦胤が殺害されると、後北条氏が軍事介入し千葉氏を支配下に置き、邦胤の子重胤は人質として小田原城に送られた。当時後北条氏と密接な関係にあった千葉氏の本城ならではの遺物といえる。

また、15世紀末から16世紀代に見られる、扁平で、口径対底径の比が大きく、底部が突出し、体部が内湾する形態（第249図6～9 他）は、東葛、印旛、千葉市、守谷城跡で見られる形態で、茨城南部からそれに接する東葛、印旛地域に特徴的な形態である。土浦城櫓門出土カワラケ^{⑤-017}（17世紀中葉）の系譜上にあり、茨城県南部では17世紀には主体となる器形であると考えられる。その他、印旛地域に見られる底部が極めて薄手で、体部内面が緩やかに外反するカワラケ（第247図8）も、石岡市外城遺跡で同形態が出土しており、分布域に共通点が見られる。

16世紀末から17世紀前半は、カワラケのみならず、陶磁器全体の出土量が激減し、空白の期間となっている。特徴的なのは、遺物が少ない時期にあって、その中で目に付くのが瀬戸・美濃産志野皿である。小田原城では同時期にカワラケが極端に減少し、灯明皿には志野皿を使用しているという。千葉県も同様な傾向であったろう。

17世紀半ばから18世紀にかけてのカワラケとしては、古宿・上谷遺跡出土の皿形カワラケがあげられる（第250図8）。これと同形態のものは、隣接する洞谷台遺跡（未掲載）、長倉宮脇遺跡でも出土している。この器形の大きな特徴は、底部内面中央と内面立ち上がり部が帯状に窪むこと。短い体部立ち上がりが大きく内湾し、逆に体部が緩やかに外反すること。加えて回転糸切りによる切り離し面が体部立ち上がり面より著しく内側に位置し、その切り離し面と体部との間に明瞭な凹部が見られるということである。以後皿形では、同様な痕跡が見られるものが増える。

一方、同時期に全く異なる、いわば杯形と呼べる、肉厚で、口径と底径の比が著しく小さいカワラケが存在する。山武地域の山中台遺跡で出土している（第250図3、4）が、この祖形を真里谷城跡・大多喜城跡・久留里城跡及び館山城跡（未掲載）出土カワラケに求めたい（第243図23、24、第244図12、13、第250図1、2）。大多喜城跡・久留里城跡出土カワラケの時期は、資料不足から限定できず、16世紀後半から17世紀前半の中で考えている。また、館山城跡出土カワラケは里見氏の居住した16世紀末から17世紀初頭を中心としたものであろうか。ただ、おそらく、江戸遺跡で「下総」タイプとした範疇に入るものであろう。

同様に、杯形と呼べるやや大振りな器形（第250図5、6）も、古宿・上谷遺跡、上宿遺跡で出土している。この祖形をどれに求めるかは、やはり資料が少ないので難しいが、強いて言えば、山武地域から香取・匝瑳・海上地域に見られる中世の主体となる器形（例えば第248図12）に求めることができるかもしれない。

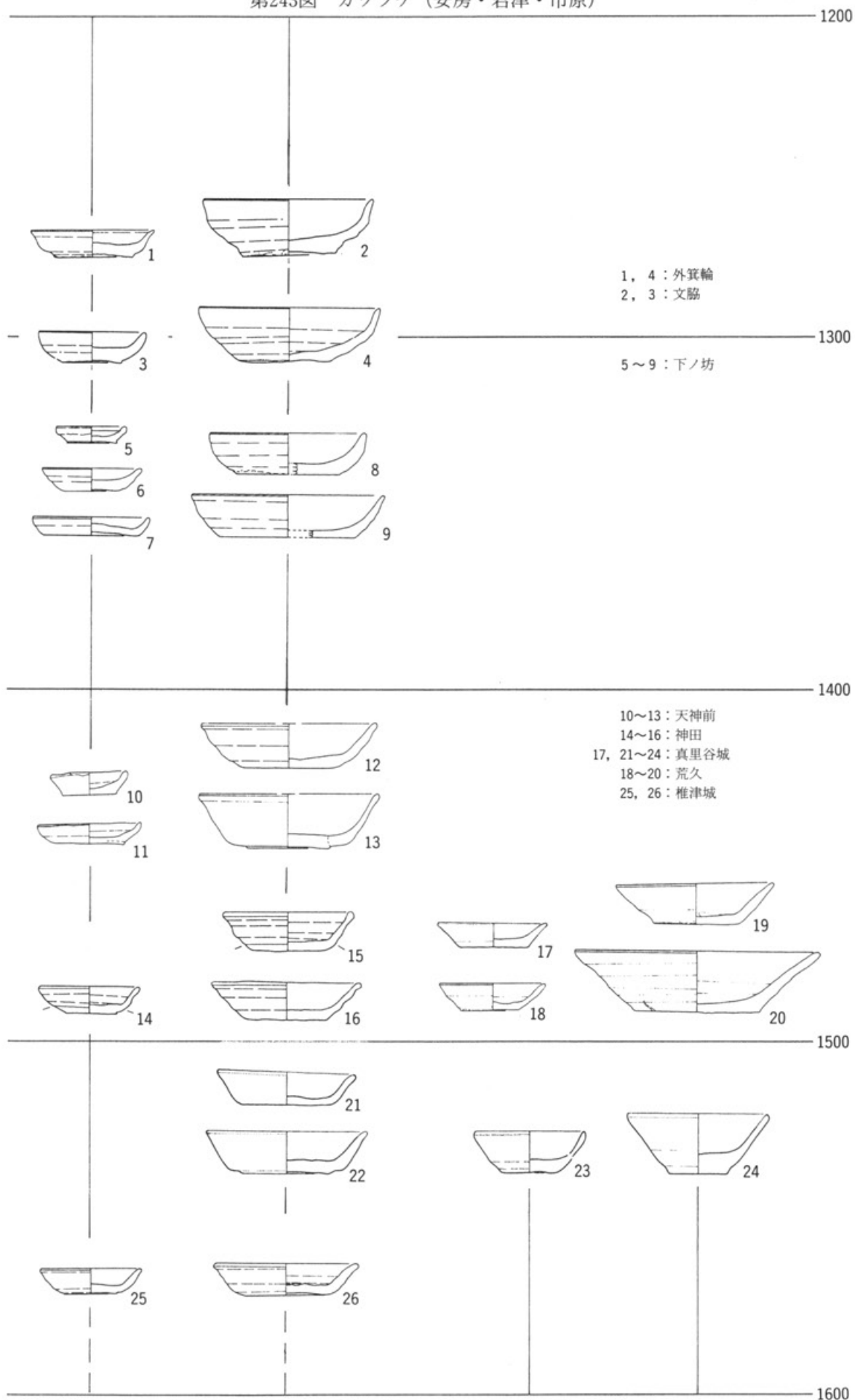
ところが、18世紀後半から末にかけて、形態的に江戸カワラケと全く同一のものが出現する（第250図9、

10)。それまでも、基本的に形態的には江戸カワラケと同じ皿形ではあったが、砂分を多く含み、器面がザラザラした感触で、褐色主体の発色であった(上宿遺跡)。新しいカワラケは薄手で、規格性に富み、胎土も比較的精選され、やや赤みを帯びた発色の江戸カワラケそのものと言える。

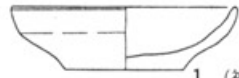
19世紀半ばには、大型の胞衣カワラケが、富津陣屋跡や佐倉市曲輪ノ内遺跡で出土している(第250図13、14)。また同じ曲輪ノ内遺跡では、江戸カワラケ以外に厚手の在地産カワラケも出土している(第250図12)。18世紀後半以降江戸カワラケが主体となるようだが、在地産カワラケも生産され続けている状況がわかる。

注

- 1) 名称については「かわらけ」、「カワラケ」、「土師質土器」、「土師質土器皿」、「土師質皿」など、研究者により異なる。また、細部の器形でも「杯形」、「椀形」、「皿形」などと区別していることが見られる。本編では特に積極的根拠はないが、「カワラケ」の名称を用いることとし、随時「杯形」、「椀形」、「皿形」を用いたが、杯形と椀形の区分は必ずしも明瞭ではない。
- 2) 小野正敏氏の御教示



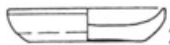
1200



1 (神田山第Ⅲ)



3 (岩川)

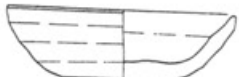


2 (岩川)

1300



4 (神田山第Ⅲ)

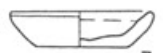


5 (神田山第Ⅲ)

1400



6 (神田山第Ⅲ)

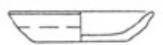


7 (神田山第Ⅲ)



8 (神田山第Ⅲ)

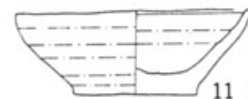
1500



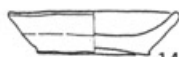
9 (大多喜城)



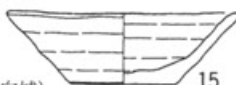
10 (一宮城)



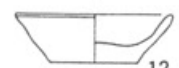
11 (一宮城)



14 (田向城)



15 (田向城)

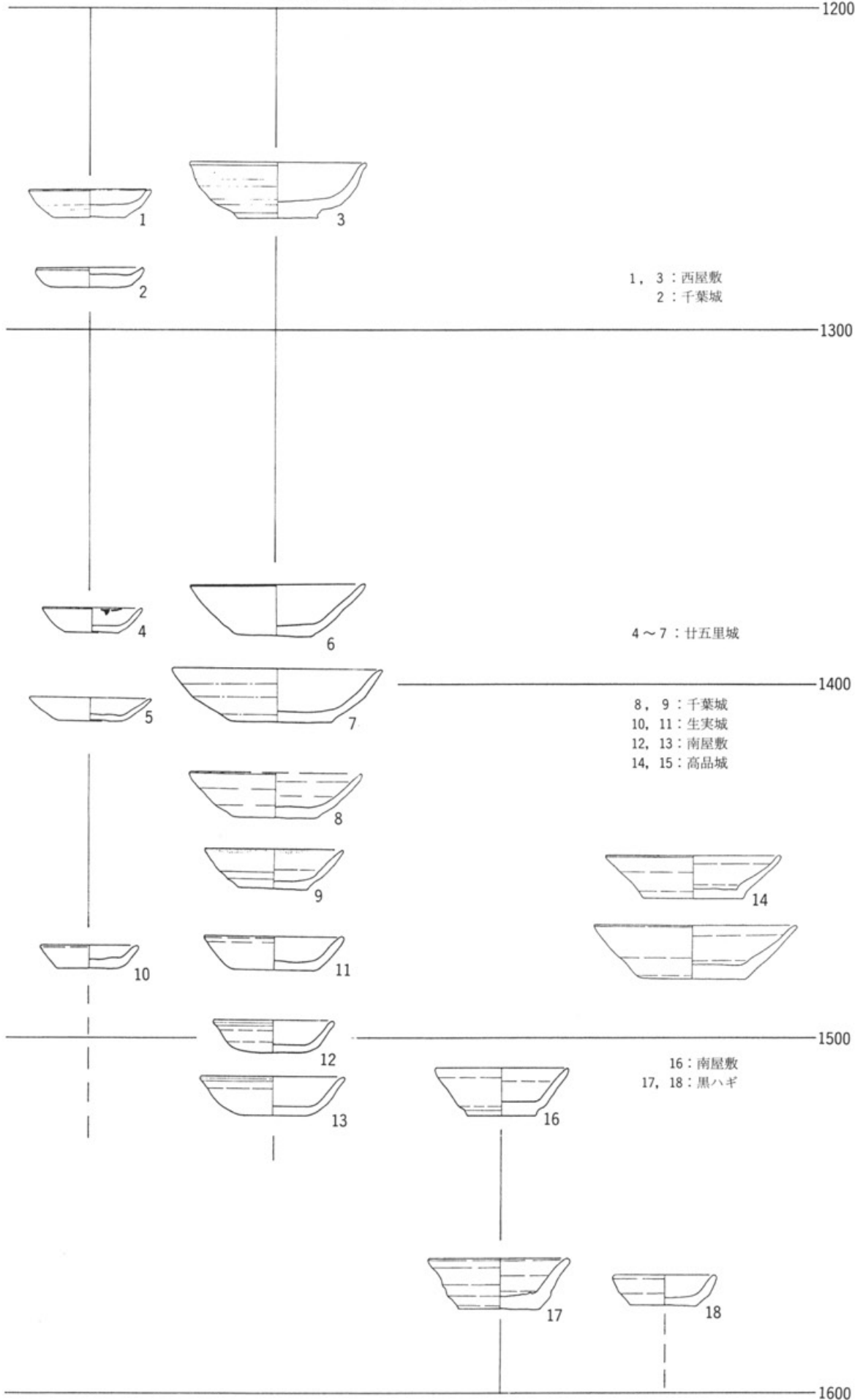


12 (大多喜城)



13 (大多喜城)

1600



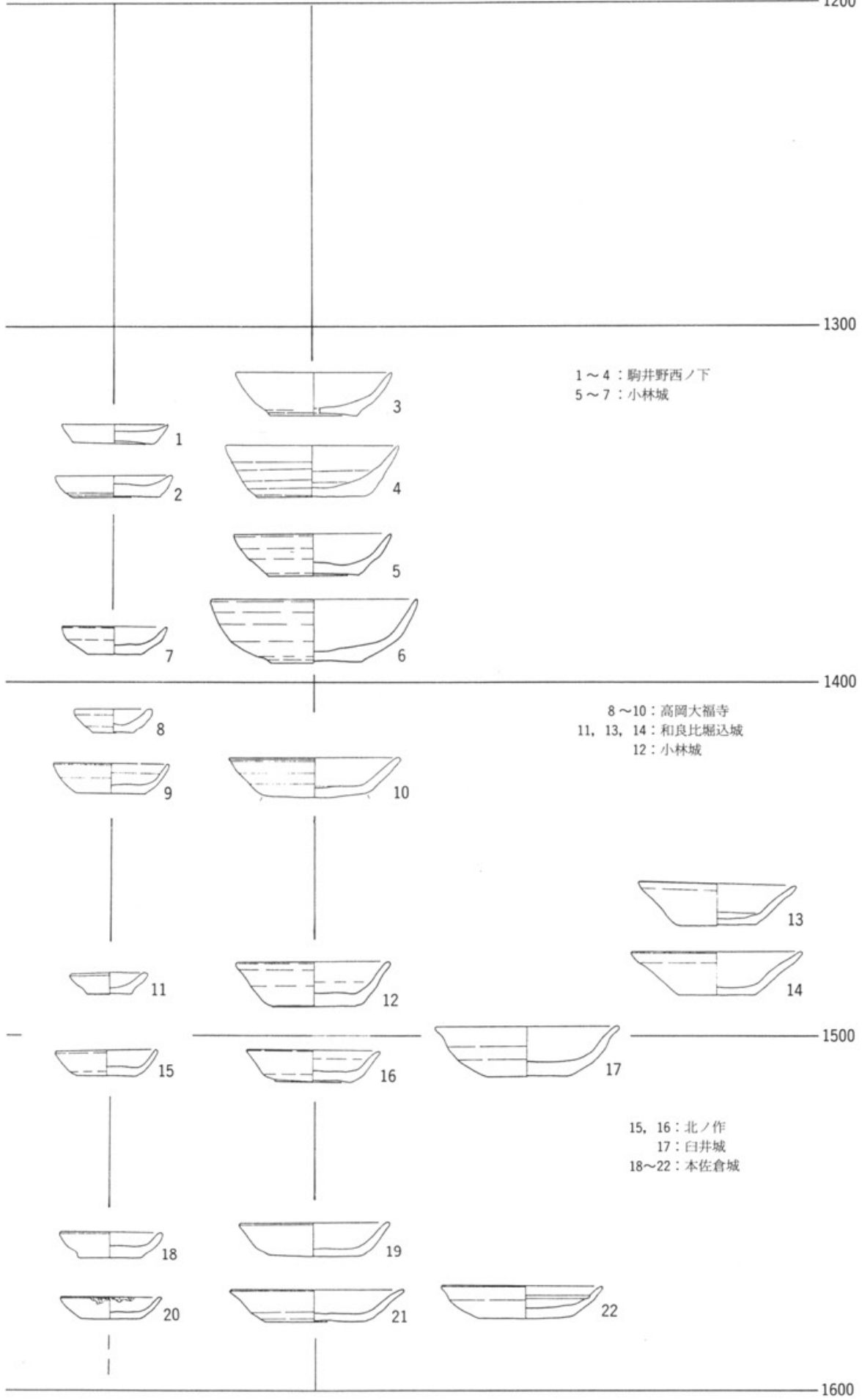
1200

1300

1400

1500

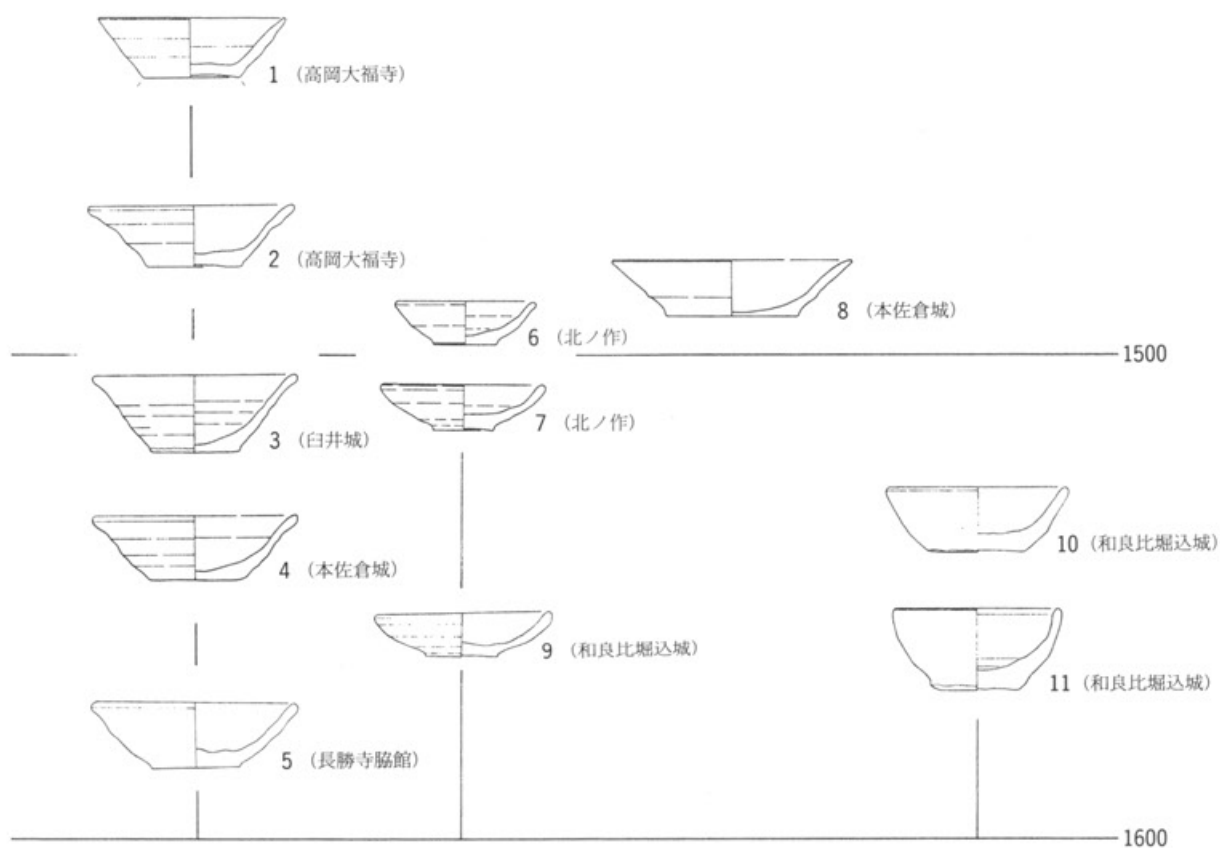
1600



1200

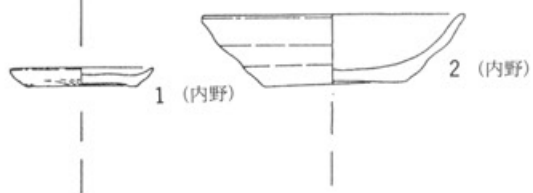
1300

1400



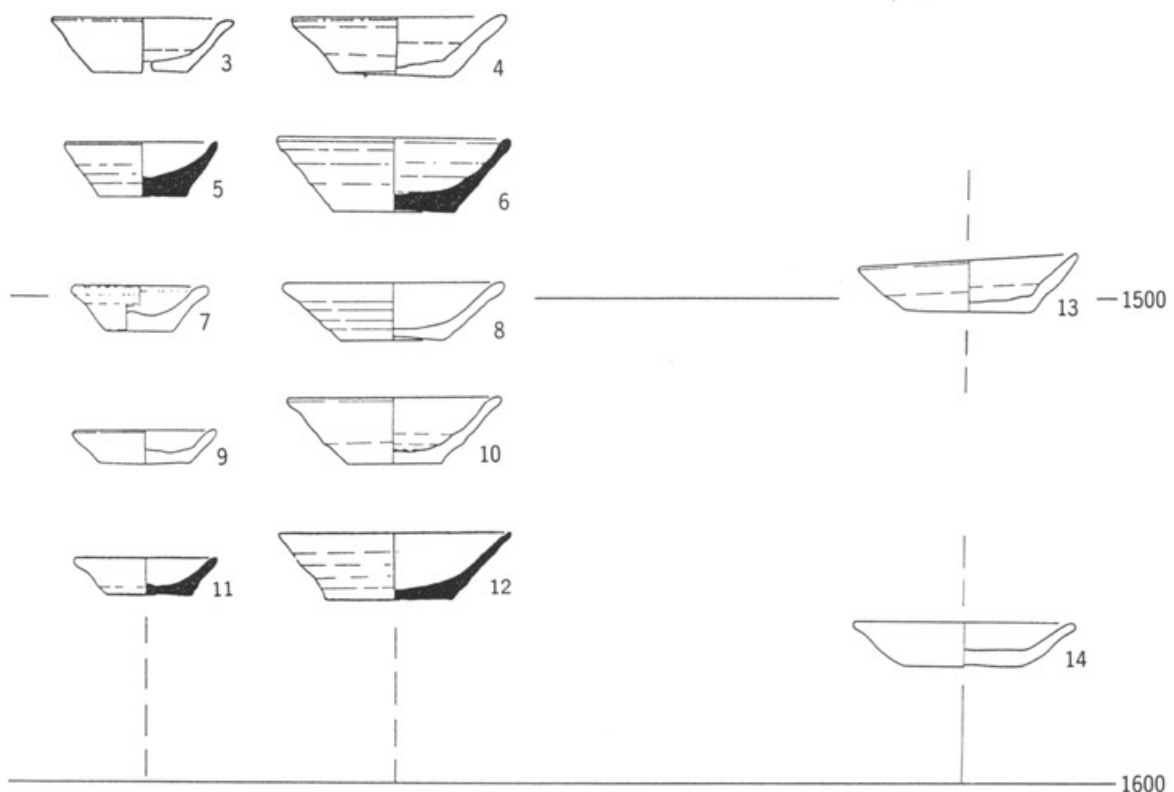
1200

1300



1400

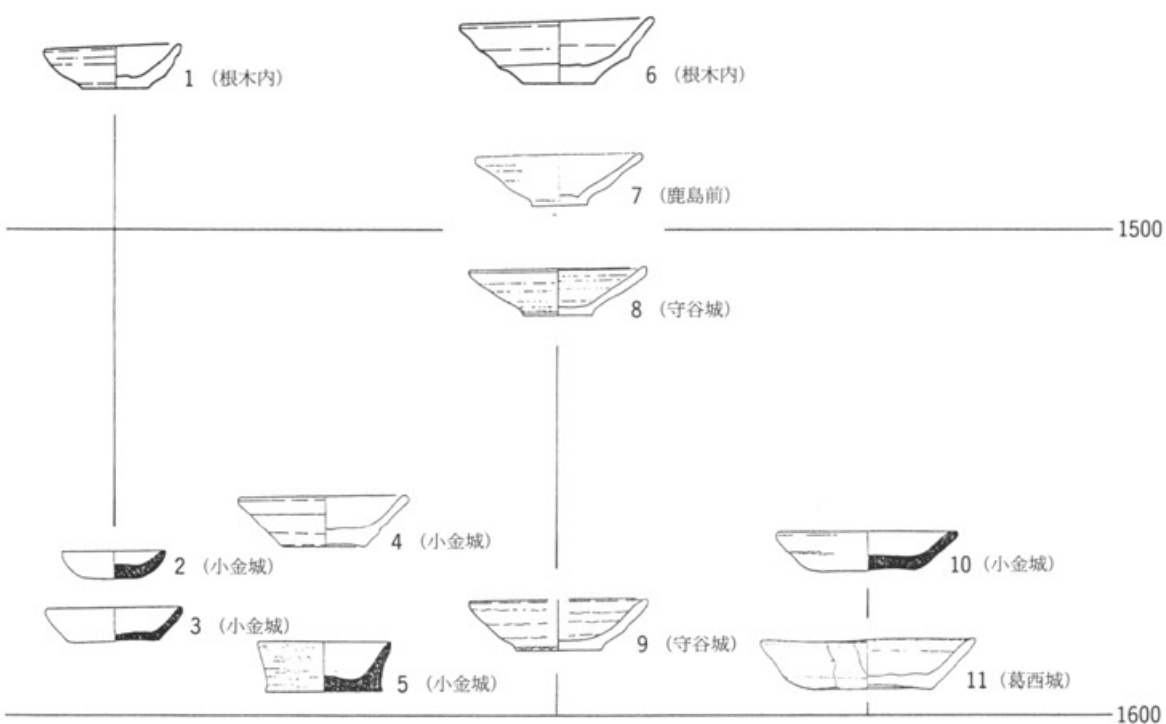
- 3, 4 : 篠本城
- 5, 6 : 神代夏方
- 7, 9 : 馬洗城
- 8, 14 : 大塚・塔ノ前
- 10, 13 : 綱原屋敷
- 11, 12 : 久井崎城

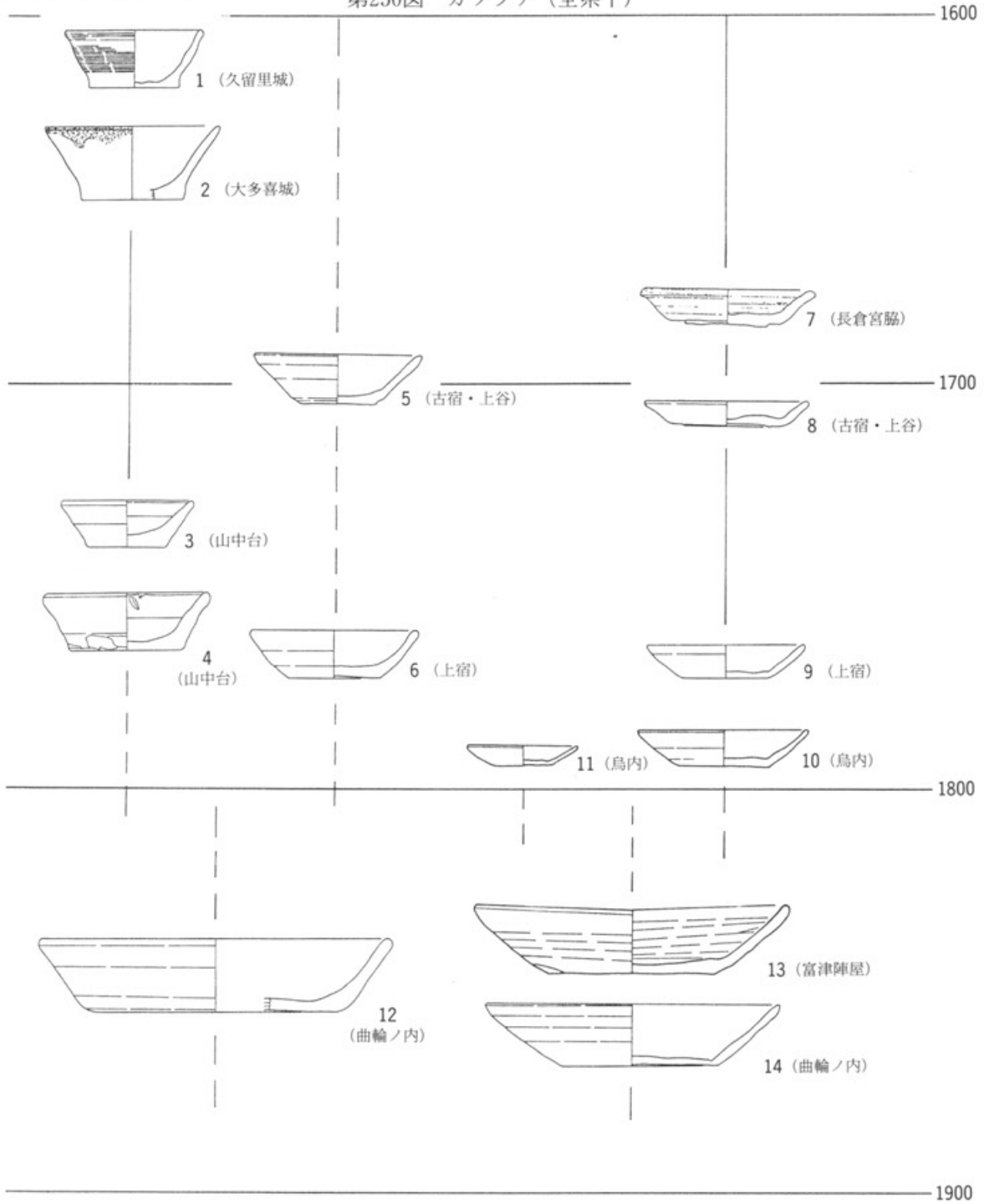


1200

1300

1400





(2) 内耳土器と土釜 (第251～254、256～259図)

内耳土器は、中世には内耳(土鍋)、近世には焙烙と概ね区別しているようであるが、器形に限って言えば明確な分類の規定はない。とりあえず、口径に比べて器高がある程度高いものを内耳(土)鍋としているようである。ただ、内耳(土)鍋は本来煮炊具の範疇で捉えるべきものであり、炒ったり、蒸したりする焙烙とはその使用方法が全く異なる。

中世印旛地域の内耳土器の変化を見ると、口径と底径の比が小さく、器高が高く、内耳接合部下端から口縁部にかけて体部が大きく「く」の字状に外折するもの(第260図参、両角A群I類)から、次第に外折が無くなり、器高が低く、口径と底径の比が大きくなるものへと変化していくのが分かる。この古い形態の初現については、土器摺鉢の出現とほぼ軌を一にすると考えられる。また、この初期形態が鉄鍋のコピーとする点は、既に言われているところである。^{⑤-016,026}

中世末期の15世紀末から16世紀にかけては、体部が内湾し始める(両角A群II類)のが大きな特徴で、16世紀初めには北ノ作遺跡、和良比堀込城跡や池ノ尻遺跡で見られるような、口径の極端に大きな鉢形(第253図7他)も出現する。千葉市内も同様な推移を見せる。香取・海上・匝瑳地域では15世紀代から器高の低い資料が見られ、16世紀にかけて出土する。その中で、体部にハケ目やヘラケズリを施す地域色豊かなものが見られる。一方で、上総地域は16世紀代のものはほとんど見られない。この内耳土器と後述する土器摺鉢の分布域は、東京湾岸が袖ヶ浦市(小櫃川流域)以北、太平洋側が山武郡北部(木戸川上流域)以北に限られる。

佐倉城跡で土鍋型としたI類(第253図10)の特徴は低い器高と外反する体部、摘み出される口縁端と、大きな口径に現れるが、内耳の形が極めて特徴的であり、同時期の長勝寺脇館出土のもの(第253図6)とは異なる系譜のものであろう。

近世の内耳土器はどうであろうか。千葉県内の内耳土器の変遷は大略、佐倉城分類で理解することができる。すなわち17世紀半ばから18世紀半ばにかけては、平底で、口径と底径の比が次第に小さくなる。内耳は基本的に1対2の3耳で、細い紐状、内耳接合部の体部外面への突出も次第に消える。18世紀半ば以降それまで器高が低くなる傾向にあったものが、丸底へ転換すると共に、逆に、高く変化していく。また、口径も小さくなり、18世紀後半代の内耳は、団子状のがっしりした感じのものが多い。19世紀になるとその内耳もなくなり、さらに小型・高い器高のものに変わっていく(第256図)。

同じ、佐倉藩領の農村部でも、18世紀半ば以降丸底の内耳土器が現れる。南広遺跡(第257図1～3)のものは佐倉城跡V類に非常に良く似ている。これより以前については、資料が無く不明である。この傾向は上総でも全く同じである。この器形には東金市前畑遺跡(未刊行)のように2対2の4耳が見られる。ところで、同じ佐倉城下の弥勒東台遺跡に見られる平底形態(第257図5、6)は、佐倉城跡のものとは全く異なる系譜のもので、上野・北武蔵型に近いと考えられる。また、大六天遺跡で見られる平底の内耳土器(第257図4)についても同様に考えられる。さらに佐倉城跡と異なるものとしては、19世紀代に見られる内耳のない丸底・扁平で、体部が短く大きく内湾する形態(第258図10、11他)は、上総・香取地域など県内でもかなり広域に見られ、この点では、この時期むしろ佐倉城が特殊であったのかもしれない。19世紀前半にはすでに建築されていた佐倉武家屋敷(旧河原家、旧但馬家、旧武居家)には囲炉裏がなく、また竈も木製の台に置く2連式の小型移動式のものである。一方、下総の農家では座敷に囲炉裏を設けた例が多いが、新しい時期には「かって」につくるものが多くなる傾向にあるという。また、土間には竈を施

設するが、竈も頻繁に改善されており、当時の様子は明確にはできない¹⁾。佐倉城武家屋敷跡の特殊性は、こういった住居構造を反映しているかもしれない。その他、19世紀中葉の富津陣屋の口縁端上部に耳を付けるタイプも存在するが、県外からの搬入品の可能性が高い。

藤尾氏が指摘した平底(Ⅲ類)から丸底(Ⅳ類)への変化は、両角氏の平底(C群Ⅳ類)から丸底(C群Ⅴ類)への形態変化に相当する。弥勒東台遺跡出土焙烙には、平底でC群Ⅳ類のものと、丸平底の藤尾分類Ⅴ類が見られる。このⅤ類は体部が肉厚で緩やかに外反し、ロクロでナデられ、底部との接合部がヘラ削りされていて、両角分類のC群Ⅴ類とはやや異なる。また、口径と底径の比が著しく小さく、帯状の耳が体部上面から底面へ延びる平底形態が出土しているが、これは上野・北武蔵の系統に近いと思われる。上宿遺跡では大半が、藤尾分類のⅤ類である。高岡陣屋跡ではC群Ⅳ類とC群Ⅵ類が出土している。

一方、江戸遺跡に近い東葛飾地域はどうであろうか。柴又帝釈天遺跡では、平底で、体部から口縁部にかけて比較的直に立ち上がる、雲母を多量に含む内耳土器(両角B群Ⅲ類a)が出土しており、16世紀末のもので、江戸在地系焙烙の祖形とされている(第259図6)。また、続く17世紀初頭には底部の垂れた丸底土器(両角B群Ⅲ類b)へと変化して行き(第259図7)、この間概ね江戸の動きと一致する。しかし、葛飾区に接する千葉県東葛飾地域では17世紀半ば以降18世紀前半にかけて、佐倉城跡でⅡ類・Ⅲ類とされる内耳土器が登場する(第259図1、2)ものの、18世紀半ば以降、いわゆる上野・北武蔵型の平底形態に移行し、19世紀半ばまで推移する(第259図3～5)。

これに関連して、白田正子氏は茨城県内の中世末から近世にかけての内耳土器の集成の中で、茨城県も佐倉城跡と同様に18世紀の中葉から19世紀初頭に、平底から丸底への転換を予想し、また、茨城県西部では上野・北武蔵型の系譜のものが存在することを明らかにした^{⑤-068}。これに対応するように、東京都東部や埼玉県東部、茨城県西部と隣接する花前Ⅱ-1遺跡、三輪野山Ⅲ遺跡、鹿島前遺跡に平底形態が見られるのである。さらに、内陸の弥勒東台遺跡や利根川下流の大六天遺跡の資料は、近世の利根川通運を通じてもたらされたものであろう。

以上から、東葛飾地域は、常総型と言われる平底から18世紀半ば以降上野・北武蔵型の平底に転換し、東葛飾地域を除く千葉県内では、18世紀半ば以降に、平底から丸底に転換していったものと考えられる。

土釜は、出土量の少ない器種である。千葉県の資料を集成すると、分布にある程度の偏在性が見出せる。県内では篠本城跡、吉原三王遺跡、大塚・塔ノ前遺跡、本佐倉北大堀遺跡など匝瑳から香取、印旛地域に見られる。個体数が少ないので、明言できないが、酒々井町本佐倉大堀遺跡出土の土釜(供伴遺跡から16世紀末から17世紀初頭と思われる)は、器高は低くなっており、形態変化としては新しいものほど扁平化していくと考えられる²⁾。八日市場市大塚・塔ノ前遺跡では、体部中央に鏝を持つ瓦質のものが出土している。印旛を除き東総から香取地域は土器播鉢の少ない地域である。土釜の出土量が多いことと対称的である。

また、本来土釜は陶器製茶釜をコピーしたものであり、風炉とセットをなす。当然、用途が同じであればこの風炉が発見されるべきであろうが、ほとんど確認されていない。

注

- 1) 文献⑤-012によると、佐倉の武家屋敷では土間が狭く、竈はたいてい木箱の上に土で築いた2口のものや板の間に置いていた。流しは板の間に置いた高さの低いもので、床に膝をついて使っていた。農家

では大勢の人々を呼び、共に食べて歌うことが、村人の共同生活に大きな意味を持っていた。しかし、武家住宅では大規模な寄合は行なわれなかった。居住習俗の違いが、農家と武家住宅の構造に大きな違いをもたらしたと考えられる。

2) 木内達彦氏のご厚意により、実見させていただいた。

(3) 土器擂鉢 (第251~253、255図)

土器擂鉢には、土師質と瓦質があり、また、両者の中間的などちらともとれるようなものもある。瓦質擂鉢は基本的に炭素を器面に吸着させたものであり、土師質のものに比べて、焼成工程に燻す工程が加わり、経費的・時間的にコストがかかると思われる。

15世紀前半から後葉の土器を出土する小林城跡や、木更津市笹子城跡、田向城跡、池ノ尻館跡をはじめ、県内の同時期の主要城館には普遍的に見られる。土師質もあるが大半が瓦質である。また、初期のころから卸目をもつのも大きな特徴である。この土器擂鉢が瀬戸産擂鉢のコピーであれば、当時の瀬戸産擂鉢が光沢のない暗黒褐色や黒色の錆釉(鬼板)を掛けていたことを考慮に入れると、瓦質化により色彩までもコピーしようとしたことは想像に難くない。

大橋康二氏は、池ノ尻館跡の擂鉢の多くが、口縁端の上面に溝を有していて、これが瀬戸産擂鉢に非常によく似ていると指摘している。おそらくここでいう「瀬戸系擂鉢」とは、藤沢分類の擂鉢Ⅰ類と考えられる。大橋氏のいうように、土器擂鉢の出現に当たっては、この陶器擂鉢が手本となったであろう。

土器擂鉢の初現については、次のように考えたい。すなわち古瀬戸後期後半(15世紀中葉)頃、愛知県瀬戸市域で窯数が減少する一方、東美濃・三河・遠江では新たに古瀬戸系の施釉陶器生産が行われ、生産流通体制が再編成された。^{⑤-052}この時期に最も流通した器種が擂鉢である。この窯で生産された卸目を持つ擂鉢が千葉県内でも流通するようになると、その擂鉢をモデルとしたコピー商品である瓦質や土師質の土器擂鉢が生産され、流通するようになる。陶器、土器両者間の出土量の比率は不明確ながら、一定量流通するようである。陶器に比べ軟質で、質的に劣ると考えられる土器擂鉢が流通した理由の一つには、陶器に比べ大量に流通し、しかも安価だったことが考えられる。

これより以前、擂鉢は15世紀半ば(片口鉢Ⅱ類9型式前後)まで、卸目を持たない無釉の焼き締め陶器である常滑産のものが、千葉県ではほぼ独占状態を示していた。

土器擂鉢は香取地域では15世紀には確認できず、16世紀とされる綱原屋敷跡遺跡に見えるのみである。また、上総では15世紀代のみで、16世紀には内耳土器共々見られなくなる。したがって、印旛・千葉地域を中心とした明らかな偏在性を見出すことができる。

16世紀後半の主要城館である本佐倉城跡、長勝寺脇館跡などでも、瀬戸・美濃産擂鉢に比較した量は不明であるが、出土報告が認められる¹⁾。

15世紀から16世紀始めまで、年代によりモデルである瀬戸・美濃産擂鉢は口縁形態を大きく変化させるが、土器擂鉢には口縁部に明瞭な特徴ある形態変化が見られない。強いて言えば、瀬戸・美濃産擂鉢が器高が低く扁平化していくので、相対的に土器擂鉢もそのように変化するであろうか。また、大きさか見ると、16世紀初めに大型化したものが現れるようである。この時期のこういった変化は、内耳土器にも見られるようである。中でも体部が緩やかに外反し、口縁端が内面方向に大きく摘み出されるものは、皆比較的新しいようで、瀬戸・美濃産擂鉢口縁や常滑産擂鉢口縁にも見られる特徴である。

16世紀末から17世紀前半については極めて資料が乏しいが、葛飾区柴又帝釈天遺跡出土遺物には、極少量ではあるが土器播鉢片と瀬戸・美濃産播鉢が供伴して出土している。また、守谷城跡B区では、瀬戸・美濃大窯産播鉢や美濃産志野皿・志野織部向付など、16世紀から17世紀前半までの資料が出土しているが、ここでも瀬戸・美濃産播鉢と土師質の土器播鉢が供伴している。ここで出土する土器播鉢は底部から口縁端まで器厚が一定で、わずかに口縁端が肥大化するもので、茨城県の南部に見られる同時期の土器播鉢と同じ特徴をもつ。

しかし、遅くとも17世紀後半以降には、土器播鉢はほとんど出土しなくなる。古宿・上谷遺跡では、出土しているのはわずかに破片1点のみである。逆にこの時期には、丹波産の陶器播鉢が流通するようになる。東金市前畑遺跡では、県内随一と思われる量の丹波産播鉢が出土しており、千葉県のみならず、江戸周辺でも同じ様な傾向を示す。18世紀代には堺産、瀬戸・美濃産の陶器播鉢が市場を独占する。従って、千葉県内の土器播鉢は15世紀中葉以降、生産・流通しはじめ、瞬く間に広まり、県内各地に一定量供給され、16世紀始めにかけて最盛期を迎えるが、その後急速に減少し、遅くとも17世紀の前半以前には、ほとんど衰退してしまったものと考えられる。

下総国の様子は以上のようなものであるが、江戸遺跡の場合は在地産の土器播鉢が存在せず、すべて陶器播鉢で占められ、対照的である。17世紀前半の江戸遺跡では最も古い一括資料が、丹波、備前、瀬戸・美濃産で占められる。

一方、17世紀中葉で廃絶した茨城県つくば市古屋敷遺跡第11号溝で、土器播鉢が一定量出土している。^{③-300}瀬戸・美濃産陶器播鉢に比べて優位であるようにも見受けられる。同時期の城館跡の同県北浦村古屋敷遺跡^{③-177}で、やはり瀬戸・美濃産播鉢と土師質の播鉢が出土している。このように、茨城県南部には、17世紀半ば以降比較的遅くまで、土器播鉢が残るようである。

また、質的に見た場合、当初瓦質が主体であったと考えられる土器播鉢は、次第に陶器播鉢に駆逐され、その中で、コストと時間をかけてまで瓦質である意味が失われ、工程の単純な土師質へと変化し、さらに生産が衰退していったものと思われる。

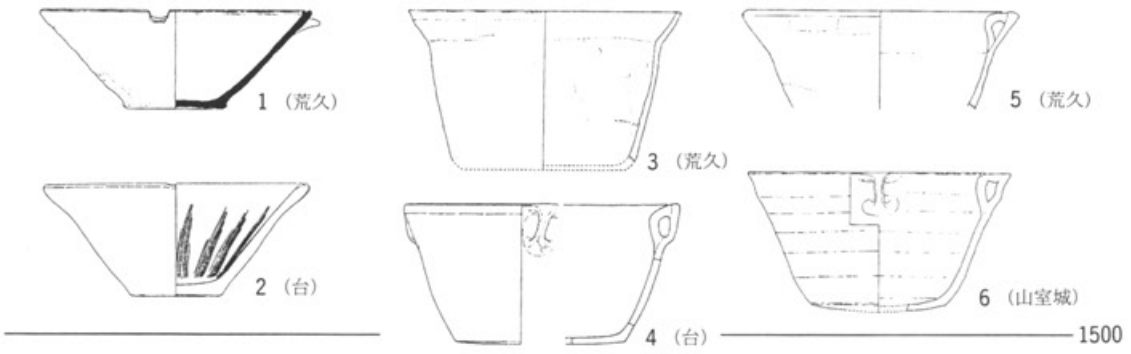
在地産土器の流通圏が生産地周辺に求められるならば、この現象から17世紀前葉から中葉頃まで茨城県南部に、この焼成窯があり、生産されていたことが考えられるであろう。したがって、茨城県南部に接する地域（特に東葛から印旛地域）では、千葉県内であっても、17世紀前葉を中心に、一定量の土器播鉢が出土する可能性がある。それは陶器播鉢の出土量と表裏一体の関係にある。

注

- 1) ただし、資料提示したものは16世紀前半以前となる可能性がある。

第251図 内耳土器・土器摺鉢（上総）

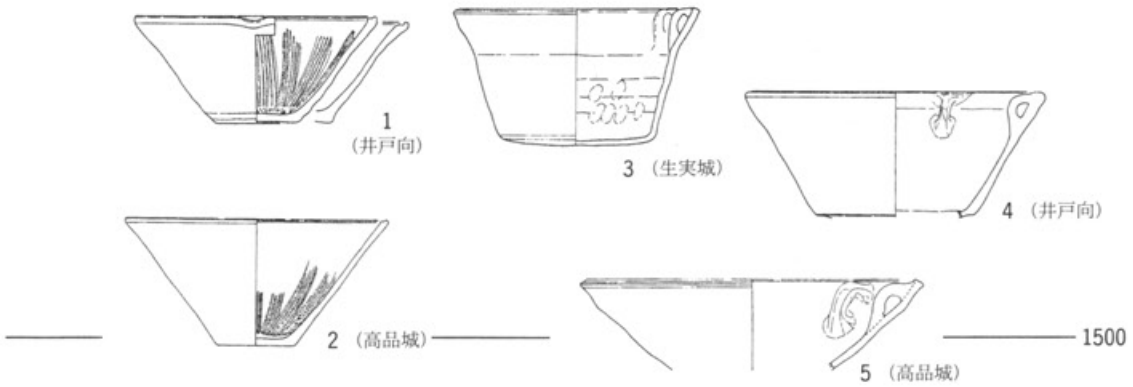
1400



1600

第252図 内耳土器・土器摺鉢（千葉・八千代・東葛飾）

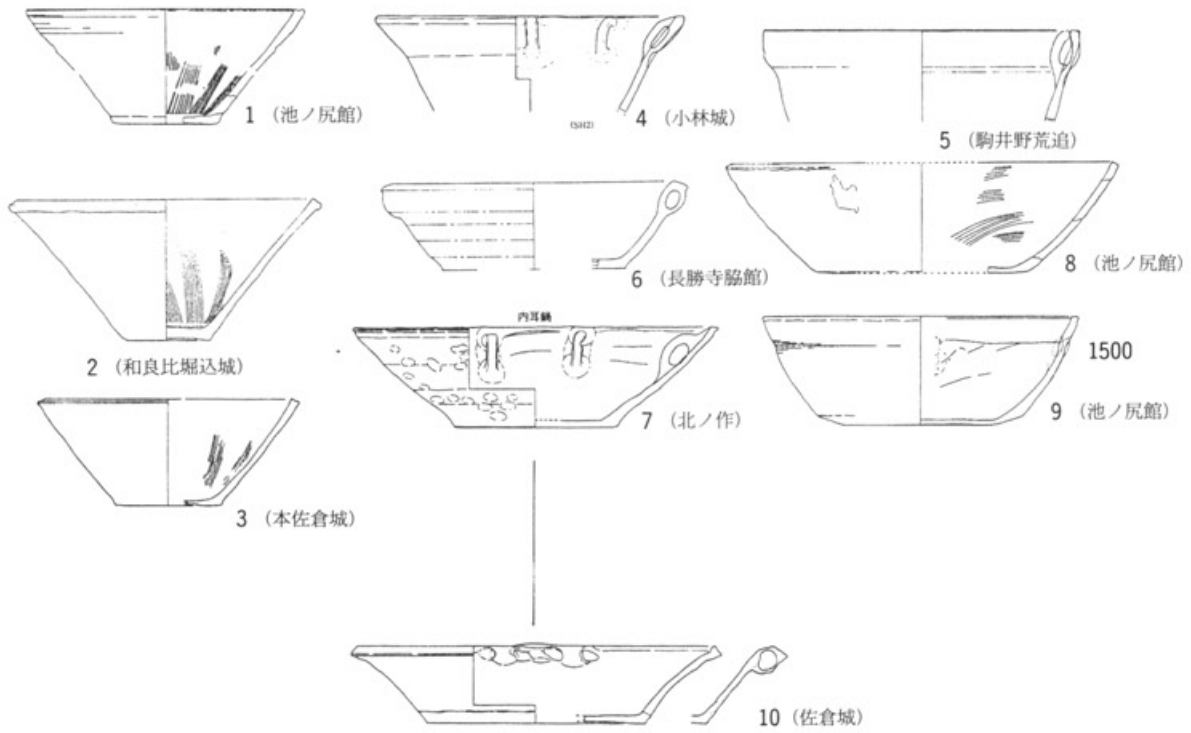
1400



1600

第253図 内耳土器・土器挿鉢 (印旛)

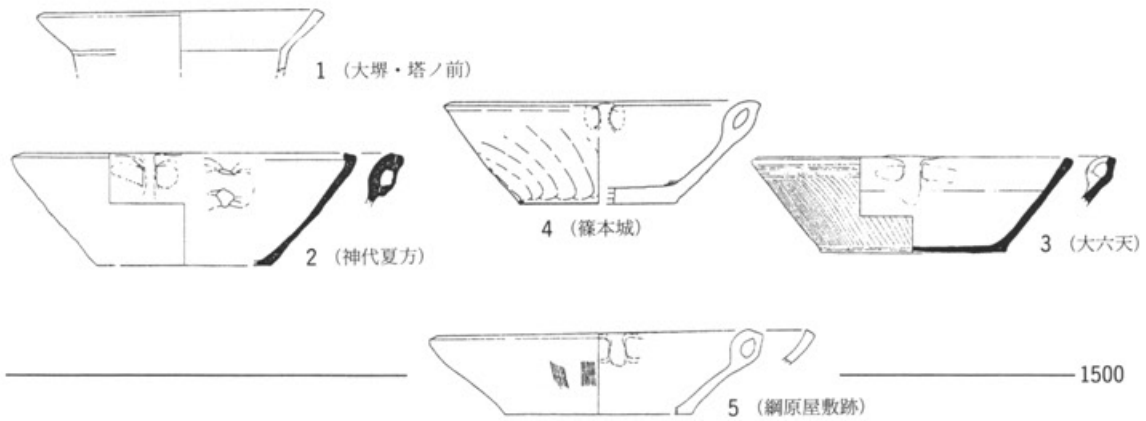
1400



1600

第254図 内耳土器 (香取・海上・匝瑳)

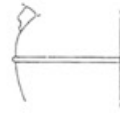
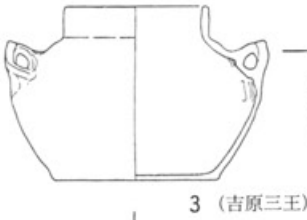
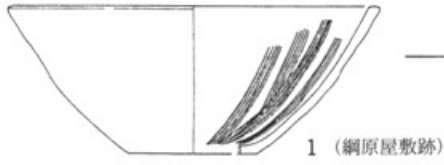
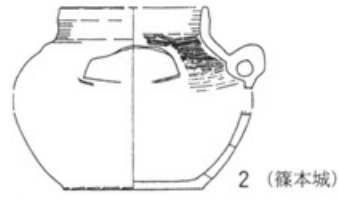
1400



1600

第255図 土器擂鉢・土釜（香取・海上・匝瑳）

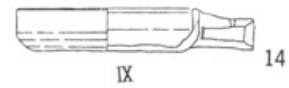
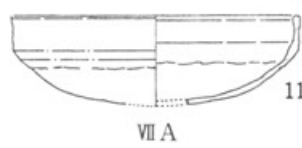
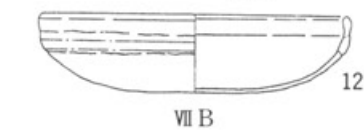
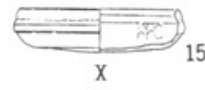
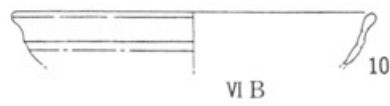
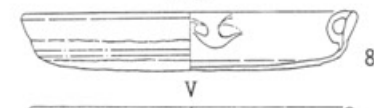
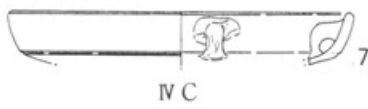
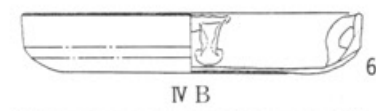
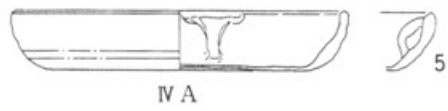
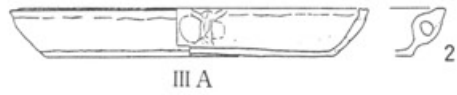
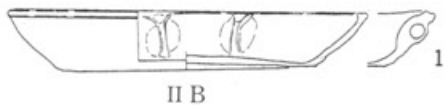
1400



4 (大堺・塔ノ前)

1500

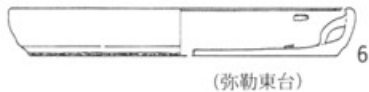
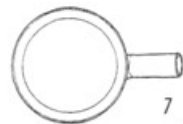
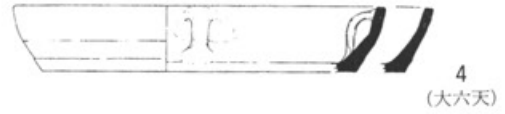
1600

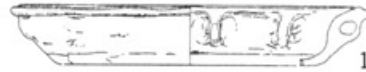


1700

1800

1900





1 (山中台)

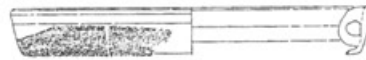
1700



4 (野乃間古墳)



5 (野乃間古墳)



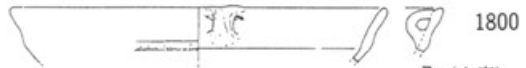
2 (村上)



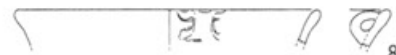
3 (村上)



6 (上宿)



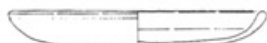
7 (上宿)



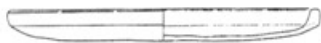
8 (上宿)



9 (富津陣屋)



10 (飯野陣屋)

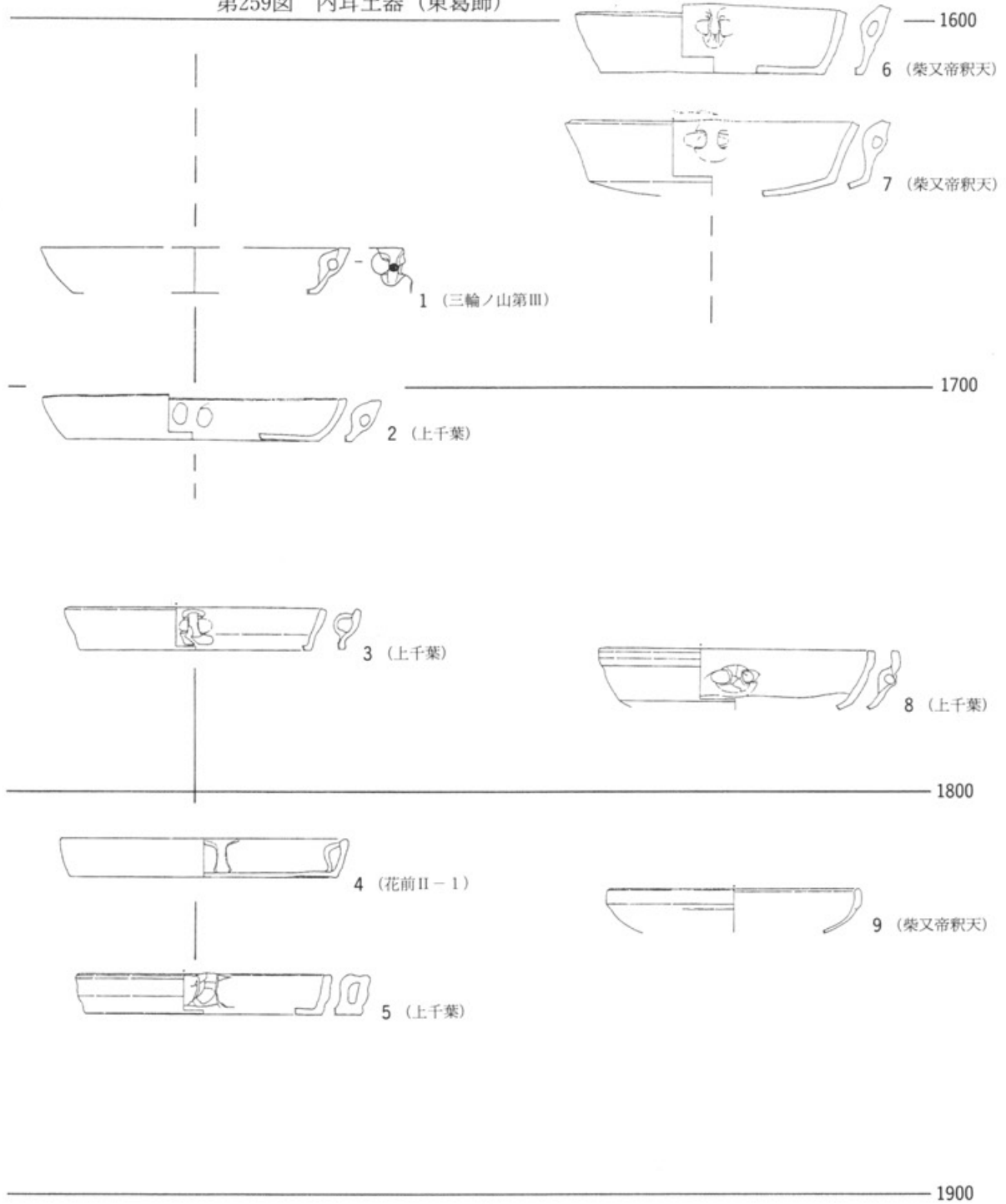


11 (飯野陣屋)

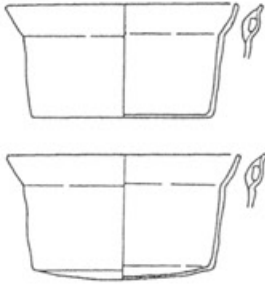
1900

第259図 内耳土器（東葛飾）

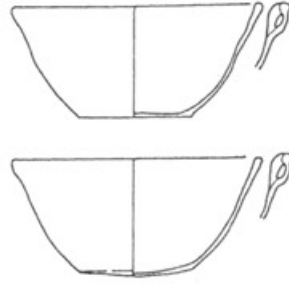
第4節 土器編年



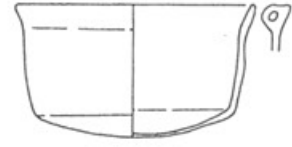
A群
I類



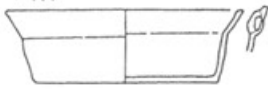
II類



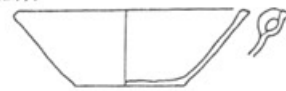
III類



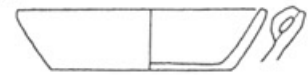
B群
I類



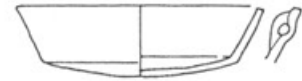
II類



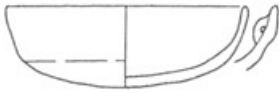
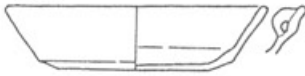
III類 a



b

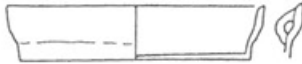


IV類

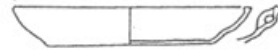


C群

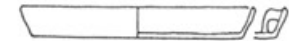
I類



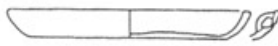
II類



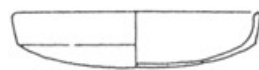
III類



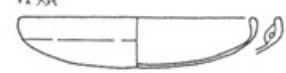
IV類



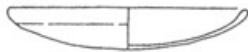
V類



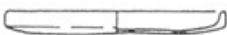
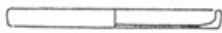
VI類



VII類



VIII類



(4) 深鉢形土器 (第261図)

中世後期に、大和国内において生産されたと考えられる瓦質土器火鉢を総称して奈良火鉢といい、ここで言う深鉢形土器は、この系譜上にあると考えられ、立石堅志氏分類の深鉢Ⅰ類^{⑤-042}に当たる。このタイプは斜め上方に緩やかに開く桶状のもので、脚を付すものと付さないものがある。口縁部の外面に凸帯を2条巡らせ、その間に花文などのスタンプを押捺する。底部付近に凸帯を1条巡らせるものもある。蓋を伴う可能性があり、火鉢以外の用途を考えることも必要である。法量には多様なものがある。この深鉢Ⅰ類の初現は14世紀末葉頃で、16世紀には出土量が大幅に増加するが、17世紀前半以降にはその姿を消したものと考えられている。ただし、大型の深鉢については18世紀まで生産されている。

江戸遺跡にはこの形態の出土例が余りなく、江戸内で作られたものではないようである。

県内の遺跡では、少なくとも15世紀中頃以前にはこの深鉢形態は見られないようである。

15世紀末から16世紀の城館である本佐倉城跡、臼井城跡に出土例がある。綱原屋敷跡遺跡で出土している瓦質のもの(1)は、供伴遺物から推定すると16世紀代の可能性が高い。その他、大栄町大慈恩寺遺跡^{③-199}、同松子城^{③-010}などに見られるが、これらは綱原屋敷跡遺跡と同時期と推定される。

古宿・上谷遺跡では、P-182・183(地下式坑)で美濃第3・4小期の天目茶碗と供伴している(3)。これは土師質の深鉢で、炭も出土しており火鉢として使用されていた痕跡が認められる。周辺の洞谷台遺跡(未刊行)、駒井野城遺跡(未整理)でも出土しており、この時期一定の流通が見られる。

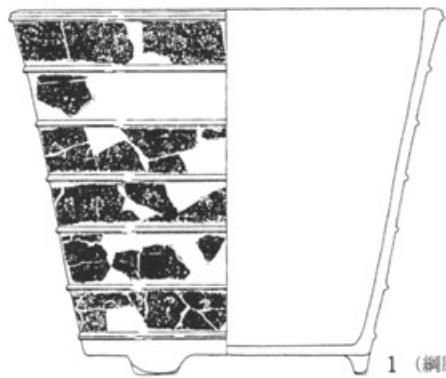
一方、18世紀から19世紀代の遺物が出土した佐倉城跡(1997県センター調査分)^{③-292}でも、ほぼ1個体になると思われる土師質の深鉢形土器が出土している(5)。

したがって、この深鉢形土器の生産時期は、16世紀から17世紀を中心に18世紀代以降にも及ぶ可能性がある。ただし、全時期に言えることであるが、総じて出土量は少ない。

一方、茨城県では鹿嶋市鹿島城跡^{③-125}や北浦村古屋敷遺跡^{③-177}、水戸市高原遺跡^{③-224}、つくば市古屋敷遺跡^{③-300}、取手市下高井城跡などで類例が認められ、概ね16世紀から17世紀の年代が与えられている。

このことから、その分布域は、鈴木氏が指摘するように霞ヶ浦周辺、特に南岸から北浦にかけて濃密であり、生産地がこの近辺にあるものと想定される。そして、千葉県内では、香取の海を隔てて隣接する香取郡や印旛郡域に主として供給されたものと考えられる。

1500



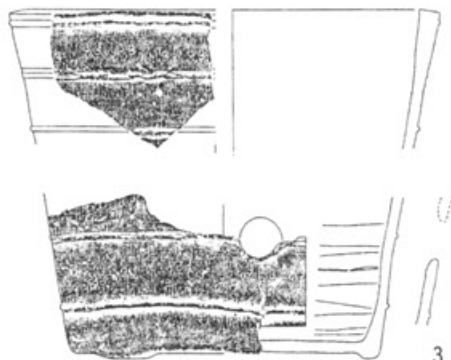
1 (網原屋敷跡)



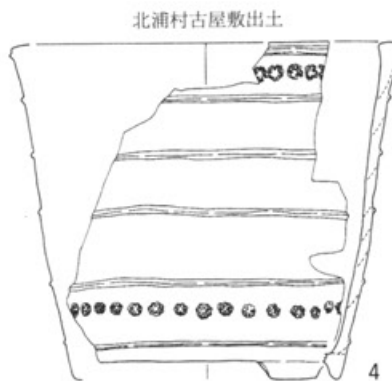
鹿嶋市鹿島城出土

2

1600



3 (古宿・上谷)



北浦村古屋敷出土

4

1700



5 (佐倉城)



6

豊島区北大塚遺跡出土

1800

1900

第5節 まとめと課題

以上、各器種ごとの編年作業を行ってきたが、最後にこの作業から得られた成果といくつかの問題点を改めてまとめてみる。

(1) 土器（カワラケ、土器播鉢、内耳土器、土釜、深鉢形土器）から見た画期の設定

ここでの画期の設定は、あくまでも土器の形態変化や土器間の組み合わせを中心に据えているので、他の陶磁器を含めた組成やその変遷はあまり考慮に入れていない。

I期：15世紀前葉までは、在地産土器は大小2から4形態のカワラケのみの生産である。この間、鎌倉の強い影響が見られる。この期の前半では常滑産甕・片口鉢I類、渥美産甕が見られ、後半になると常滑産甕・片口鉢II類、古瀬戸平碗を中心に、縁釉皿・折縁深皿・直縁大皿・天目茶碗が一定量見られる。また、輸入陶磁には龍泉窯系青磁蓮弁文碗A群・B群、白磁皿A群・B群、同安窯系皿が見られる。

カワラケの出土状況を見ると、井戸跡や屋敷溝から一括廃棄された形で出土する例が多く、ほとんどが儀式の際の、皿、酒杯や灯明皿として使用されたものと思われる。

I期の始まりについては、本論が便宜上13世紀から取り上げているため、13世紀初めと誤解されるかもしれないが、本来より古い時期の土師器を通じて見ていかなければならないのは言うまでもない。その場合、I期が2時期以上に分割できるかもしれない。

II期：15世紀中葉以降、カワラケ以外に土器播鉢、内耳土器、土釜が生産されるようになる。すなわち、瀬戸・美濃窯製品をモデルとするコピー製品の生産が開始される時期である。また、戦国末期の混乱期を反映するように、カワラケに地域ごとに形態差が現れ、分布するようになり、地域色が明瞭になる。この中で、近世に連続する皿形と碗形の2形態の萌芽がみられる。初期の段階では逆台形の箱形であったものが、次第に扁平になり、底径を増し、器高を減じて、外反皿形へと漸次変化する。城館跡出土カワラケには前期から引き続き、儀式の際の皿、酒杯や灯明皿としての機能以外に、建物築造の際の地鎮鎮壇具としての機能が見られるようになる。これは、城館以外でも、印西市大塚塚群第1号塚の例のように、塚築造の際の埋納品としても使用される。陶器は瀬戸・美濃後IV期以降の播鉢・天目茶碗・皿類・縁釉挟み皿が多く見られる。常滑製品はほとんど甕のみになる。輸入陶磁は染付碗C群・E群、皿B群・E群、白磁皿C群・D群が主体となっていく。

III期：16世紀末から17世紀前半は土器生産が激減した時期である。江戸及び東葛飾地域では、カワラケ、内耳土器に中世的なもの、近世的なものとの混在するという。いわば中世から近世への過渡期といえる。国産及び輸入陶磁共に出土量が極めて乏しい。その中で少量ではあるが、一定量出土するのが天目茶碗と志野（鉄絵）皿である。そのうちの志野皿が灯明具としてのカワラケの代用品として使用された可能性もあり、小田原と同じ様相が見られる。

IV期：17世紀後半から18世紀半ばに当たる。17世紀後半から18世紀にかけては、江戸カワラケの確立と発展の時期であるとされる。一方、千葉県では、皿形と碗形が未だ混在する。その中で、皿形カワラケは、次第に江戸カワラケへと指向していく。このころになるとカワラケが大量消費されることが無くなり、都市部・農村部で日常的に主として灯明皿として使用される。18世紀中葉前後に志戸呂産の灯明専用皿形陶器が登場するが、灯明具として使用されるカワラケは相変わらず存在する。藤尾氏の指摘するように内耳土器に見られる、18世紀中ごろの佐倉城III類からIV類への転換、すなわち、平底から丸底への転換は、囲

戸裏から竈への転換と相まって、大きな画期と考えられる。佐倉城のみならず、佐倉藩領の農村部でも竈への転換が進んでおり、千葉県内における大きな変化の時期である。この時期、それと呼応するように、一般農家の住居構造が掘立柱建物から礎石を伴うものに大きく変化しはじめる。また、陶磁器の出土量も前期に比べて飛躍的に増加する。

V期：18世紀後半から19世紀中葉は、カワラケの減少とともに胞衣カワラケなど、灯明具以外の特殊用途に限定されてくる。19世紀には江戸カワラケの流通とともに、カワラケと共に生産された内耳土器、灯明具、玩具などが、江戸やその周辺から流入するようになった。佐倉城武家屋敷跡にはなかった口縁端が内折し、器高の低い、内耳をもたない焙烙形態への変化は、江戸の影響そのものであろう。一方、東葛飾地域のみ、内耳土器が上野・北武蔵型の流通圏に組み込まれ、他の県内地域とは様相を異にする。灯明具は概ね、瀬戸・美濃産や信楽産の製品に取って代わられる。陶器は瀬戸・美濃産、磁器は肥前産で占められていたが、19世紀になると瀬戸・美濃産磁器が急速に市場に出回る。また、現代に継続する地方窯製品も多く見られるようになってくる。

(2) 瀬戸・美濃窯製品（モデル）と千葉県の土器（コピー）の関係

大橋康二氏は、池ノ尻館跡の播鉢の多くが、初期の段階から卸目を持ち、口縁端の上面に溝を有していて、これが瀬戸系播鉢に非常によく似ていると指摘している。おそらく氏の言う「瀬戸系播鉢」とは、藤澤分類の播鉢I類と考えられる。また、瓦質としたのは陶器播鉢に掛けられていた釉薬の色調をもコピーしたとも考えられる。

カワラケの中にも瀬戸・美濃製品のコピーが存在する。15世紀中葉以降南部系山茶碗尾張型、大窯1段階縁釉挟み皿など、主要な器種と共通した特徴が看取される。前者の山茶碗については千葉県内の出土例を知らないのが、この点に大きな疑問が残る。また、やや遡る例として、今回所収していないが、市原市姉崎棗塚遺跡で出土しているカワラケは、供伴する古瀬戸後Ⅲ期の縁釉皿に非常に良く似た形態をもつ。このことは、すでに田中信氏が川越市内出土の中世土師器編年の中で、各時期の土師器には形態的にそれを模倣した原型となる器形があることを指摘している。氏が原型となる器形にあげているものには、木器椀、京都「白色土器」、京都白かわらけ、京都赤かわらけ、南部系山茶碗、京都系非ロクロ土師器皿がある。一方で、影響される期間は極めて短期間で、次段階まで継続することはほとんどないように思われる。

17世紀中葉段階では志野皿を灯明皿として使用している例が見受けられるという。小田原城が好例であるが、名古屋城三の丸では、志野皿以外に輪禿皿、反り皿、小皿にまでその痕跡が見られる。金子健一氏は、土器皿の灯明具としての利用率は、地域によってまた、同一遺跡内の調査地点、時期によっても異なることを指摘し、これには階層差や場所による使い分け、慣習や嗜好の差などが要因と見られるとした。^{⑤-031} 県内の当期の検出例を見ても小田原城同様に、志野皿が比較的多く出土する傾向にある。また、完形よりも破片となって出土することが多く、油煙などの痕跡を必ずしも確認できたわけではないが、おそらく小田原城と同じように、志野皿を灯明皿として使用していた例もあったであろう。

このように見てくると、次項で取り上げた17世紀中葉前後の皿形カワラケに見られる、内面中央部が窪む特徴の祖形を、同期の志野皿・輪禿皿に求めることは強ち無謀とは言えないように思える。

(3) 江戸カワラケと千葉県のカワラケの関係

小林謙一氏によれば、17世紀初頭の江戸遺跡には、下総タイプ(輪積み成形後、ロクロ回転ナデ、底厚、底体間厚い。器高がやや高く底部突出)と南武蔵タイプ(輪積み成形後、ロクロ回転ナデ、底厚、底体間厚い。器高がやや低く底部の立ち上がりが滑らかなもの)のカワラケが混在する。17世紀中葉に小林A類(手捏ね)と南武蔵タイプの系譜を引く江戸C類(背が低く、底径が大きい外反口縁。底部が薄く底体間はやくびれる、ロクロ製品)が多量に出土するようになる。そして、17世紀後葉、折り返し技法のロクロ成形の小林F類(内湾口縁、ロクロ製品)が安定して出土するようになる。^{⑤-035}

ここでいう、下総タイプの例に、長勝寺脇館跡の鎮壇遺物や葛西城跡のA類中の遺物を挙げている。これは椀形の範疇に入る器形である。確かに、氏が下総タイプとした器形は下総に特徴的な器形かもしれないが、本論で明確にしたように、他に皿形とした器形も16世紀以前から継続して存在する。これは、むしろ17世紀には県内で主体となる器形で、形態変化から見た場合明らかに中世と連続している。椀形だけでは千葉県のカワラケと江戸カワラケとの関係は17世紀初頭をもって途絶えてしまう。皿形を含めた、江戸カワラケとの関係を再度考察する必要がある。ただ、現在の所千葉県内には17世紀初頭に確実に比定できる資料がないため、この点は資料の出現を待ちたい。

ところで、胎土から見ると、千葉県内のカワラケは、砂粒を多く含み器面がザラザラして、くすんだ褐色に発色しているのに対し、江戸カワラケは胎土が精選されており、焼き上がりは明褐色を帯びている。したがって胎土・焼成・色調からは明確に両者の相違を見出せる。また、小林氏の江戸カワラケ編年によると、17世紀後半から末以降18世紀代まで、器形は県内の変化とかなり異なる。一方で、技法面から見た場合、江戸カワラケに良く似た皿形のカワラケが、17世紀中葉前後に存在する。

両角氏が示し、小林氏が支持した「折り返し技法」については、小川貴司氏が疑問を投げ掛けているように、確かに技術的に見て否定的にならざるを得ない。すなわち、内面底部が台状に盛り上がっている点、内底部周縁が沈んでいる点、つまり、腰の部分を薄く水挽きしたために腰が落ちており、結果として台状部と周縁の沈みが作られていることに特徴があるが、氏はこの技法を「挽落とし」と命名し、その成形復元図を提示している。これは基本的に粘土塊から一気に挽き上げる粘土塊ロクロ成形で、従来の粘土紐輪積みによる成形とは異にするが、極めて合理的な説明で、千葉県のカワラケにも適合できそうである。

しかし、千葉県のカワラケで更に特徴的なのが、上宿遺跡、古宿・上谷遺跡、長倉宮脇遺跡および芝山町洞谷台遺跡出土遺物に見られる内面中央部が著しく窪み、結果的に中央部の器壁が薄くなっている点である。洞谷台遺跡のものは供伴遺物から17世紀前葉まで遡る可能性がある。氏の説明からすると職人が比較的高度な技術を持っていることが想定できるのに、なぜこのように器厚を一定に保てないか、合理的な説明ができない。

一方で、使用方法や目的面から見ると、中央部が窪んでいるために容積が増加する。少ない量であれば中央部にのみ、液体を溜めておける。また、上宿遺跡に見られるように、焼成後に底部中央部を穿孔しているものがあり、穴を開けやすいと考えることもできる。この穿孔の目的については、灯明具として利用するためと言われているが、どのように使用したか説明が必要となろうが、この器形の特徴に、灯明具としての性格付けもできるのではなかろうか。

このように、17世紀前葉から中葉頃には千葉県のカワラケは、江戸カワラケと極めて良く似た技術により、同じ様な形態が製作されていたと考えられる。17世紀前葉とされる丸の内三丁目遺跡52号土坑出土の

遺物（⑤-065図1の13カワラケ）などはその好例であると考える。

ただこの後、江戸カワラケが急速に薄型、直線的になっていくのに対し、千葉県のカワラケの変化は至って緩やかである。小林氏がF類とした典型的な江戸カワラケが登場するのは18世紀後半まで時間を要する。しかし、18世紀後半から末にかけて、県内産のカワラケは著しく減少し、生産の縮小現象と呼応するように、江戸カワラケが県内に供給されるようになる。灯明具としては、18世紀前半は志戸呂産、18世紀半ば以降は瀬戸・美濃産、19世紀には信楽産が大量に流通し、カワラケの灯明具としての需要がなくなるのであろう。消費量が激減し、需要が縮小した、一方、コストの増加に見合う収入が見込まれないため、千葉県のカワラケ生産が急速に衰退したと考えられる。カワラケと同時に生産されている内耳土器、灯明具、玩具なども流通するようになったものと考えられる。しかし、その中で灯明具は千葉県の場合、陶器製が主体で、土製のものが広まることは、あまりなかった。

（4）生産と流通に関して

15世紀後半以降、カワラケに地域的特色が見られるようになることは、前項で述べたとおりであるが、これは生産依頼者である支配者層の違いが、土器の形態の相違に現れてきた可能性を示唆するものである。つまり、15世紀後半から16世紀代の様々な形態の土器の分布と、戦国後期の領主交代やそれに伴う支配関係の範囲とが一致するのではなかろうかと考えたい。その典型例として、本佐倉城跡の手捏ねカワラケ模倣のロクロを使用したカワラケがあげられよう。したがって、カワラケは、その分類に、領主層の交代・主従関係の変化を加味していくことで、より詳細な分類が可能となるのではなかろうか。この点で文献史学との連携が必要になってくると思う。

^{⑤-001}馬場脩氏の文献（昭和15年）には、昭和15年時点での興味深い民俗例が記されている。以下部分的に加筆したものを引用する。

「千葉県の上総の大部分と下総の一部の農家において、内耳の土焙烙が使われており、色々な物、餅、豆、茶等を煎るために使用されて、特に正月農繁期に最も多く用いられている。産地は成田や酒々井付近、東金付近、五井付近に小規模の焙烙屋が数軒所在して、製作しているが、酒々井、東金付近の物は質がやや硬いようである。五井付近のものは赤褐色を呈し、質は黒色のものよりややもろい。特に五井付近の浅井の産は破損しやすいということである。内耳の付け方に2種あって、三耳の物と四耳のものがあるが、三耳付きの物は五井から千葉船橋方面に好まれ、四耳付きのものは五井から木更津寄りの方面の好みとなっている。これは煎返しによる好みによるものである。これらの土焙烙には大小二三種あるが、概して計約35cm内外、深さ5～6cm位のもので、三耳付きのものも耳は均等の距離になく、二耳がやや接近して、他の一耳に相対して付されているし、四耳付きの物は前述の北千島出土の土鍋の四耳付きの手法である。これらは古くは農家の爐鍵につるされて、北斎の絵のごとくに使用されたものであったが、今日爐鍵のない家が多分あるので、多くは耳に紐を通して手を以て煎返している。」

この記述から、県内には4か所ほどの生産地があったこと。その使用目的・消費地の好みに応じた個数の耳の焙烙を生産していたこと。生産地による胎土や焼きの違いがあること。焙烙屋が生産も行っていたことなどがわかる。

内耳土器の生産が昭和15年当時突然始まったとは考えにくく、おそらくこれらの生産地は近代初頭かそれ以前に操業開始時期を求められるのではなかろうか。また、当然この時点にはすでに生産を終了してい

る生産地もあるであろう。特に、金雲母を多量に含む平底の内耳土器は、19世紀に入るとほとんど見られなくなる。金雲母を胎土中に含む土器は古来より、利根川下流域の佐原や対岸の茨城県東町付近に見られるということから、当地付近に生産地が求められるかもしれない。

以上、現在までの成果の幾つかをまとめたつもりではいるが、画期の設定では時期設定がかなり雑駁になってしまった感がある。また、筆者の力不足のため、先行する研究が提起した様々な問題点に何ら触れることができず、当初掲げた房総の中近世城館跡の構造と特質という遠大なテーマに到底達することはできなかった。資料不足の時期・地域については、今後の資料の増加を待って、再検討する必要がある。また、遺物を研究するにあたっては、地域相互間の資料のデータ化と共通理解の必要性をあらためて認識した次第である。

今回の成果を遺構へフィードバックさせることによって、各種遺構の機能論、城館の場としての機能論などもより一層具体的なものになると考えられる。さらなる城館研究の進展を祈念し、大方のご指導・ご教示をお願いしたい。

最後になるが、章末に近世城館跡・陣屋跡の調査成果を一覧表にしてとりまとめた。余り対象とはされない時代であるが、ここに含まれない城館以外の近世遺跡の調査も、少なからず実施されていると思うと、中近世考古学の更なる発展を祈念してやまない。

第12表 近世城館跡・陣屋跡の調査経歴

佐倉城跡・城下跡 (慶長16年1611～明治4年1871)

佐倉市城内町他

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	椎木曲輪、三の丸	③-007	400	昭和46年7月25日～同年8月31日	国立歴史民俗博物館設置予定地内遺構調査団	濠	陶磁器、カワラケ、瓦、煙管、焙烙、金属製品
2	椎木曲輪、馬出し地区	③-031	約1,300	昭和51年6月1日～同年7月15日	(財)千葉県文化財センター	濠、井戸	陶磁器、在地産土器、瓦、銭貨、刀
3	椎木曲輪、馬出し地区	③-066	1,200	昭和52年1月28日～同年3月28日		濠	?
4	椎木曲輪	③-044	1,200	昭和52年10月31日～53年3月31日		濠(中世鹿島城に伴う)	陶磁器、瓦、銭貨、カワラケ
5	三の丸	③-066	1,650	昭和54年12月1日～55年3月31日		馬出、堀、門、礎石、土塁	陶磁器、鉄釘、銭貨、瓦
6	本丸	③-079	?	昭和55年1月19日～56年4月6日	佐倉市教育委員会	礎石、井戸、堀	瓦、釘、鎌
7	三の丸	③-073	800	昭和55年12月1日～56年3月31日	(財)千葉県文化財センター	溝状遺構	瓦
8	三の丸	③-101	1,300	昭和58年10月3日～同年12月3日	国立歴史民俗博物館	井戸、濠、溝、土坑、柱穴群	陶磁器、瓦、焼塩壺
9	椎木曲輪(中級～上級武家屋敷地区)	③-209	3,000	昭和59年7月10日～60年1月24日		礎石、地鎮跡、畑畝、井戸、かわや、地下倉	陶磁器、在地産土器、カワラケ、武器、武具、煙管、簪、鉄、毛抜き等
10	並木町(武家屋敷?)	②-161	800	昭和62年2月23日～同年3月3日	(財)印旛郡市文化財センター	井戸、土坑、地下式坑	陶磁器、カワラケ、焼塩壺、瓦
11	竊木小路遺跡第1地点(下級武家屋敷地区)	*	256 348.3	昭和63年4月25日～6月1日(確認) 平成元年1月17日～同年3月15日(本調査)	佐倉市教育委員会	地下式坑、土坑、門、畝状遺構、	陶磁器、カワラケ、砥石、銭貨、煙管、釘、刀、在地産土器、槍、鎌 柱穴群、井戸
12	曲輪ノ内遺跡(1次)(武家長屋敷地区)	③-181	128 1,317	平成元年10月30日～同年11月2日(確認) 平成元年12月1日～同年12月22日(本調査)	(財)印旛郡市文化財センター	掘立柱建物、柵列、井戸、土坑	陶磁器、カワラケ、焙烙、硯、砥石、瓦、銭貨、金属製品、土製品
13	新町遺跡(市立美術館)	*	不明	平成4年9月25日(試掘)	佐倉市教育委員会		陶磁器、カワラケ、袍衣容器
14	佐倉中学校・大手門脇(上級武家屋敷地区)	③-252	60 600	平成5年7月14日～同年7月16日(確認) 平成5年9月1日～同年10月29日(本調査)	(財)印旛郡市文化財センター	礎石、地下倉、水溜、土坑、柵列、溝	陶磁器、在地産土器、カワラケ、土製品、瓦、砥石、煙管、鉄釘
15	曲輪ノ内遺跡(2次)(武家長屋敷地区)	③-253	2,785	平成6年7月22日～同月25日(確認) 平成6年7月26日～同年9月9日(本調査)		掘立柱建物、土坑、井戸、堀、溝、柱穴列、柱穴群	陶磁器、在地産土器、硯、砥石、櫛、杓子、煙管、銭貨、釘、鉄等
16	竊木小路遺跡第2地点(下級武家屋敷地区)	*	50	平成7年2月13日～同年2月17日	佐倉市教育委員会	土坑、溝、礎石	陶磁器
17	竊木小路遺跡第3地点(下級武家屋敷地区)	③-278	502	平成7年10月16日～同年11月10日		礎石、井戸、地下式坑、土坑、土坑墓、小鍛冶跡	陶磁器、釘、刀装具、袍衣容器(カワラケ)
18	弥勒東台遺跡(寺社屋敷地区・旧松林寺)	③-276	584	平成8年8月1日～同年8月31日	(財)千葉県文化財センター	土塁、堀、溝、道路、掘立柱建物、土坑、井戸	陶磁器、在地産土器、鉄製品、銅製品、石製品、銭貨、瓦、埴塼、鉄滓
19	竊木小路遺跡第4地点(下級武家屋敷地区)	②-359	391	平成8年8月1日～同年9月6日	(財)印旛郡市文化財センター	建物跡、土坑	陶磁器、カワラケ、瓦、土製品、鉄製品、煙管、飾り金具、銭貨
20	佐倉中学校体育館(上級武家屋敷地区)	②-359	2,208	平成8年8月19日～同年10月18日		井戸、溝、ピット、掘立柱建物、土坑	陶磁器、瓦、青銅製品、鉄製品、銭貨
21	曲輪ノ内遺跡	②-358	1,143	平成9年3月4日～同年3月7日		掘立柱建物、土坑、井戸、堀、溝	陶磁器
22	佐倉東高校(上級武家屋敷地区)	③-292	50	平成9年4月3日～同年4月21日	(財)千葉県文化財センター	井戸、土坑、焼土	陶磁器、カワラケ、土鍋、土製品、瓦、砥石、鋳型、金属製品、銭貨
23	曲輪ノ内遺跡	*	220	平成9年8月20日～同年8月26日(本調査)	佐倉市教育委員会	掘立柱建物、道路状遺構、柵状遺構	カワラケ、陶磁器、煙管、銭貨、鉄製品
24	三味線堀	*	363	平成9年11月5日～同年11月11日(確認)	(財)印旛郡市文化財センター	土手	陶磁器、銭貨、人形、瓦
25	野狐台町遺跡(1次)足軽長屋付近	*	290	平成11年4月21日(試掘)	佐倉市教育委員会	なし	陶磁器
26	野狐台町遺跡(2次)足軽長屋付近	*	307	平成11年4月22日～同年4月28日(確認・本調査)		柵状遺構、鉄製品、泥面子	
27	新町遺跡(美術館西隣接地)	*	84	平成11年6月8日～同年6月9日(確認)		埋立造成、町屋跡(礎石、硬化面)	陶磁器、カワラケ、銭貨

*佐倉市教育委員会より御教示いただいた。

飯野陣屋跡 (慶安元年1648ごろ～明治4年1871) 富津市下飯野

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	二の丸	③-084	242	昭和56年11月	稲荷口遺跡調査会・富津市教育委員会	溝、土坑	陶磁器
2	外邸	③-111	-	昭和58年8月～同年12月	(財)君津郡市文化財センター	溝	陶磁器、在地産土器
3	外濠・土塁	③-124	80	昭和59年6月		溝、土坑(古墳周溝)	陶磁器、瓦、在地産土器、土人形、硯
4	本丸・二の丸・三の丸	③-155	200	昭和62年11月	(財)千葉県文化財センター	溝、土坑、貝殻地業、(古墳周溝)	陶磁器、瓦、在地産土器、土人形、鉄釘、砥石
5	九条塚古墳周溝・亀塚古墳周溝	③-190	616	平成元年1月～同年3月	(財)君津郡市文化財センター	(古墳周溝)	陶磁器、瓦、土人形、銭貨
6	三条塚古墳周溝・石室	③-174	500	平成元年11月～同年12月		藩校建物基礎、(古墳周溝)	陶磁器、矢立、石盤、簪
7	稲荷塚古墳周溝	③-190	150	平成2年11月		(古墳周溝)	陶磁器
8	二の丸	③-223 ③-222	1,154	平成4年8月		濠、溝、道路、礎石、柱穴列、堅穴遺構、土坑群、土坑	陶磁器、在地産土器、板ガラス、ガラス容器、瓦、土人形、鉄釘、砥石
9	三の丸	③-234	432	平成5年8月		溝	瓦
10	亀塚古墳周溝	③-242	1,925	平成6年11月		溝、土坑、貝殻地業	陶磁器
11	三の丸	③-261	404	平成7年7月		溝	陶磁器、瓦、砥石
12	内裏塚古墳周堤・三の丸	③-288	559	平成8年6月		土坑、溝	陶器、瓦
13	三の丸	③-297	500	平成9年11月		溝、土坑、(古墳の周溝)	瓦

飯野陣屋跡周辺の遺跡

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
14	内裏塚古墳周溝・野乃間古墳周溝	③-124	-	昭和59年7月～60年2月	(財)君津郡市文化財センター	(古墳周溝)	陶磁器
15	野乃間古墳周溝	③-146	751	昭和62年4月～同年5月		(古墳周溝)	陶磁器、在地産土器、石臼
16	南口遺跡	③-175	2,400	昭和63年10月～同年11月		溝、土坑群、(溝、土坑)	陶磁器、漆器、銭貨、煙管
17	内裏塚古墳周溝・九条塚古墳周溝・武平塚古墳周辺	③-205	482	平成3年5月～同年6月		溝、(古墳周溝)	陶磁器、瓦、土錘、杭、下駄
18	内裏塚古墳周堤	②-275	1,683	平成6年1月	富津市教育委員会	溝	なし

千葉御茶屋御殿跡 (徳川家康・秀忠・家光三代1614～1630使用) 千葉市若葉区

	調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1	郭内・外	③-033	-	昭和48年8月1日～同年12月27日	千葉市御茶屋御殿跡調査団	測量調査	-
2	郭外	③-020		昭和49年7月3日～同年8月23日		堀、掘立柱建物、堅穴状遺構	陶器、瓦、鉄製品、銭貨
	郭内	③-184	?	昭和49年11月6日～50年3月31日			
3	郭内主殿	③-183	約650	平成2年11月1日～同年12月1日	千葉御茶屋御殿跡調査会	建物基礎、柱穴列、土塁、溝、土坑、硬化面	染付、土鍋、瓦、砥石、鉄製品、簪、煙管
4	北門・郭内南西地区	③-212	?	平成3年8月3日～同年8月15日	国立歴史民俗博物館	掘立柱建物	?
5	郭内中央部、御主殿・御休息所	③-212	3,000	平成4年7月24日～同年8月31日	千葉御茶屋御殿跡調査会	礎石建物、掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、通路、道路、溝	陶器、カワラケ、焙烙、瓦、釘
6	郭内東部、長屋	③-214	3,000	平成5年7月17日～同年9月6日?		礎石建物、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、貯水槽、土塁、通路	陶器、瓦質播鉢、瓦、釘
7	郭内西部	③-230	2,500	平成6年7月18日～同年9月20日?		掘立柱建物、土塁、土坑、地割り溝	陶器、瓦質播鉢、瓦

森川陣屋跡（生実城跡）（寛永4年1627～明治4年1871） 千葉市中央区

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 大手口北側堀	③-091	?	昭和56年10月1日～57年6月30日	(財)千葉県文化財センター	堀	?
2 郭内・堀・郭外	②-188	7,500	昭和63年6月1日～平成元年1月28日	(財)千葉市文化財調査協会	堀、土坑、溝	陶磁器、キセル、簪、釘
3 郭外東	②-248	650	平成3年6月3日～同年10月5日		溝、柱列	?
4 郭内南西隅・堀	②-266	500	平成5年1月11日～同年3月26日		掘立柱建物、柵列	?
5 郭内南端・郭外	②-289	1,050	平成5年5月6日～同年11月17日		井戸、土坑、ピット、建物?	陶磁器、
6 大手口東・西側	②-307	5,500	平成6年4月1日～同年10月31日		鋳物屋建物	?
7 大手口北側	②-342	4,720	平成8年2月16日～同年3月29日		堀、造成面、土坑、ピット、溝	陶磁器、
8 大手口北側	②-364	4,890	平成8年4月1日～同年9月30日		掘立柱建物、柱穴列、土坑、ピット、溝	?

高岡陣屋跡（延宝4年1676～貞享元年1684～明治4年1871） 香取郡下総町高岡

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 主郭部中門周辺	③-294	570	平成9年1月16日～同年2月24日	(財)香取郡市文化財センター	池、木樋、掘立柱建物、土坑	陶磁器、在地産土器、輸入陶磁、瓦、銅製品、硯、土人形、どろめんこ、銭貨

関宿城跡（～天正18年1590～明治8年1875ごろ） 東葛飾郡関宿町久世曲輪

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸	③-140	400	昭和61年11月4日～同年11月29日	(財)千葉県文化財センター	石積遺構、溝、建物基礎（瓦片）	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、羽口、金属製品、銭貨
2 本丸、武家屋敷、三の丸	③-149	500	昭和62年9月1日～同年10月13日		石積遺構、溝、建物基礎（瓦片）、同（粘土）、土坑	陶磁器、在地産土器、金属製品、銭貨、鉛玉、基石
3 武家屋敷、他	③-158	1,000	昭和63年8月16日～同年10月4日		建物基礎（粘土）、井戸、土坑、溝	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、金属製品、銭貨

大多喜城跡（～天正18年1590～明治4年1871?） 夷隅郡大多喜町

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸	③-022	約600	昭和48年春、夏	大多喜城址調査団	掘立柱建物、溝、配石遺構	陶磁器、在地産土器、瓦、石製品、金属製品

久留里城跡（～天正18年1590～明治4年1871） 君津市久留里

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 本丸、二の丸	③-060	591	昭和52年7月1日～同年8月31日	久留里城址発掘調査団	石敷、礎石建物、天守台、長屋塀、土塀	陶磁器、瓦、在地産土器（カワラケ）、釘、銭貨、砥石、金属製品
2 三の丸外堀	③-202	118	平成3年11月1日～同年11月12日	君津市教育委員会	堀	瓦、陶磁器

富津陣屋跡（文政4年1821～慶応4年1868） 富津市富津

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 郭内 通称 屋敷畑	③-287	508 3,400	平成8年9月5日～同年9月13日（確認） 平成9年1月6日～同年2月14日（本調査）	(財)君津郡市文化財センター	礎石建物、ろうそく石礎石列、井戸、庭、溝、土坑	陶磁器、在地産土器、瓦、簪、硯、温石、煙管、鉄製品、銭貨、鉛玉、木製品

真武根陣屋跡（嘉永3年1850～慶応4年1868） 木更津市請西

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 ?	②-351 ②-370 ②-374	13,800	平成9年9月1日～10年3月10日	(財)君津郡市文化財センター	土塁、堀、溝、瓦囲炉	瓦、鉄製品

西郷氏館跡（陣屋跡）（元和6年1620～元禄5年1692） 鴨川市東町

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 郭内・外	③-290	20,050	平成7年4月6日～同年9月29日	東条地区遺跡調査会	堀、井戸	陶磁器、木製品

佐貫城跡（～永禄12年1569～天正18年1590～明治4年1871?） 富津市佐貫

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 I 郭他	③-074	202	昭和55年12月15日～56年2月14日	佐貫城跡・本佐貫城跡発掘調査団	石垣、土塁、土橋	瓦

館山城調査跡（天正18年1590～慶長19年1614） 館山市館山

調査区	文献	面積(m ²)	調査期間	調査機関	検出遺構	近世遺物
1 御殿跡、千畳敷土塁	③-055	109	昭和53年2月28日～同年3月3日（確認調査）	館山城跡調査会	遺物包含層	陶磁器、鉄滓
2 御殿跡、鹿島堀	③-062	176	不明		堀、掘立柱建物?	陶磁器
3 御殿跡、鹿島堀	③-072	不明	昭和54年10月22日～同年30日 昭和55年1月21日～同年25日		堀、掘立柱建物?	不明
4 鹿島堀	③-112			館山城跡鹿島堀調査会		
5 御殿跡	③-147	不明	昭和61年11月4日～同年11月22日	第4次館山城跡調査会	掘立柱建物	陶磁器、カワラケ、土師質土器、瓦質土器、瓦

付章 文 献 目 録

本目録は、主に千葉県内の中近世城館跡に関連する文献であり、千葉城郭研究会編『千葉城郭研究』第1号（1989年）～第5号（1998年）所収の文献目録を参考に、基本的には平成11年（1999）年度上半期に入手できたものを加えたものである。また、本書本文中で取り上げた県外の文献を加え、以下の様に種別にし、掲載された遺跡を地域別に記号化し、通し番号も改めて振り直した。なお、第3章の遺物に関する参考論文については、直接城館跡とは関わらず煩雑となるので末尾に加えた。

文献種別記号

- ① 自治体史（第13表）
- ② 雑誌・定期刊行物（第14表）
- ③ 発掘・測量調査報告書（第15表）
- ④ 単行本（第16表）
- ⑤ 第3章参考論文（第17表）

地域別記号

原則として以下のように近世郡域により分けた。記号は、縄張構造等の表・グラフと同一である。

- A 東葛飾地域（旧葛飾郡南東部）
- B 印旛地域（旧印旛郡）
- C 千葉地域（旧千葉郡（習志野市・八千代市を含む））
- D 香取地域（旧埴生郡・香取郡）
- E 海匝地域（旧匝瑳郡・海上郡）
- F 山武地域（旧武射郡・山辺郡（千葉市土気地区を含む））
- G 長生地域（旧長柄郡・埴生郡）
- H 夷隅地域（旧夷隅郡）
- I 市原地域（旧市原郡）
- J 君津地域（旧望陀郡・周准郡・天羽郡）
- K 安房地域（旧平郡・長狭郡・朝夷郡・安房郡）
- L 県内全域または広域
- M 県外

①自治体史

第13表 文献目録①(自治体史)

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
001	1878	L	安川柳溪	上総国誌(改訂房総叢書第四輯地誌(二)(1959年)に所収)	
002	1886	K	内務省地理局	大日本国誌 安房	近藤活版
003	1912	B	印旛郡教育会	印旛郡誌 前篇 各章	印旛郡役所
004	1913	B	印旛郡教育会	印旛郡誌 後篇 各章	印旛郡役所
005	1913	G	長生郡教育会	長生郡郷土誌 第六章古城址	長生郡教育会
006	1916	A	松戸町	松戸町誌 第十七章名勝旧蹟	松戸町
007	1916	A	小金町	小金町誌 第十七章名勝旧蹟什宝	小金町
008	1916	F	山武郡教育会	山武郡郷土誌 第十五旧跡・名所	山武教育会
009	1916	I	市原郡教育会	市原郡誌 第三沿革及史蹟 第二章旧蹟	市原郡教育会
010	1917	E	海上郡教育会	海上郡誌 第十五章名勝旧蹟・第三節古城址	海上郡教育会
011	1919	L	千葉県	稿本 千葉県誌 卷下 第三章城址・第四章館址	多田屋書店
012	1920	A	菅井敬之助	湖北村誌 第一編 第十一章旧蹟	湖北村役場
013	1921	D	香取郡役所	香取郡誌 第十七編旧蹟誌、第十九編城主誌	香取郡役所
014	1921	E	匝瑳郡教育会	匝瑳郡誌 第三章古城址附古墳	匝瑳郡教育会
015	1923	A	奥原経営	関宿町誌 第十四章名所旧跡	奥原経営
016	1923	A	東葛飾郡教育会	東葛飾郡誌 第十六章名所旧蹟	東葛飾郡教育会
017	1923	H	夷隅郡教育会	夷隅郡誌 第十二章名所旧蹟名邑城址及び砦址・館誌	夷隅郡役所
018	1926	C	千葉郡教育会	千葉郡誌 第十五章第三節古城址	千葉郡教育会
019	1926	K	安房郡教育会	安房郡誌 第十四章社寺及名勝旧蹟	安房郡教育会
020	1927	J	君津郡教育会	君津郡誌 下巻 第三編名勝旧蹟・第二章城砦址	君津郡教育会
021	1929	D	佐原町	佐原町誌 第五章旧蹟	佐原町
022	1942	L	房総叢書刊行会	上総国誌(復刻) 上総諸城誌・治城・陣屋	房総叢書刊行会
023	1943	D	高木卯之助	古城村誌前編 第四章守護時代	香取郡古城村
024	1952	D	高木卯之助	古城村誌後編 第一章地誌第七節旧蹟	古城村誌復刻刊行会
025	1955	G	本納町	本納町史 第二章第五節本納城と酒井氏	吉川弘文館
026	1956	E	銚子市史編纂委員会	銚子市史 第三章第六節東氏と海上氏の衰亡	銚子市史編纂委員会
027	1956	F	大橋栄	豊岡村誌 第二編第六節諸城址と史蹟	豊岡村郷土史研究会
028	1962	A	高橋源一郎	船橋市史 前編 金堀城址、殿山	船橋市
029	1962	J	君津町誌編纂委員会	君津町誌 前巻 第二章沿革資料第三節名所旧蹟	君津町誌編纂委員会
030	1966	D	島田七夫	佐原市史 第二章中世・矢作城の推移	佐原市役所
031	1969	A	柏市史編纂委員会	富勢村誌「柏市史資料編Ⅰ」第四編名所旧蹟第二章旧蹟	柏市史編纂委員会
032	1971	B	篠丸頼彦・伊禮正雄	佐倉市史 卷一 第二編第二章中世 中世城址	佐倉市
033	1971	K	館山市史編纂委員会	館山市史 第四章中世の館山	館山市
034	1972	J	木更津市史編纂委員会	木更津市史 第二編第三章南北朝・室町・安土桃山時代	木更津市
035	1973	A	奥原謹爾	関宿志 関宿城	関宿町教育委員会
036	1973	G	長南町史編纂委員会	長南町史 第二章中世・庁南城について	長南町
037	1973	J	君津町誌編纂委員会	君津町誌 後編 第七章第九節吉野室町・安土桃山時代	君津町
038	1973	J	平川町史編纂委員会	平川町史 第一章第三節参考資料	袖ヶ浦町
039	1974	A	小室栄一	市川市史 第二巻 第十七章市川の城と館	吉川弘文館
040	1974	B	八街町史編纂委員会	八街町史 第十二章町内そぞろある記	八街町
041	1974	D	栗源町史編纂委員会	栗源町史 四、町史資料	栗源町
042	1974	J	小糸町史編纂委員会	小糸町史 第一章原始・古代・中世	小糸町
043	1975	B	栗原東洋	四街道町史 通史編 第四章中世の鹿島川流域と臼井氏	四街道町
044	1975	E	千潟町史編纂委員会	千潟町史 第三章第四節中世の動乱と武士の動向	千潟町
045	1976	E	八日市場市史編纂委員会	新編飯高村郷土史付飯高村誌 市史編纂資料7	八日市場市史編纂委員会
046	1976	F	後藤和民	千葉市史 史料編一 第四節第五項3大椎城址とその周辺	千葉市
047	1976	F	伊藤一男	横芝町史 特別寄稿篇 戦国井田領の形成と展開	横芝町史編纂委員会
048	1976	J	清和村誌編纂委員会	清和村誌 第四節城砦墳墓	清和村誌編纂委員会
049	1977	G	長柄町史編纂委員会	長柄町史本篇 第二章伝承の城址と豪族	長柄町
050	1978	C	村田一男	八千代市の歴史 第3章第2節武士の館、第4節戦国の世	八千代市
051	1978	J	小櫃村誌編纂委員会	小櫃村誌 第九章第二節城址、遺構	君津市
052	1979	A	佐藤立身	沼南町史 中世・城郭史	沼南町
053	1981	B	綿貫啓一	富里村史 第4章中世・富里の城館址	富里村
054	1981	E	飯岡町史編纂委員会	飯岡町史 第三章中世のあゆみ	飯岡町

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
055	1982	D	伊藤一男	東庄町史 上巻 第2章中世・中世の城館跡と伝承	東庄町
056	1982	E	八日市場市史編纂委員会	八日市場市史 上巻 第二編第七章八日市場地方の中世城址	八日市場市史編纂室
057	1982	J	富津市史編纂委員会	富津市史 通史 第三編第一章富津地方の推移	富津市
058	1982	J	木更津市史編集委員会	木更津市史 富来田編 第3編第2章真里谷城址と周辺の城郭	木更津市
059	1983	E	光町編纂委員会	光町史	光町
060	1983	H	橋口定志	岬町史 第三章中世	岬町
061	1983	H	柴田龍司	岬町史 第十二章岬町の中世城郭	岬町
062	1984	B	高橋三千男	印旛村史 第三編中世・城址と城主	印旛村
063	1984	F	伊藤一男	松尾町の歴史 上巻 II、中世の武士と村落	松尾町
064	1984	K	三芳村史編纂委員会	三芳村史 第二章中世の三芳村	三芳村
065	1985	D	多古町史編纂委員会	多古町史 上・下巻 第3章第4節中世後期 他	多古町
066	1985	D	山田勝治朗	山田町史 中世編 第2章第4節中世城館跡	山田町
067	1985	E	野栄町史編纂委員会	野栄町史 通史編 第二章第三節野手氏と野手館	野栄町
068	1985	J	牛房茂行	袖ヶ浦町史 通史編 第3編第4章中世の城址	袖ヶ浦町史編纂委員会
069	1986	B	村田一男	成田市史 中世・近世編 第4章市域の中世城郭史と伝承	成田市
070	1986	F	小高春雄	大網白里町史 第2章中世・大網白里の城館址	大網白里町
071	1986	F	伊藤一男	成東町史 第二章第四節房総の動乱と成東城	成東町
072	1986	I	伊藤正雄 他	市原市史 中巻 第二章南北朝時代	市原市
073	1987	B	高橋三千男	酒々井町史 通史編上巻 第四章第四節酒々井地方の中世城跡	酒々井町
074	1988	F	伊藤一男	山武町史 通史編 二章 四節・五節戦国房総の動乱と土豪層	山武町
075	1988	F	小高春雄	山武町史 通史編 二章 六節山武町の中世城郭	山武町
076	1990	D	植竹好明 他	下総町史 原始・古代・中世編	下総町史編さん委員会
077	1991	A	高橋三千男 他	船橋市史 原始・古代・中世編	船橋市
078	1991	C	村田一男 他	八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世	八千代市
079	1991	D	日下武史 他	小見川町史 通史編	小見川町史編さん委員会
080	1991	H	伊藤一男 他	大多喜町史	大多喜町史編さん委員会
081	1993	C	村田六郎太 他	絵にみる図でよむ千葉市図誌	千葉市史編さん委員会
082	1993	H	加藤晋平 他	御宿町史	御宿町史編さん委員会
083	1993	K		富山町史	富山町史編さん委員会
084	1993	L,M	藤澤良祐	瀬戸市史 陶磁史篇四	愛知県瀬戸市
085	1994	B	遠山成一 他	図説成田の歴史 (市域の武将と中世城館跡)	成田市
086	1996	F	佐脇敬一郎 他	芝山町史 資料集2 中世編	芝山町
087	1997	A	佐脇栄一郎 他	柏市史 原始・古代・中世編 (市域の中世城館跡)	柏市教育委員会
088	1997	I	柴田龍司・滝川恒昭	袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書7 袖ヶ浦の中世城館跡	袖ヶ浦市教育委員会
089	1998	C	保立道久	「鎌倉時代、千葉の「うり酒」」「千葉県の歴史 資料編 中世2」付録 「県史のしおり」	千葉県
090	1998	K	滝川恒昭・遠山成一 他	天津小湊町の歴史 上巻	天津小湊町
091	1998	L	笠生 衛・柴田龍司 他多数	千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料	千葉県

第14表 文献目録② (雑誌・定期刊行物)

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
001	1906	K		安房城址	風俗画報 347	
002	1915	M	梅原末治	越後敦賀郡の遺跡遺物	考古学雑誌 第5巻第8号	考古学界
003	1917	B	篠丸頼彦	佐倉城とその周辺	月刊文化財 昭和46年11月号	第一法規
004	1917	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 5号	千葉県文化財保護協会
005	1926	K	鳥羽正雄	里見氏の古城址	歴史地理 53-4	歴史地理学会
006	1933	K	大野大平	房総里見氏談 6	房総郷土研究 第1巻第3号	千葉県師範学校郷土研究室
007	1933	K	大野大平	房総里見氏談 7	房総郷土研究 第1巻第4号	千葉県師範学校郷土研究室
008	1934	A	浦邊仙橋	千葉県船橋町花輪城址踏査報告	武蔵野 21巻12号	武蔵野文化協会
009	1934	K	大野大平	安西景益館址考	房総郷土研究 第1巻第8号	千葉県師範学校郷土研究室
010	1935	K	松川 清	環斎屋敷考	房総郷土史研究 第2巻第3号	千葉県師範学校郷土研究室
011	1936	D	塩原伝・後藤寿一	下総国香取郡米沢村及其附近の遺跡並びに遺物に就いて	考古学雑誌 第26巻第11号	日本考古学会
012	1938	K	大野大平	屋代家の遺蹟	房総郷土研究 第5巻第9号	千葉県師範学校郷土研究室
013	1954	B	相京晴次	将門山千葉故城址考	佐倉地方文化 5号	佐倉地方郷土文化研究会
014	1955	B	万年 一	臼井城について	佐倉地方文化 7号	佐倉地方郷土文化研究会
015	1955	B	成田史談会	印旛の古城址	成田史談 1号	成田史談会
016	1955	C	吉田 格	千葉県城の台貝塚	石器時代 1号	

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
017	1957	B	武藤 彬	佐倉城の戦略的価値	佐倉地方文化 9号	佐倉地方郷土文化研究会
018	1958	K	千葉耀胤	房総史料其の二十四 館山城址一〜六	房総及び房総人 275〜280	房総社
019	1958	K	藤田正興	風雲稲村城	旭光 33の3	千葉県旭光会
020	1959	L	内田栄一	千葉県の城	城郭 1-4	日本城郭協会
021	1960	G	古市貞男	本納城落城	房総展望 14-6	房総展望社
022	1960	L	内田栄一	千葉県の城	城郭 2-2〜4	日本城郭協会
023	1961	A	酒巻省三	箕輪城址について	松戸史談会紀要 1	松戸史談会
024	1961	F	篠丸頼彦	東上総の豪族屋敷村	房総研究 第1集	千葉県地理学会誌
025	1962	D	小笠原長和	建武期の千葉氏と下総千田荘	史観 65・66・67合併号	早稲田大学史友会
026	1962	K	山岡俊明	房総里見氏研究の問題点	房総史学 4号	千葉県高等学校教育会
027	1964	J	桜井成廣	海賊城としての百首	城郭 6-2	日本城郭協会
028	1965	D	西村正衛	千葉県香取郡神崎町西ノ城貝塚	古代 45・46合併号	早稲田大学考古学会
029	1965	H	渡辺包夫	大多喜城天主絵図と本丸絵図	総南文化 4号	総南文化研究会
030	1966	B	平田鹿郎	佐倉城の今昔	房総及び房総人 370〜374	房総社
031	1966	B	篠丸頼彦	下総白井城と節戸城	城郭 8-6	日本城郭協会
032	1966	H	落合忠一	池和田城と多賀蔵人	南総郷土文化研究会誌	南総郷土文化研究会
033	1967	B	篠丸頼彦	佐倉城の歴史	房総及び房総人 381〜388	房総社
034	1967	H	平野元三郎	天正以前の大多喜城下町	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
035	1967	H	渡辺包夫	大多喜城の変遷	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
036	1967	H	篠丸頼彦	大多喜城下町の構造と機能	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
037	1967	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 1号	千葉県文化財保護協会
038	1967	I	落合忠一	市原市の城郭跡について	市原地方史研究 3	市原地方史研究会
039	1967	K	田村逸郎	要害城縁起	鴨川 6・7号	鴨川図書館
040	1967	K	野村みのる	鴨川史跡・東条族と金山城跡	鴨川 8号	鴨川図書館
041	1968	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 2号	千葉県文化財保護協会
042	1969	C	鈴木三郎	大椎城と千葉城	特報 223	世味調査研究所
043	1969	C	鈴木三郎	土気城興亡の跡	特報 222	世味調査研究所
044	1969	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 3号	千葉県文化財保護協会
045	1969	I	田丸三二	椎津城跡雑感	市原地方史研究 6号	市原地方史研究会
046	1969	L	清川一史	城郭・別冊日本中世城郭資料第1集	城郭	日本城郭学生研究会
047	1970	A	村崎 勇	鎌ヶ谷町の佐津間城跡について	房総文化 11号	房総文化研究会
048	1970	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 4号	千葉県文化財保護協会
049	1970	H	小高 清	行川妙泉寺の由緒と狩野氏	総南文化 12号	総南文化研究会
050	1970	I	落合忠一	佐瀬城跡を訪ねて	市原地方史研究 7号	市原地方史研究会
051	1970	I	落合忠一	佐瀬城跡を訪ねて	南総郷土文化研究会会誌 7号	南総郷土文化研究会
052	1970	J	千葉新聞社	郷土史周辺・久留里城址とその周辺	週刊千葉 279〜284	千葉新聞社
053	1970	L	清川一史・野口 実	城郭・別冊日本中世城郭資料第3集	城郭	日本城郭学生研究会
054	1971	C	尾崎喜左雄	千葉県習志野市鷺沼古墳附城跡	日本考古学年報(昭和41年) 19	日本考古学協会
055	1971	H	小高 清	狩野氏の光福寺建設と作田明王院の伝承	総南文化 13号	総南文化研究会
056	1971	J	千葉新聞社	郷土史周辺 千本城とその周辺	週刊千葉 285・286	千葉新聞社
057	1971	J	清川一史	上総真里谷城	城郭史研究 11号	城郭史研究会
058	1971	L	清川一史	房総の中世城郭	千葉県の歴史 2号	千葉県
059	1971	L	中村恵次	千葉県中世遺跡調査	千葉県の歴史 2号	千葉県
060	1971	L	千葉県教育委員会	中近世遺跡調査	千葉県の文化 4号	千葉県教育庁文化課
061	1972	B	野口 実	本佐倉城	城郭史研究 12・13合併号	城郭史研究会
062	1972	C	後藤和民	大椎城址の調査(上)	千葉の歴史 4号	千葉県
063	1972	H	森 輝・川村 優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文華 6号	千葉県文化財保護協会
064	1972	H	小高 清	伊北城と狩野氏	総南文化 14号	総南文化研究会
065	1972	H	渡辺包夫	大多喜城天守絵図と本丸絵図	総南文化 14号	総南文化研究会
066	1972	J	篠丸頼彦	上総の久留里城址	千葉文華6号	千葉県文化財保護協会
067	1972	J	鈴木 浩	まぼろしの亀山城 I	西上総文化会報 33号	西上総文化会
068	1972	K	君塚文雄	中近世遺跡調査の中から神余城址・金山城址	館山市文化財保護協会会報 5	館山市文化財保護協会
069	1972	K	生稲謙爾	岡本城址	富浦の文化 1号	富浦町教育委員会
070	1973〜75	A	佐藤立身	城址めぐり	郷土と自然 17〜30	柏市の文化財と自然を守る会
071	1973	C	後藤和民	大椎城址の調査(下)	千葉県の歴史 5号	千葉県
072	1973	H	渡辺包夫	城下町大多喜の今昔	千葉文華 7号	千葉県文化財保護協会
073	1973	H	小高 清	伊北城と狩野氏(二)	総南文化 15号	総南文化研究会
074	1973	K	落合忠一	加茂の中古城址について	南総郷土文化研究会誌 8号	南総郷土文化研究会
075	1973	L	伊藤一男	千葉県下の中世の城郭遺跡について	地方史研究 126号別冊	地方史研究協議会
076	1974	B	相川日出雄	四街道の中世遺跡	四街道の文化財 1号	四街道町教育委員会
077	1974	C	村田一男・安達 新	八千代市中世城跡1974年度調査	史学報 5号	県立八千代高校史学会
078	1974	H	加藤晋平・橋口定志	千葉県勝浦市における発掘調査(1)	考古学ジャーナル No98	ニューサイエンス社
079	1974	H	小高 清	伊北の狩野氏(その1)	千葉文華 8号	千葉県文化財保護協会
080	1974	J	鈴木 浩	まぼろしの亀山城II	西上総文化会報 35号	西上総文化会
081	1974	K	高橋 実	金山城について	嶺岡 1号	鴨川市郷土史研究会
082	1974	L	伊藤一男	房総における中世の城郭遺跡	房総の郷土史 1号	千葉県郷土史研究連絡協議会
083	1974	L	奥田直栄	これからの城郭研究	歴史読本 19巻10	新人物往来社
084	1975	J	朝生得一	亀山城の秘話	上総文化 2号	上総郷土文化研究会
085	1975	J	府間 清	房総城址探訪 2・10	房総及び房総人 476・484号	房総社
086	1975	J	田村 実	和田氏終えんの地・上総荏柄城	千葉文華 9号	千葉県文化財保護協会
087	1975	K	府間 清	房総史料 4・5	房総及び房総人 478・479号	房総社
088	1976	A	古宮隆信	根戸城遺跡	房総史学 17号	千葉県高校教育研究会歴史部会
089	1976	A	佐藤立身	中馬場の地名の由来と根戸台地の中世城郭	東葛地区研究 2.3.4.5.6.	
090	1976	C	八千代高校史学会	八千代市・中世の城郭「吉橋城」	史学報 7号	県立八千代高校史学会

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
091	1976	C	宍倉昭一郎	千葉市猪鼻城址と周辺の遺跡	房総史学 17号	千葉県高校教育研究会歴史部会
092	1976	D	小松 繁	平良文館址考	房総の郷土史 4号	千葉県郷土史研究連絡協議会
093	1976	E	伊藤一男	匝瑳内山城跡の発掘調査(概報)	房総の郷土史 4号	千葉県郷土史研究連絡協議会
094	1976	E	島田 孝	見広夜話	海上町史研究 3号	海上町史編纂委員会
095	1976	J	府間 清	房総城址探訪 11・12・13・15・19	房総及び房総人 485~489・493号	房総社
096	1976	L	鈴木 浩	まぼろし城を尋ねて	上総文化 3号	上総郷土文化研修会
097	1977	D	小林東石	東庄平山記	東庄町史研究 2号	東庄町史編纂委員会
098	1977	K	生稲謙爾	宮本城と里見家の内紛	富浦の文化 3号	富浦町教育委員会
099	1977	K	君塚文雄	城郭の変遷と房州の古城	館山市文化財保護協会会報 10	館山市文化財保護協会
100	1977	M	中田 英	地下式壙研究の現状について	神奈川考古 2号	神奈川考古同人会
101	1978	C	高山 実	幻の猪鼻館	房総の郷土史 特集号	千葉県郷土史研究連絡協議会
102	1978	F	清川一史	山武郡の中世城郭	歴史手帖 52	名著出版
103	1978	F	伊藤一男	中世後期土豪層に関する研究序説	房総の郷土史 12号	郷土史研究連絡協議会
104	1978	H	小高 清	伊南城の落城について	房総の郷土史特集号	千葉県郷土史研究連絡協議会
105	1978	L	白井常之	古城址踏査雑記	千葉県の歴史 16号	千葉県
106	1978	L	伊禮正雄	両総における中世城址について	千葉県の歴史 15号	千葉県
107	1979	A	花島興一	東葛飾地方城館址の基礎的研究	船橋考古 8・9合併号	
108	1979	A	綿貫啓一	中世船橋略史	船橋市史談会報 2号	船橋市史談会
109	1979	E	吉岡清治	田方山砦と一口の短刀	海上町史研究 11号	海上町史編纂委員会
110	1979	H	清水 豊	上総権介平広常の居城について一布施城・柳沢城一	東総文化 3号	東総文化連絡協議会
111	1979	H	川城昭三	万木城とその城主	東総文化 3号	東総文化連絡協議会
112	1979	I	半田堅三	本邦地下式壙の類型学的研究	伊知波良 2	伊知波良刊行会
113	1979	K	川戸 彰	歴史をたずねて 朝夷郡と丸氏	千葉県の歴史 17号	千葉県
114	1979	L	服部英雄	千葉氏研究の成果と今後の課題	房総の郷土史 7号	千葉県郷土史研究連絡協議会
115	1979	L	服部英雄	書評「論集千葉氏研究の諸問題」	史学雑誌 88-1	史学会
116	1980	A	松下邦夫	最近の私の原稿などから	松戸史談 20号	松戸史談会
117	1980	C	宍倉健吉	史跡をたずねて・生実周辺	千葉県の歴史 19号	千葉県
118	1980	C	八千代高校史学会	正覚院館址と仏像	史学報 11号	県立八千代高校史学会
119	1980	D	伊藤一男	平忠常の反乱と大友伝説	東庄町史研究 4号	東庄町史編纂委員会
120	1980	H	橋口定志	上総伊北・大野城について	千葉県の歴史 19号	千葉県
121	1980	I	府間 清	御園生城址と池和田城址	さざなみ 20号	地域研究会
122	1980	J	牛房茂行	木更津市真里谷城址の調査	考古学ジャーナル No179	ニューサイエンス社
123	1980	L	菊池真太郎	発掘された中世城郭について	千葉県文化財センター研究紀要 5	千葉県文化財センター
124	1980	L	千葉県文化財センター	文献目録	千葉県文化財センター研究紀要 5	千葉県文化財センター
125	1981	A	森田洋平 他	共同研究 高城氏の研究 I	我孫子市史研究 5号	我孫子市教育委員会
126	1982	A	森田洋平	小金「大谷口城」考-共同研究高城氏の研究 II	我孫子市史研究 6号	我孫子市教育委員会
127	1982	B	専修大学城郭研究同好会	本佐倉城・白井城・師戸城	樹形山 5号	専修大学城郭研究同好会
128	1982	D	府間 清	謎深い御所台城址	さざなみ 26号	地域研究会
129	1982	F	古川 力	酒井東金城主の衆の編成について	房総路 10号	押尾孔版社
130	1982~	K	館山市立博物館	東京湾岸戦国史跡	館山市立博物館報 1~	館山市立博物館
131	1983	A	辺見 端	法花坊遺跡の伝説考	國學院雑 84-9	國學院大學
132	1983	A	森田洋平	匝瑳氏の動向-共同研究高城氏の研究 III-	我孫子市史研究 7号	我孫子市教育委員会
133	1983	H	中村てい	潤井戸の陣屋	上総市原 5号	市原市文化財研究所
134	1983	J	鈴木 浩	久留里城とその周辺	千葉県の歴史 26号	千葉県
135	1983	K	川名 登	館山城についての一考察	商経論集 16号	千葉敬愛短期大学
136	1984	A	船橋郷土資料館	船橋の中世城址	資料館だより 31号	船橋郷土資料館
137	1984	A	高橋三千男	中世の船橋-城址と文献-「中世城址について」	第23回郷土史講座講義目録	船橋郷土資料館
138	1984	B	森崎鉄男	鹿渡のろし台址群(仮称)によせて	四街道の文化財 10号	四街道市文化財審議会
139	1984	C	平岡和夫・大和久震平	小原子砦について	芝山町史研究 2号	芝山町
140	1985	B	印旛郡市文化財センター	「北大堀遺跡」	印旛郡市文化財センター年報 1	印旛郡市文化財センター
141	1985	B	印旛郡市文化財センター	「猿楽場遺跡」	印旛郡市文化財センター年報 1	印旛郡市文化財センター
142	1985	B	岡田茂弘	白井城の謎	うすい 創刊号	白井文化懇話会
143	1985	G	佐久間 甫	上総氏の興亡と大柳館址	千葉文華 20号	千葉県文化財保護協会
144	1985	I	印旛市原市文化財センター	「石川城跡」	市原市文化財センター年報 昭和157・58年度	印旛市原市文化財センター
145	1985	I	印旛市原市文化財センター	「村上城跡」	市原市文化財センター年報 昭和159年度	印旛市原市文化財センター
146	1985	J	平野雅之	「真里谷城跡」	君津郡市文化財センター年報 No3	君津郡市文化財センター
147	1985	J	光江 章	「千本城・大戸城跡」	君津郡市文化財センター年報 No3	君津郡市文化財センター
148	1985	M	江崎 武	中世地下式壙の研究	古代探叢 II	早稲田大学出版部
149	1986	A	松下邦夫	中世末の流山を考ふる(1)-中世城郭から流山市の中世後期史を類推する-	流山市史研究 4号	流山市
150	1986	B	遠山成一・外山信司	岩富原氏の研究	房総史学 26号	千葉県高校教育研究会歴史部会
151	1986	B	印旛郡市文化財センター	「堀込城跡」	印旛郡市文化財センター年報 2	印旛郡市文化財センター

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
152	1986	B	柴田龍司	戦国時代末期の城郭から見た権力構造	千葉県文化財センター研究紀要 10	財千葉県文化財センター
153	1986	F	財山武郡南部地区文化財センター	「小野城跡」	山武郡南部地区文化財センター年報 No1	財山武郡南部地区文化財センター
154	1986	G	財茂原市文化財センター	ふるさとの遺跡 (中世) - 神田山第3遺跡 -	郷土の文化財 4	財茂原市文化財センター
155	1986	H	小高 清	伊北の狩野氏	房総の郷土史 14号	千葉県郷土史研究連絡協議会
156	1986	I	財市原市文化財センター	「大羽根城郭跡」	市原市文化財センター年報昭和60年度	財市原市文化財センター
157	1986	M	小林 克	地下室考	物質文化 (47)	物質文化研究会
158	1986	M	池上 悟	地下式墳墓見	立正史学 59号	立正大学史学会
159	1987	A	松下邦夫	中世末の流山を考える (2)	流山市史研究 第5号	流山市
160	1987	B	柴田龍司	中世城郭の外郭部について	中世城郭研究 創刊号	中世城郭研究会
161	1987	B	財印旛郡市文化財センター	四街道市和良比遺跡 (堀込遺跡)	印旛郡市文化財センター年報3	財印旛郡市文化財センター
162	1987	B	財印旛郡市文化財センター	成田市押畑子の神遺跡	印旛郡市文化財センター年報3	財印旛郡市文化財センター
163	1987	G	財茂原市文化財センター	神田山第III遺跡・本納城外郭跡	茂原市文化財センター年報No1	財茂原市文化財センター
164	1988	B	外山信司	戦国期佐倉の人々	千葉県の歴史 36号	千葉県
165	1988	B	黒田基樹	後北条氏における支城領形成過程 - 下総佐倉領の場合 -	佐倉市史研究 8号	佐倉市史編さん委員会
166	1988	B	印旛郡市文化財センター	成田市押畑子の神城跡	印旛郡市文化財センター年報4	財印旛郡市文化財センター
167	1988	B	浜名敏夫	本土寺過去帳と臼井	うすい 3号	臼井文化懇話会
168	1988	F	遠山成一	東金酒井氏の居城 - 東金城について -	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
169	1988	I	財市原市文化財センター	白船城跡	市原市文化財センター年報昭和61年度	財市原市文化財センター
170	1988	I	財君津郡市文化財センター	金谷城跡	君津郡市文化財センター年報6	財君津郡市文化財センター
171	1988	K	松岡 進	戦国期城館遺構の史料的利用をめぐる	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
172	1988	M	井上哲朗	村の城について - 上野国三波川溪谷の城館址調査から -	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
173	1989	F	財山武郡南部地区文化財センター	小野城跡	山武郡南部地区文化財センター年報 4	財山武郡南部地区文化財センター
174	1989	G	財茂原市文化財センター	岩川遺跡	茂原市文化財センター年報 3	財茂原市文化財センター
175	1989	I	財市原市文化財センター	白船城跡 (2次)	市原市文化財センター年報昭和62年度	財市原市文化財センター
176	1989	J	財君津郡市文化財センター	蔵玉砦跡	君津郡市文化財センター年報7	財君津郡市文化財センター
177	1989	J	鳴田浩司	飯野陣屋跡出土遺物の新知見	研究連絡誌 30号	財千葉県文化財センター
178	1989	L	千葉城郭研究会	千葉県内城郭研究史・文献目録他	千葉城郭研究 1号	千葉城郭研究会
179	1989	L	柴田龍司	房総の『戦国期城下集落』小考	中世城郭研究 3号	中世城郭研究会
180	1990	A	中山吉秀	手賀沼周辺の考古学的調査	沼南町史研究 1号	沼南町史編さん室
181	1990	A	植竹好明	中世史研究序説 - 沼南町地域に関して -	沼南町史研究 1号	沼南町史編さん室
182	1990	A	千野原靖方	下総市川城の所在について	千葉文華 26	千葉県文化財保護協会
183	1990	A	平岡 豊	松戸の中世城館址 (-)	戸定論叢 1号	松戸市戸定歴史館
184	1990	B	財印旛郡市文化財センター	成田市長田要害遺跡	印旛郡市文化財センター年報5	財印旛郡市文化財センター
185	1990	B	財印旛郡市文化財センター	酒々井町本佐倉長勝寺館跡	印旛郡市文化財センター年報5	財印旛郡市文化財センター
186	1990	B	松村 侑	小林城跡とその地名	印西町の歴史 6号	印西町町史編さん室
187	1990	B	外山信司	戦国期佐倉についての覚え書 - 本佐倉城とその城下をめぐる -	佐倉市史研究 9号	佐倉市史編さん室
188	1990	C		生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 2 昭和62,63年度	財千葉市文化財調査協会
189	1990	K	高梨俊夫	下ノ坊館跡	季刊自然と文化 30号	観光資源保護財団
190	1990	L	八巻孝夫	後北条氏領国の馬出	中世城郭研究 4号	中世城郭研究会
191	1991	A	松下邦夫	名都借の集落と寺院	流山市史研究 8号	流山市史編さん係
192	1991	A	長塚 孝	築田氏家臣鮎川氏の動向	郷土研究さしま 4号	猿島町史編さん委員会
193	1991	A	松下邦夫	名都借の集落と寺院 - 中世末の流山を考える (五) -	流山市史研究 8号	流山市教育委員会
194	1991	B	財印旛郡市文化財センター	酒々井町本佐倉南大堀遺跡	印旛郡市文化財センター年報6	財印旛郡市文化財センター
195	1991	B	木内達彦	長勝寺脇館跡	千葉史学 18号	千葉歴史学会
196	1991	B	財印旛郡市文化財センター	東和田城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
197	1991	B	財印旛郡市文化財センター	岩戸城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
198	1991	B	財印旛郡市文化財センター	本佐倉城跡	印旛郡市文化財センター年報7	財印旛郡市文化財センター
199	1991	B	柴田龍司	下総本佐倉城跡について - 「惣構」の検討 -	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 4集	帝京大学山梨文化財研究所
200	1991	C	財千葉県文化財センター	ムコアラク遺跡	千葉県文化財センター年報16	財千葉県文化財センター
201	1991	D	三島正之	小野城をめぐる	中世城郭研究 5号	中世城郭研究会
202	1991	G	財長生郡市文化財センター	戦国時代の大名と城郭跡 - 長南城の調査から -	郷土の文化財 12号	財長生郡市文化財センター
203	1991	G	津田芳男	岩川遺跡 (館跡)	千葉史学 18号	千葉歴史学会
204	1991	H	井上哲朗	大野城跡の発掘調査	千葉史学 18号	千葉歴史学会

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
205	1991	I, J	佐藤博信	房総における天文の内乱の歴史的位置—とくに上総真里谷武田氏の動向を中心として—	おだわら—歴史と文化 5号	小田原市
206	1991	J	諸愚知義	金谷城跡の調査	千葉史学 18号	千葉歴史学会
207	1991	J	勸君津都市文化財センター	蔵玉砦址	君津都市文化財センター年報 8	勸君津都市文化財センター
208	1991	K	高梨俊夫	下ノ坊B地点	千葉史学 18号	千葉歴史学会
209	1991	L	小野正敏	房総の城館出土陶磁器の問題	千葉史学 18号	千葉歴史学会
210	1991	L	柴田龍司	中世城館跡と考古学—課題と展望—	千葉史学 18号	千葉歴史学会
211	1991	L	笹生 衛	房総の中世土器様相について	史館 23号	史館同人
212	1992	A	市村高男	下総崎房秋葉孫兵衛旧蔵模写文書集の紹介	中央学院大学教養論叢 4巻2号	中央学院大学
213	1992	A	松下邦夫	天正18年の流山地方	流山市史研究 9号	流山市教育委員会
214	1992	A	中山吉秀	鎌ヶ谷市および周辺地域の中世城郭について	鎌ヶ谷市史研究 5号	鎌ヶ谷市教育委員会
215	1992	A	平岡 豊	松戸の中世城館址(二)	戸定論叢 2号	松戸市戸定歴史館
216	1992	A	中山文人	永祿期の小金城	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
217	1992	B	野口 実	鎌倉幕府の成立と下総白井氏一族	鎌倉 69	鎌倉文化研究会
218	1992	B	高橋健一	戦国時代佐倉の鹿島宿—伝承の検討を中心として—	房総の郷土史 20号	千葉県郷土史研究連絡協議会
219	1992	B	末武直則	成田市東和田城跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
220	1992	B	青山 博	佐倉市石川阿ら地遺跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
221	1992	B	木内達彦	酒々井町本佐倉城跡	印旛都市文化財センター年報 8	勸印旛都市文化財センター
222	1992	B	木内達彦	内方遺跡出土の内耳鍋について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
223	1992	C	勸千葉市文化財調査協会	「生実城跡」	平成3年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
224	1992	C	吉田伸之	「生実陣屋と北生実村」	平成3年度特別講演会資料	勸千葉市文化財調査協会
225	1992	D	勸香取都市文化財センター	「久井崎城跡」	平成3年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
226	1992	D	三島正之	下総崎崎城跡	中世城郭研究 6号	中世城郭研究会
227	1992	D	外山信司	「原文書」に見る森山城—戦国末期における支城の考察—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
228	1992	D	椎名幸一	次浦城について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
229	1992	D	石井純一	仮称油田城・油田砦について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
230	1992	D, I	小高春雄	城郭史におけるひとつの画期—資料にみる地域の例から—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
231	1992	G	遠山成一	書評・小高春雄「長生の城」	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
232	1992	H	築比治正治	夷隅川流域の中近世城館の分布及び概要について	研究員紀要	千葉県立総南博物館
233	1992	H	吉野利春	大多喜根古屋城跡とその周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
234	1992	H	鈴木正一	近世大多喜城跡について	研究員紀要	千葉県立総南博物館
235	1992	H	吉野利春	山中城跡(堀之内館跡)とその周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
236	1992	K	滝川恒昭	房総里見氏の歴史過程における「天文の内訌」の位置付け—関係資料の紹介をかねて—	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
237	1992	L	橋口定志	1991年の考古学動向(中近世(東日本))	考古学ジャーナル No.347	ニューサイエンス社
238	1992	L	柴田龍司	堀跡や曲輪から出土する石塔	中世城郭研究 6号	中世城郭研究会
239	1992	L	柴田龍司	「曲輪」について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
240	1992	L	井上哲朗	千葉県における地域別城郭研究史II	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
241	1992	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文獻目録補遺	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
242	1992	L	佐藤博信	小弓公方足利氏の成立と展開	歴史学研究 No.635	歴史学研究会
243	1993	B	柴田龍司	本佐倉城「惣構」の再検討—長勝寺館跡の発掘調査の成果を通して—	中世城郭研究 7号	中世城郭研究会
244	1993	B	林田利之	駒井野荒追遺跡検出の中世の「屋敷跡」について	成田市史研究 17号	成田市教育委員会
245	1993	B	齋藤 毅 他	小菅天神台II遺跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
246	1993	B	川津和久 他	本佐倉城跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
247	1993	B	大澤 孝 他	本佐倉大堀遺跡	印旛都市文化財センター年報 9	勸印旛都市文化財センター
248	1993	C		生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 5 平成3年度	勸千葉市文化財調査協会
249	1993	D	外山信司	「大慈恩寺文書」の国分一族と大戸庄堀籠村	中世房総 7号	房総中世史研究所・斎書房
250	1993	D	吉田博之	香取郡の城郭—大須賀川流域を中心として—	平成4年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
251	1993	E	滝川恒昭	中島城と宮内氏	千葉県史料研究財団だより創刊号	勸千葉県史料研究財団
252	1993	E	勸山武都市文化財センター	田向城跡	山武都市文化財センター年報 8	勸山武都市文化財センター
253	1993	G	津田芳男	長尾砦跡	長生都市文化財センター年報 7	勸長生都市文化財センター
254	1993	I	鈴木英啓	私の考古学日記(能満府中城と市原の城郭について)	市原市文化財センター研究紀要 II	勸市原市文化財センター
255	1993	I	滝川恒昭	中世の東京湾と養老川	千葉県史料研究財団だより第3号	勸千葉県史料研究財団
256	1993	I	半田堅三	山木白船城跡	市原市文化財センター年報 平成2年度	勸市原市文化財センター

②雑誌類

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
257	1993	I	半田堅三	地下式墳再考	市原市文化財センター研究紀要II	市原市文化財センター
258	1993	J	柴田龍司	笹子城跡の概要	研究連絡誌 37号	市原市文化財センター
259	1993	J	柴田龍司	小櫃川流域における中世遺跡の変遷(中世後期の様相)	研究連絡誌 37号	市原市文化財センター
260	1994	A	長塚 孝	旧利根川下流域の城と町ー古河・栗橋・関宿を中心にー	野田市史研究 5号	野田市
261	1994	A	田嶋昌治	松戸城について	千葉史学 25号	千葉歴史学会
262	1994	B	遠山成一	戦国期成田地域に関するノート	成田市史研究 19号	成田市教育委員会
263	1994	B	遠山成一	戦国期成田地域に関するノートー幡谷氏と馬場氏の考察を中心にー	成田市史研究 18号	成田市教育委員会
264	1994	B	外山信司	「雲玉和歌集」と戦国期佐倉の文芸活動	戦国史研究 27号	戦国史研究会
265	1994	B	外山信司	白井庄根古屋城と塩古栗飯原氏について	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
266	1994	C	築瀬裕一	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 6 平成4年度	市原市文化財センター
267	1994	C	石井 進	たまたみす風景ー中世荘園行ー	みすず 36巻3号	みすず書房
268	1994	D,F	遠山成一	両総国境に分布する城館跡についてー栗山川・高谷川水系を中心にー	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
269	1994	F	遠山成一	戦国後期下総における陸上交通について	千葉史学 24号	千葉歴史学会
270	1994	H	市村高男	豊臣政権と房総ー里見分国上総没収をめぐるー	千葉県史研究 2号	市原市文化財センター
271	1994	H	津田芳夫・矢野淳一	大多喜城本丸出土遺物について	千葉県立総南博物館年報 1	千葉県立総南博物館
272	1994	I	木對和紀・桜井敦史	分目要害遺跡	市原市文化財センター遺跡発表会発表要旨	市原市文化財センター
273	1994	I	浜名敏夫	小弓公方の家臣上総権津氏	市原地方史研究 18号	市原市教育委員会
274	1994	I	浜名敏夫	上総権津氏の居城について	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
275	1994	J		飯野陣屋跡	平成5年度 千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報	千葉県教育庁生涯学習部文化課
276	1994	J	佐藤博信	房総の中世後期における寺院と権力ー特に日我「妙本寺年中行事」の検討を通じてー	日本史研究 378号	日本史研究会
277	1994	K	佐藤博信	二階堂氏と安房国北部ー特に「二階堂文書」を通じてー	鎌倉 74号	鎌倉文化研究会
278	1994	K	滝川恒昭	房総里見氏と江戸湾の水上交通	千葉史学 24号	千葉歴史学会
279	1994	L	滝川恒昭	戦国期江戸湾岸における「海城」の存在形態	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
280	1994	L	柴田龍司	村落型城郭から都市型城郭へ	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
281	1994	L	松原宏昌	房総における複合寄生型代官所建築の概念	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
282	1994	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史III	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
283	1994	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文献目録(補遺2)	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
284	1994	M	原田昭一	大分県における中世後半期の墓制変革ー地下式坑の成立と展開を通してー	同志社大学考古学シリーズVI	同志社大学考古学シリーズ刊行会
285	1995	A	田嶋昌治	松戸市殿平賀地域の中世城郭について	松戸史談 35号	松戸史談会
286	1995	B	井上哲朗	中世城郭の築城から廃城ー印西町小林城跡の発掘調査からー	千葉県文化財センター研究紀要 16号	市原市文化財センター
287	1995	B	渋谷芳則	石川館址	印旛都市文化財センターー千葉県内の発掘成果を通してー	市原市文化財センター
288	1995	B	高橋三千男	中世城址と地名	佐倉市史研究 第10号	佐倉市史編さん委員会
289	1995	C	築瀬裕一	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 7 平成5年度	市原市文化財センター
290	1995	C	築瀬裕一	南屋敷跡	平成6年度千葉市遺跡発表会要旨	市原市文化財センター
291	1995	C	白根義久	生実城跡	平成6年度千葉市遺跡発表会要旨	市原市文化財センター
292	1995	C	柴田龍司	二つのおゆみ城ー小弓城と生実城ー	千葉いまむかし No.8	千葉市教育委員会
293	1995	C	武藤健一	正覚院館跡・持田遺跡	平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報	八千代市教育委員会
294	1995	D	石井 進	たまたみす風景ー中世荘園行7	みすず 411号	みすず書房
295	1995	G	津田芳男	要害遺跡・要害城跡	長生都市文化財センター年報 No.9	長生都市文化財センター
296	1995	G	津田芳男	加納藩城跡	長生都市文化財センター年報 No.9	長生都市文化財センター
297	1995	H	滝川恒昭	勝浦正木氏の基礎的考察ー「正木武勝家賦」所収文書の紹介と検討を通してー	勝浦市史研究 1号	勝浦市教育委員会
298	1995	H	津田芳夫・矢野淳一	大多喜城本丸出土遺物について(2)	千葉県立総南博物館年報 2	千葉県立総南博物館
299	1995	I	桜井敦史	八幡・五所地域の中世石造物	市原市文化財センター研究紀要 III	市原市文化財センター
300	1995	L	柴田龍司	中世城館の構造とその変遷ー千葉県内の発掘成果を通してー	千葉県文化財センター研究紀要 16号	市原市文化財センター
301	1995	L	井上哲朗	都市・城館研究の最新情報(関東)	中世都市研究 2	中世都市研究会
302	1995	L	笹生 衛	東国における中世墓地の諸相ー房総の事例を中心にー	千葉県文化財センター 研究紀要16	市原市文化財センター
303	1995	M	中世研究プロジェクトチーム	神奈川県下における中世遺構の研究	神奈川の考古学 第5集	神奈川県立埋蔵文化財センター
304	1996	B	黒田基樹	戦国期下総国の政治構造に関する一考察ー白井原氏の基礎的検討ー	地方史研究 261号	地方史研究協議会
305	1996	B	日暮 学 他	根古屋城とその周辺ー予備踏査概報ー(遺跡調査概要報告)成田市駒井野西ノ下遺跡(成田国際物流複合基地)	八街市史研究 2号	八街市
306	1996	B	栗田則久		千葉県文化財センター年報 No.21	市原市文化財センター
307	1996	C	白根義久	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 8 平成6年度	市原市文化財センター

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
308	1996	C	築瀬裕一	千葉市高品城跡	平成7年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
309	1996	C	築瀬裕一	高品城跡	平成7年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
310	1996	C	外山信司	下総高品城と陸上交通	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
311	1996	D	石井 進	たまたみす風景-中世荘園行8	みすず 419号	みすず書房
312	1996	D	柴田龍司	香取の遺跡紹介① 森山城跡	かとり 1号	財団法人香取市文化財センター
313	1996	E	高森良昌	海上氏の墳墓と菩提寺考	千葉市立郷土博物館研究紀要 2号	千葉市立郷土博物館
314	1996	F	井上哲朗	松尾町中谷遺跡の中近世墓地と集落-中近世における谷津景観の復元-	研究連絡誌 45号	財団法人千葉県文化財センター
315	1996	H	滝川恒昭	正木時茂に関する一考察	勝浦市史研究 2号	勝浦市史編纂室
316	1996	I	佐藤博信	上総椎津城とその周縁-見学会から学ぶ	千葉史学 29号	千葉歴史学会
317	1996	J	中井正代	久留里城について	中世城郭研究 10号	中世城郭研究会
318	1996	J,K	滝川恒昭	「里見分限帳」研究の一試論	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
319	1996	K	岡田晃司	館山町成立の契機について	房総路 34号	押尾孔出版
320	1996	K	遠山成一	稲村城跡保存運動の経過	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
321	1996	K	滝川恒昭	房総里見氏の歴史における稲村城	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
322	1996	K	柴田龍司	稲村城跡の発掘成果	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
323	1996	K	井上哲朗	稲村城跡内の横穴墓及び「やぐら」	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
324	1996	L	池田光雄	堀内部障壁の一形態について-千葉県内の事例紹介-	中世城郭研究 10号	中世城郭研究会
325	1996	L	遠山成一	中世房総水運史に関する一考察-舟戸・船津地名をめぐって-	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
326	1996	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史IV	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
327	1996	L	千葉城郭研究会	千葉県における城郭文獻目録 補遺	千葉城郭研究 4号	千葉城郭研究会
328	1996	M	斉藤 弘	中世後期の墓地-下野を中心に-	栃木県考古学会誌 18集	栃木県考古学会
329	1996	M	斉藤 弘	地下式墳と葬送儀礼-栃木県下の事例を中心に-	研究紀要 4号	(財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
330	1997	A	新井浩文	中世関宿城下の宿とその機能-網代宿を中心として-	千葉県立関宿城博物館研究報告 創刊号	千葉県立関宿城博物館
331	1997	A	田島昌治	松戸市内城跡踏査ノート	松戸史談 37号	松戸史談会
332	1997	A	薄井俊明	中世東葛飾の歴史概要-武士の起こりと東国(二)-	流山市史研究 14号	流山市立博物館
333	1997	B	中井正代	上総・東和田城山砦について	中世城郭研究 11号	中世城郭研究会
334	1997	B	井上哲朗	村を守る地侍の城-中世の四街道1-	マイルストーン 3巻1号	オフィスCKC
335	1997	B	井上哲朗	発掘された戦国の城-中世の四街道2-	マイルストーン 3巻2号	オフィスCKC
336	1997	B	井上哲朗	江戸時代の村-近世の四街道-	マイルストーン 3巻3号	オフィスCKC
337	1997	B	井上哲朗	(発掘調査速報) 戦国時代の山城跡-四街道市北ノ作遺跡-	房総の文化財 vol.14	財団法人千葉県文化財センター
338	1997	B	鈴木定明・井上哲朗	四街道市の遺跡	ウォーク・イン古代 4	財団法人千葉県文化財センター
339	1997	C	小澤清男	生実城跡	千葉県文化財調査協会年報 9 平成7年度	財団法人千葉市文化財調査協会
340	1997	C	外山信司	高品城跡-街道を押える中世城郭	千葉県史料研究財団だより 9	財団法人千葉県史料研究財団
341	1997	C	倉田義広	猪鼻城跡	平成8年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
342	1997	C	小澤清男	生実城跡	平成8年度千葉市遺跡発表会要旨	財団法人千葉市文化財調査協会
343	1997	C	斉藤慎一	戦国期城下町成立の前提	歴史評論 572号	歴史科学協議会
344	1997	C	伊藤一男	中世千葉の都市計画-大治元年千葉の町づくりはじまる-	カルチャー千葉 37	財団法人千葉市文化振興財団
345	1997	D	柴田龍司	香取の遺跡紹介② 下小野城跡	かとり 第2号	財団法人香取市文化財センター
346	1997	D	柴田龍司	香取地区の中世城跡(その1)	香取市文化財センター事業報告 VI	財団法人香取市文化財センター
347	1997	F	加藤正信	(発掘調査速報) 中世の屋敷と墓地-東金市前畑遺跡	房総の文化財 vol.12	財団法人千葉県文化財センター
348	1997	H	滝川恒昭	中・近世移行期における上総勝浦湊の実像-市の考察を中心として-	勝浦市史研究 3号	勝浦市史編さん室
349	1997	I	高橋康男	椎津五雲台遺跡	第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨	財団法人市原市文化財センター
350	1997	I	櫻井敦史	分目要害遺跡	市原市文化財センター年報 平成5年度	財団法人市原市文化財センター
351	1997	J		眞武根陣屋跡	君津市文化財センター年報 No.14	財団法人君津市文化財センター
352	1997	J	當眞嗣史	君津地域における中・近世の調査	多知波奈考古 3号	橋考古学会
353	1997	K	滝川恒昭	戦国期の房総太平洋岸における湊・都市の研究-房総沖太平洋海運検討の前提として-	千葉史学 31号	千葉歴史学会
354	1997	K	佐藤博信	里見義通試論-前期里見氏研究深化のために-	千葉史学 30号	千葉歴史学会
355	1997	L	池田 誠	徳川家康築城遺構の一考察-上・下総に配置された家康臣僚たちの城郭から-	中世城郭研究 11号	中世城郭研究会
356	1997	L	野口 実	肥前千葉氏の遺産-佐賀県小城町の地域振興のために-	鹿児島経済大学地域総合研究 24-2	鹿児島経済大学
357	1998	A	新井浩文	中世関宿城の構造とその機能 -「正保城絵図」所収「下総国世喜宿城絵図」の検討を中心に-	千葉県立関宿城博物館研究報告 2号	千葉県立関宿城博物館
358	1998	B		佐倉城跡	千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 平成9年度	千葉県教育庁生涯学習部文化課
359	1998	B		佐倉市佐倉城跡	印旛郡市文化財センター年報 13	財団法人印旛郡市文化財センター

②雑誌類・③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	論文名	書名	発行者
360	1998	B	井上哲朗	(遺跡調査概要報告)四街道市古屋城跡・北ノ作遺跡(物井地区)	千葉県文化財センター年報 No.22	千葉県文化財センター
361	1998	B	井上哲朗	佐倉市高岡砦跡について	中世房総 10号	中世房総史研究所
362	1998	B	井上哲朗	四街道市吉岡地域の中世城館跡について	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
363	1998	B	井上哲朗	鹿島川流域における戦国前期城館の一形態-四街道市北ノ作遺跡の調査から-	研究連絡誌 53号	千葉県文化財センター
364	1998	C	倉田義広	生実城跡	千葉市文化財調査協会年報 10 平成8年度	千葉市文化財調査協会
365	1998	C	飛田正美	廿五里遺跡	平成9年度千葉市遺跡発表会要旨	千葉市文化財調査協会
366	1998	E	実川 理	光町神山谷遺跡	平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
367	1998	E	椎名幸一・遠山成一	匝瑳南条本郷の城館跡について	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
368	1998	H	遠山成一	落合川流域に並ぶ二つの大規模城郭をめぐって	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
369	1998	J	佐藤博信	安房妙本寺と房総里見氏-上総金谷城・妙本寺要害及び勝山城をめぐって-	千葉県史研究 6号	千葉県史料研究財団
370	1998	J	稲葉昭智・矢野淳一	幕末陣屋遺構の一例-木更津市請西真武根陣屋について-	君津都市文化財センター研究紀要VIII	君津都市文化財センター
371	1998	J	松本 勝	富津市富津陣屋跡	平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨	千葉県文化財法人連絡協議会
372	1998	L	千葉城郭研究会	千葉県における地域別城郭研究史V	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
373	1998	L	千葉城郭研究会	千葉県に関する城郭文献目録 補遺4	千葉城郭研究 5号	千葉城郭研究会
374	1999	J		真武根陣屋跡	君津都市文化財センター年報 No.16	君津都市文化財センター
375	1999	L	笹生 衛	東國中世村落の景観変化と画期-西上総、周東・周西郡内の事例を中心に-	千葉県史研究 7号	千葉県
376	1999	L.M	池田光雄	「障子堀」について	中世城郭研究 13号	中世城郭研究会
377	1999	L.M	井上哲朗	堀内障壁の分類と編年試案-千葉県内の事例を中心として-	中世城郭研究 13号	中世城郭研究会

第15表 文献目録③(発掘・測量調査報告書)

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
001	1952	A	古宮隆信	文京区柏学園附近戸張遺跡調査概報	柏町公民館
002	1960	K	山岡俊明・上田勇次郎	館山城の考察	
003	1964	A	下津谷達男・古宮隆信	柏市根戸中馬場住居址調査報告書	柏市教育委員会
004	1964	D	神尾正明 他	千葉県遺跡調査報告書(昭和38年度)城山貝塚	千葉県教育委員会
005	1970	A	大川 清・岩崎卓也 他	大谷口・松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告書	松戸市教育委員会
006	1971	B	四街道町教育委員会	四街道町中世砦跡調査報告書	四街道町教育委員会
007	1971	B	加藤晋平	国立歴史民俗博物館設置予定地内遺跡調査報告書	千葉県教育委員会
008	1971	C	篠丸頼彦	成東城跡調査報告書	千葉県教育委員会
009	1971	D	篠丸頼彦	千葉県東南部地区文化財総合調査報告書「上総の万喜城」	千葉県文化財千葉県文化財保護協会
010	1971	D	篠丸頼彦	松子城跡調査概報	松子城跡調査団
011	1972	A	下津谷達男・古宮隆信	中馬場遺跡・妻子原遺跡	日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団
012	1972	B	城郭委員会	本佐倉城址測量調査中間報告	城郭研究会
013	1973	A	下津谷達男	流山市大畔台・下花輪第二遺跡調査概報	
014	1973	I	伊禮正雄	椎津城の歴史-本丸跡と内濠の試掘について	市原市教育委員会
015	1973	J	大場啓雄・乙益重隆	上総菅生遺跡(昭和47年度第1期調査)	木更津市教育委員会
016	1974	A	篠丸頼彦・渋谷興平	中峠城跡調査報告書	中峠城跡調査団
017	1974	A	戸張遺跡調査団	戸張遺跡第三次発掘調査報告書	戸張遺跡第三次調査団
018	1974	B	学習院大学	池の尻遺跡発掘調査レポート	学習院大学輔仁会史学会
019	1974	B		千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III	千葉県文化財センター
020	1974	C		昭和49年度御茶屋御殿跡第2次調査中間報告書	御茶屋御殿跡調査団
021	1974	D	篠丸頼彦	神崎城遺跡調査報告書	千葉県教育委員会
022	1974	H	奥田直栄・吉井 宏	上総大多喜城本丸址発掘調査報告書	千葉県教育委員会
023	1974	M	長瀬 衛 他	青戸・葛西城址調査報告II	葛西城址調査会
024	1975	A	村崎 勇	鎌ヶ谷市佐津間城址初富向山馬込	鎌ヶ谷市史編纂委員会
025	1975	B	伊禮正雄 他	臼井南-千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書-	佐倉市教育委員会
026	1975	B	渋谷興平	千葉県印西町小林古墳群遺跡	小林古墳群発掘調査団
027	1975	B	田村信行	円能遺跡発掘調査概報	佐倉市教育委員会
028	1975	C	伊藤一男・吉村 宏	内山城跡調査報告書	内山城跡調査団
029	1975	M	長瀬 衛 他	青戸・葛西城址調査報告III	葛西城址調査会
030	1976	A	古宮隆信	中馬場遺跡第三次発掘調査報告書	柏市教育委員会
031	1976	B	森 尚登	国立歴史民俗博物館(仮称)設置予定地内遺構確認調査報告	千葉県文化財センター
032	1976	B	三浦和信	吉高家老地遺跡	吉高家老地遺跡調査会
033	1976	C	薬師寺崇 他	千葉市御殿町御茶屋御殿跡-第一次調査概要-	千葉市教育委員会
034	1976	C	村田一男 他	八千代市中世館城址調査報告	八千代市教育委員会
035	1976	D	小林 繁	平良文館址	小見川町教育委員会
036	1976	F	平岡和夫 他	高砂城址	松尾町教育委員会

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
037	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡調査概報一横芝町文化財総合調査報告第1集一	横芝町教育委員会
038	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡調査報告書一第一郭土塁遺構に関する発掘調査一	横芝町教育委員会
039	1976	F	伊藤一男	小提要害城跡	横芝町教育委員会
040	1976	H	大野城址調査団	大野城址の測量調査	立教大学考古学研究会
041	1976	I	篠丸頼彦	川原井中世城跡調査概報	袖ヶ浦町教育委員会
042	1977	A	関根孝夫・花島八十八	殿平賀遺跡「松戸市文化財調査小報」10	松戸市教育委員会
043	1977	A	古宮隆信	根戸城遺跡一法華坊遺跡調査報告書一	我孫子市教育委員会
044	1977	B	石田広美	国立歴史民俗博物館(仮称)建設予定地内発掘調査概報	勸千葉県文化財センター
045	1977	B	間野台・古屋敷遺跡調査団	間野台・古屋敷	佐倉市教育委員会
046	1977	C	森重彰文	武石遺跡・武石館調査報告	千葉市教育委員会
047	1977	C	岡川宏道 他	京葉II一千葉市東寺山戸張作遺跡一	勸千葉県文化財センター
048	1977	D	小松 繁	佐原市長部山遺跡	長部山遺跡調査団
049	1977	H	後藤和民・菊池義次 他	松部	千葉県文化財保護協会
050	1977	I	篠丸頼彦	千葉県木更津市請西台遺跡調査概報	請西台遺跡埋蔵文化財発掘調査団
051	1978	A	古宮隆信	根戸城遺跡法華坊遺跡北ノ内遺跡発掘調査報告書	我孫子市教育委員会
052	1978	B	佐藤克己	船尾城遺跡	印西町教育委員会
053	1978	D	伊藤一男・平岡和夫	助崎城址	助崎城址遺跡調査団
054	1978	H	伊禮正雄・橋口定志	大野城跡発掘調査概報	大野城跡緊急発掘調査団
055	1978	K	小室栄一・川名 登	館山城跡調査概報一第一次一	館山城跡調査会
056	1979	A	古宮隆信	戸張城山遺跡発掘調査報告書	東京都文京区教育委員会
057	1979	C	野村幸希・菊池真太郎	千葉市城の腰遺跡	勸千葉県文化財センター
058	1979	C	矢戸三男・谷 旬	千葉市西屋敷遺跡	勸千葉県文化財センター
059	1979	I	小高春雄	袖ヶ浦町川原井樋爪	樋爪遺跡発掘調査
060	1979	J	伊禮正雄・小高春雄	上総久留里城	君津市教育委員会
061	1979	J	伊禮正雄・牛房茂行	木更津市真里谷城址一遺跡確認調査概報一	木更津市教育委員会
062	1979	K	菊池真太郎・内野美三夫	館山城跡調査概報一第二次一	館山城跡調査会
063	1980	A	犬塚俊雄・戸松雅昭	中沢城発掘調査概報	鎌ヶ谷市教育委員会
064	1980	A	小林三郎・橋本喜正・小西ゆみ	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和54年度	市川市教育委員会
065	1980	A	寺村光晴	印内台	印内台遺跡調査団
066	1980	B	堀部昭夫・高田 博	佐倉城跡遺構確認調査概報	勸千葉県文化財センター
067	1980	B	高田 博	佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II	勸千葉県文化財センター
068	1980	C	村山好文・山本 勇	馬加城遺跡発掘調査書	馬加城遺跡調査会
069	1980	F	小高春雄	千葉市土気地区埋蔵文化財帖佐報告1一第一次予備調査概報一	千葉市土気地区遺跡調査会
070	1980	J	大場誓雄・乙益重隆	上総菅生遺跡	中央公論美術出版
071	1980	J	千葉県教育庁文化課	千葉県記念物実態調査報告書1一飯野陣屋濠跡一	千葉県教育庁文化課
072	1980	K	菊池真太郎 他	飯山城跡調査概報<第三次>	飯山城跡調査会
073	1981	B	堀部昭夫	国立歴史民俗博物館(仮称)建設予定地発掘調査報告書	勸千葉県文化財センター
074	1981	B,J	小室栄一 他	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第1集一佐貫城跡・本佐倉城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
075	1981	J	野中 徹 他	金谷城跡一二の郭発掘調査報告一	金谷城跡調査会
076	1982	A	小西ゆみ	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和56年度	市川市教育委員会
077	1982	A	店橋初恵・岡村文真	鹿島前遺跡第4次発掘調査概報	我孫子市教育委員会
078	1982	A	郷堀英司 他	常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書I一館林、水砂、花前II-1一	勸千葉県文化財センター
079	1982	B	田村言行・高橋健一	総州佐倉城一佐倉城本丸址発掘調査概報一	佐倉市教育委員会
080	1982	B	道沢 明	北総線「城址」	東京電力北総線遺跡調査会
081	1982	C	武部喜充	埴谷周路遺跡	山武町教育委員会
082	1982	D	神崎町教育委員会	神崎町西の城貝塚保存整備報告書	神崎町教育委員会
083	1982	D,G	中山吉秀・天野 努	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第2集一森山城跡・本納城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
084	1982	J	梶山林継	飯野陣屋稲荷口遺跡調査報告	稲荷口遺跡調査会
085	1983	A	石田 勝	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和57年度	市川市教育委員会
086	1983	A	小西ゆみ	市川市東部遺跡群発掘調査報告・昭和57年度	市川市教育委員会
087	1983	A	飯塚博和	埋蔵文化財調査概報1(昭和54・55年度)「金野井城址」	野田市郷土博物館
088	1983	B	村田一男	成田市中世城郭址調査報告書	成田市中世城郭址調査団
089	1983	B	寺島 博・平岡和夫	根本内北ノ台遺跡調査報告書	根本内北ノ台遺跡調査会
090	1983	B	谷 旬	成田新線建設事業内埋蔵文化財発掘調査報告書3「堀之内遺跡」	勸千葉県文化財センター
091	1983	C	白石 浩	千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書	勸千葉県文化財センター
092	1983	D,F	加藤正信・柳 晃	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第3集一大友城跡・坂田城跡発掘調査報告一	千葉県教育委員会
093	1983	F	大和久震平	埴谷周路館跡の研究	大和久震平
094	1983	F	大和久震平	埴谷周路遺跡	山武町教育委員会
095	1983	G	平岡和夫	鶴谷久保向遺跡	長柄町教育委員会
096	1983	H	中滝城址調査団	上総国・中滝城址I	立教大学考古学研究会

③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
097	1984	A	片岡由美	埋蔵文化財発掘調査報告・昭和58年度「大柏小校庭内遺跡」	市川市教育委員会
098	1984	B	伊藤一男	印西小林城―千葉県印西町小林城跡調査報告書―	印西町小林城跡調査会
099	1984	B	藤原 均	北押出し遺跡調査報告書	酒々井町北押出し遺跡調査会
100	1984	B	藤原 均	成田市郷部北遺跡群調査概報「加定地・殿台遺跡」	成田市郷部北遺跡調査会
101	1984	B	岡田茂弘	国立歴史民俗博物館研究員宿泊施設予定地発掘調査概報	国立歴史民俗博物館
102	1984	C	大野康男	千葉東南部ニュータウン15「有吉城跡」	財団法人千葉県文化財センター
103	1984	D	江尻和正	名古屋横峰遺跡	名古屋横峰遺跡調査会
104	1984	D	小宮 孟	東総用水「高部宮ノ前遺跡」	財団法人千葉県文化財センター
105	1984	D	江尻和正	千葉県下総町文化財調査報告Ⅰ	下総町教育委員会
106	1984	G	大和久震平	一宮城跡城之内遺跡発掘調査報告書	一宮町教育委員会
107	1984	G	藤原 均	城之内遺跡調査報告書	一宮町城之内遺跡調査会
108	1984	I	鈴木英啓	石川城郭跡	財団法人原市文化財センター
109	1984	J	伊禮正雄・牛房茂行 他	真里谷城跡	木更津市教育委員会
110	1984	J	小沢 洋	境遺跡	財団法人君津市文化財センター
111	1984	J	小沢 洋	千葉県富津市二間塚遺跡群確認調査報告書	富津市教育委員会
112	1984	K	木内達彦	館山城跡鹿島堀発掘調査報告書	館山城跡鹿島堀調査会
113	1984	K,B	天野 努・柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集―稲村城跡・臼井城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
114	1985	A	大賀 健	布施向山遺跡	山武考古学研究所
115	1985	B	岡田茂弘	臼居城Ⅰ郭跡発掘調査概報	臼井城跡研究会
116	1985	B	臼井城跡研究会	臼井城Ⅰ郭跡第2次発掘調査概要	臼井城跡研究会
117	1985	B	高橋博文	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ「妙福寺裏遺跡」	財団法人千葉県文化財センター
118	1985	B	篠原 正 他	北大堀・猿楽場遺跡発掘調査報告書	財団法人印旛郡市文化財センター
119	1985	B	小林清隆 他	主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ「成田市島内遺跡」	財団法人千葉県文化財センター
120	1985	D,H	石倉亮治・伊藤智樹	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第5集―大崎城跡・万喜城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
121	1985	F	谷 旬	本納城外郭跡	財団法人茂原市文化財センター
122	1985	F	藤下昌信・村山好文	長倉宮脇	横芝町教育委員会
123	1985	J	平野雅之	真里谷城跡	財団法人君津市文化財センター
124	1985	J	小沢 洋	飯野陣屋濠跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
125	1985	M	橋本久雄	鹿島城址Ⅳ	鹿島町教育委員会
126	1986	A	石田守一 他	我孫子市埋蔵文化財報告第8集「根戸城跡」	我孫子市教育委員会
127	1986	B	平岡和夫 他	宗吾西鷺山遺跡	宗吾西鷺山遺跡調査会
128	1986	B	大橋康二 他	下総国四街道地域の遺跡調査報告書「池之尻館」「戸崎館」	中野遺跡調査団
129	1986	B	岡田茂弘 他	佐倉城の武家屋敷は語る	国立歴史民俗博物館
130	1986	B	臼井城跡研究会	臼井城Ⅰ郭跡3次発掘調査説明資料	臼井城跡研究会
131	1986	C	森本和男	千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書「廿五里城跡」	財団法人千葉県文化財センター
132	1986	D	八角 静・平岡和夫	大原遺跡	多古町遺跡調査会
133	1986	F	石本俊則	千葉県東金市小野城址	財団法人山武郡南部地区文化財センター
134	1986	H	大多喜町根古屋城址調査会	千葉県夷隅郡大多喜町 根古屋城跡確認調査報告書	大多喜町根古屋城址調査会
135	1986	I	鈴木英啓	大羽根城郭跡―南部外郭の測量調査―	市原市教育委員会
136	1986	I	山口直樹	村上城跡	財団法人原市文化財センター
137	1986	K,I	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第6集―岡本城跡・佐是城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
138	1986	M	谷口 栄 他	五反田遺跡	円福寺西方遺跡調査会
139	1986	M	堀越 徹 他	外城遺跡発掘調査報告書	石岡市教育委員会
140	1987	A	岡田光弘	関宿城跡Ⅰ	千葉県教育委員会
141	1987	A	綿貫喜郎	堀之内	市川市教育委員会
142	1987	C	奥田正彦	八千代市井戸向遺跡	財団法人千葉県文化財センター
143	1987	D	小高春雄	東関東自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ「南敷城」	財団法人千葉県文化財センター
144	1987	D	平野 功	小見川町内遺跡群発掘調査報告書「小見川城址」	小見川町教育委員会
145	1987	D,F	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第7集―飯櫃城跡・鍋木城跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
146	1987	J	小沢 洋	千葉県富津市野乃間古墳	財団法人君津市文化財センター
147	1987	K	藤原 均	館山城跡第4次調査報告	第4次館山城跡調査会
148	1987	M	大和久震平	釜利谷やぐら遺跡発掘調査報告書	釜利谷やぐら遺跡調査団
149	1988	A	岡田光弘	関宿城跡Ⅱ	千葉県教育委員会
150	1988	A	宇佐美義春	三輪野山第三遺跡	流山市教育委員会
151	1988	B	小高春雄 他	佐倉市中近世城跡測量調査報告書	佐倉市教育委員会
152	1988	B	末武直則	押畑子の神城跡発掘調査報告書	財団法人印旛郡市文化財センター
153	1988	D	藤原 均 他(日本考古学研究所)	菊水城址主郭部調査報告書	下総町遺跡調査会
154	1988	D	柿沼修平・新井和之	千葉県大栄町長久保・内野遺跡	千葉県大栄町遺跡調査会
155	1988	D,J	鳴田浩司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集―山崎城跡・飯野陣屋跡発掘調査報告―	千葉県教育委員会
156	1988	F	萩原恭一	東金市久我台遺跡	財団法人千葉県文化財センター
157	1988	J	諸墨知義・甲斐博幸	金谷城跡	財団法人君津市文化財センター
158	1989	A	岡田光弘	関宿城跡	千葉県教育委員会

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
159	1989	B	内田理孝 他	昭和63年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書(臼井台長谷津遺跡)	佐倉市教育委員会
160	1989	D	青木幸一 他	馬洗城址発掘調査報告書	大栄町教育委員会
161	1989	E	新井和之	八石田遺跡発掘調査報告	光町八石田遺跡調査会
162	1989	F,C	西山太郎・井上哲朗	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集-東金城跡・城山城跡発掘調査報告-	千葉県教育委員会
163	1989	J	諸墨知義	蔵玉砦跡	銚子津郡市文化財センター
164	1989	J	笹生 衛	外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告	銚子津郡市文化財センター
165	1990	A	中原幹彦	庚申前遺跡(第3次)	柏市教育委員会
166	1990	A	道上 文	印内台遺跡-7・8次	船橋市遺跡調査会
167	1990	B	木内達彦	長勝寺脇館跡	銚子津郡市文化財センター
168	1990	C	千葉県教育委員会	埋蔵文化財調査報告書(城山城跡他)	千葉県教育委員会
169	1990	D	栗田則久 他	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告V(佐原地区2)「佐原市吉原三王遺跡」	銚子津郡市文化財センター
170	1990	G	三浦和信・津田芳男	岩川・今泉遺跡	銚子津郡市文化財センター
171	1990	I,E	笹生 衛	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集-椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告-	千葉県教育委員会
172	1990	J	諸墨知義	蔵玉砦跡	銚子津郡市文化財センター
173	1990	J	箕島正弘	袖ヶ浦町内遺跡群発掘調査報告書-久保田城跡・下向山遺跡-	袖ヶ浦町教育委員会
174	1990	J	小沢 洋	千葉県富津市三条塚古墳	銚子津郡市文化財センター
175	1990	J	桐村修司 他	千葉県富津市南口遺跡	銚子津郡市文化財センター
176	1990	K	高梨俊夫	下ノ坊B地点発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
177	1990	M	藤原 均 他	古屋敷遺跡調査報告書	山田地区遺跡調査会
178	1991	A	中山文人 他	平成2年度松戸市内遺跡発掘調査概報	松戸市教育委員会
179	1991	B	喜多圭介 他	上宿遺跡(印旛郡市文化財センター年報7の付録)	銚子津郡市文化財センター
180	1991	B	飯島伸一 他	岩戸城内岩戸市場遺跡	銚子津郡市文化財センター
181	1991	B	中山俊之	曲輪ノ内遺跡	銚子津郡市文化財センター
182	1991	C	千葉県教育委員会	埋蔵文化財調査報告書(高品城跡他)	千葉県教育委員会
183	1991	C	岡田茂弘 他	千葉御茶屋御殿跡 第3次調査概報	千葉御茶屋御殿調査会
184	1991	C	青沼道文	「御茶屋御殿跡の第1次・2次調査について」[平成2年度遺跡発表会および特別講演会要旨]	銚子津郡市文化財調査協会
185	1991	D	青木 司	佐原市内遺跡群発掘調査概報V(鶴崎城跡他)	佐原市教育委員会
186	1991	D	栗田則久 他	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告VI(佐原地区3)「大稲塚遺跡、樺木台遺跡、毛内遺跡、綱原遺跡、綱原屋敷遺跡、多田綱原遺跡、出口遺跡」	銚子津郡市文化財センター
187	1991	E,B	井上哲朗	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集-中島城跡・鹿渡城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
188	1991	G	津田芳男	長南城跡	銚子津郡市文化財センター
189	1991	I	忍澤成規	平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告(山木白船城跡遺跡他)	市原市教育委員会
190	1991	J	小高幸男	千葉県富津市内裏塚古墳群発掘調査報告書	富津市教育委員会
191	1991	M	高尾栄一 他	五反田遺跡II	五反田遺跡調査会
192	1991	M	岩松和光 他	鹿島町内遺跡発掘調査報告XII	鹿島町教育委員会
193	1992	B	大澤 孝 他	長田要害・長田長台遺跡発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
194	1992	B	齋藤 毅 他	和良比遺跡発掘調査報告書	銚子津郡市文化財センター
195	1992	B	木川邦夫 他	成田市下金山城跡発掘調査報告書	成田市下金山城跡調査会
196	1992	B	林田利之 他	千葉県成田市駒井野荒追遺跡	銚子津郡市文化財センター
197	1992	D	岡田誠造	神埼町西の城貝塚	銚子津郡市文化財センター
198	1992	D	村山好文	神代夏方遺跡、稲荷入遺跡、稲荷入1号塚・2号塚	銚子津郡市文化財センター
199	1992	D	黒沢哲郎	大慈恩寺遺跡	銚子津郡市文化財センター
200	1992	D	吉田博之	下男山遺跡	銚子津郡市文化財センター
201	1992	F	井上哲朗	松尾町山室城跡	銚子津郡市文化財センター
202	1992	I	矢野淳一	君津市内遺跡発掘調査報告書(久留里城跡)	君津市教育委員会
203	1992	J	高梨俊夫	千葉県中近世城跡研究調査報告書第12集-峰上城跡測量調査報告-	千葉県教育委員会
204	1992	J	小高幸男・小沢 洋	千葉県富津市内裏塚古墳群確認調査報告書	銚子津郡市文化財センター
205	1992	J	佐伯秀人	内裏塚古墳群	銚子津郡市文化財センター
206	1992	J	山本哲也	千葉県袖ヶ浦市文協遺跡	銚子津郡市文化財センター
207	1992	J	小高幸男	千葉県木更津市天神前遺跡	銚子津郡市文化財センター
208	1992	M	岩松和光 他	国神遺跡V	鹿島町教育委員会
209	1993	B	杉山晋作 編	佐倉城の武家屋敷跡は語る	国立歴史民俗博物館
210	1993	B		千葉県佐倉市高岡遺跡群I	銚子津郡市文化財センター
211	1993	B	井上哲朗 他	佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X「佐倉市南広遺跡」	銚子津郡市文化財センター
212	1993	C	岡田茂弘	千葉御茶屋御殿跡 第5次調査概報	千葉県教育委員会
213	1993	C	飛田正美	千葉市新田遺跡-平成3年度発掘調査報告書-	銚子津郡市文化財調査協会
214	1993	C	岡田茂弘	千葉御茶屋御殿跡第6次調査現地説明会資料	千葉県教育委員会・千葉御茶屋御殿跡調査会
215	1993	D	青木 司	佐原市内遺跡発掘調査概報VII(上小川砦)	佐原市教育委員会
216	1993	F	山下亮介	立山城跡	千葉県教育委員会
217	1993	F	小高春雄 他	土気南遺跡群III -大谷城跡・坂ノ越遺跡-	銚子津郡市文化財調査協会
218	1993	G	津田芳男	長南城跡確認調査報告書	長南町教育委員会

③調査報告書

番号	発行年	地域	編著者	書名	発行者
219	1993	G	津田芳男 他	桂遺跡群発掘調査報告書(神田山第三遺跡)	勸長生郡市文化財センター
220	1993	G		千代丸・力丸横穴墓群	勸長生郡市文化財センター
221	1993	H	半澤幹雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第13集-鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
222	1993	J	諸墨知義	飯野陣屋二の丸跡	勸君津郡市文化財センター
223	1993	J	黒澤 聡	平成4年度 千葉県富津市内遺跡調査報告書	富津市教育委員会
224	1993	M	横山雅彦	一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 I	茨城県教育財団
225	1993	M	宮内良隆 他	茨城県取手市下高井城跡発掘調査報告書	取手市教育委員会
226	1994	A	井上文男	城山遺跡	柏市教育委員会
227	1994	A	石田守一	羽黒前遺跡第1次発掘調査概報	我孫子市教育委員会
228	1994	B	井上哲朗	印西町小林城跡	勸千葉県文化財センター
229	1994	B	宮内理彦	宮内遺跡	勸印旛郡市文化財センター
230	1994	C		千葉御茶屋御殿跡第7次調査現地説明会資料	千葉市教育委員会・千葉御茶屋御殿跡調査会
231	1994	F	中野修秀	田向城跡	勸山武郡市文化財センター
232	1994	F,I	小高春雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第14集-土気城跡・池和田城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
233	1994	I	小林信一	草刈六之台遺跡	勸千葉県文化財センター
234	1994	J	中能 隆	内裏塚南方遺跡の調査「富津市内遺跡発掘調査報告書」	富津市教育委員会
235	1994	K	滝川恒昭・遠山成一・小川和博	葛ヶ崎城跡調査報告書	天津小湊町教育委員会
236	1995	B	木内達彦	本佐倉城跡発掘調査報告書 -戦国 佐倉城の調査-	勸印旛郡市文化財センター
237	1995	B	喜多圭介	白井台大名宿遺跡-佐倉市白井台地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書-	勸印旛郡市文化財センター
238	1995	D	鬼澤昭夫	千葉県香取郡小見川町大六天遺跡	勸香取郡市文化財センター
239	1995	F	吉田直哉	山中台遺跡	勸山武郡市文化財センター
240	1995	G	津田芳男	要害遺跡・要害城跡	勸長生郡市文化財センター
241	1995	J	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第15集-造海城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
242	1995	J	笹生 衛	平成6年度 千葉県富津市内遺跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
243	1995	J	當眞紀子	神田遺跡・神田古墳群	勸君津郡市文化財センター
244	1995	K	麻生正信・杉山春信 他	東条地区遺跡発掘調査概要	鴨川市教育委員会
245	1995	L	千葉県教育委員会	千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書I -旧下総国地域-	千葉県教育委員会
246	1996	A	白井太郎	平成7年度船橋市内遺跡発掘調査報告書(東中山遺跡(8))	船橋市教育委員会
247	1996	A	増崎勝仁	平成7年度流山市内遺跡発掘調査報告書(花輪城跡)	流山市教育委員会
248	1996	B	林田利之	白井屋敷跡遺跡	勸印旛郡市文化財センター
249	1996	B	横山 仁・香取正彦・溝口優司	一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書1-酒々井町本佐倉北大堀遺跡-	勸千葉県文化財センター
250	1996	B	香取正彦	一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書2-佐倉市高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡-	勸千葉県文化財センター
251	1996	B	高谷英一	上本佐倉上宿遺跡発掘調査報告書-本佐倉城下町の調査-	勸印旛郡市文化財センター
252	1996	B	能勢幸枝	佐倉城跡-市立佐倉中学校給食室建設に伴う埋蔵文化財調査-	勸印旛郡市文化財センター
253	1996	B	江森幹浩・喜多圭介	曲輪ノ内遺跡(第2次)発掘調査報告書	勸印旛郡市文化財センター
254	1996	C	平岡和夫	千葉県千葉市山王遺跡-発掘調査概要報告書-	山武考古学研究所
255	1996	C	白根義久	千葉市原町遺跡群発掘調査報告書II 台畑遺跡	勸千葉市文化財調査協会
256	1996	C	小澤清男・白根義久	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書-平成7年度-(高品城跡・栄福寺遺跡他)	千葉市教育委員会
257	1996	C	宮沢久史	千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告(正覚院館跡)	八千代市教育委員会
258	1996	E	高田博	八日市場市大塚・塔ノ前遺跡	勸千葉県文化財センター
259	1996	G	津田芳男	本納城外郭跡-2	茂原市教育委員会
260	1996	G	豊田秀治	千葉県中近世城跡研究調査報告書 第16集-真名城跡測量調査報告書	千葉県教育委員会
261	1996	J	諸墨知義 他	平成7年度 千葉県富津市内遺跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
262	1996	K	野中 徹・杉山春信 他	東条地区遺跡発掘調査概報	鴨川市教育委員会
263	1996	L	千葉県教育委員会	千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II-旧上総・安房国地域-	千葉県教育委員会
264	1996	L	井上哲朗 他	千葉県やぐら分布調査報告書	千葉県
265	1996	M	玉井輝男	茨城県北相馬郡守谷町守谷城址	守谷町教育委員会
266	1996	M	永越信吾・江上智恵 他	柴又帝釈天遺跡VII	葛飾区遺跡調査会
267	1996	M	永越信吾・江上智恵 他	上千葉遺跡	葛飾区遺跡調査会
268	1997	A	寺村光晴 他	下総国府台 I	和洋学園校地埋蔵文化財調査室
269	1997	A	関山 純 他	平成7年度松戸市内遺跡発掘調査報告	松戸市教育委員会
270	1997	A	峰村 篤	根本内遺跡 第4地点発掘調査報告書	松戸市教育委員会
271	1997	A	大森隆志	小金城跡(第4地点)	松戸市教育委員会
272	1997	A	寺村光晴 他	下総国府台 I	和洋学園校地埋蔵文化財調査室
273	1997	A	石坂雅紀	東中山台遺跡群	勸船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター